

川柳塔

昭和六十年十月二十五日印刷
昭和六十年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七〇二号

日川協加盟



No. 702

十一月号

■川柳塔七〇〇号記念出版

須崎豆秋川柳句集

ふるさと 復刻版

B6判一三六頁 定価一、〇〇〇円
(送料三百円)

発行所 川柳塔社

〒565 大阪市阿倍野区三好町2-10-16

ウエムラ第二ビル

振替口座 大阪 8-33368番

※お申し込みは本社へ。

▲カラーブックス▼

川柳にみる大阪

藤沢桓夫・橘高薫風共著

文庫判一五二頁 定価五〇〇円

発行所 株式会社保育社

〒530 大阪市東区上町一-一七

電話06(762)1731(代)

振替口座 大阪 6-12346番

※書店でお求め下さい。

料理がいきる
辛口の本格派



菊正宗

伝統の味を贈りものに……

日本酒で乾杯!

神戸・灘

菊正宗酒造株式会社

御 礼

西 尾 栞

いまだに感激にうちふるえています。
このたびは、皆さまの温かいお心持で
素晴らしく盛大な記念川柳大会を開催して
頂きまして感謝感謝の外ございません。
茲に謹んで篤く御礼申し上げます。

各結社の主幹の先生の御選や、日川協
理事長藤島茶六氏の祝辞、東野大八先生
のおはなしを頂戴して錦上華をお添え下
さいまして本当に有難うございました。
御出席の皆さまはじめ各位に謹んで厚く
御礼申し上げます。

最も感銘致しましたことは、従来の結
社意識を乗り越えて御出席下さいました
御温情、並びに、御遠方の方は前夜より

お宿泊下さいました御芳情は、何と御礼
を申してよろしいか、七重の膝を八重に
折って篤く御礼申し上げます。御出席下さ
るだけでも、有難いと思っておりますの
に、その節は過分の御祝いまで頂戴致し
まして、重ねて厚く御礼申し上げます。

こんな派手な企画が出来ました時に、
ご辞退申上げましたが、どんどん進みま
したので、私達は「生きている葬式やと
思おうや」と観念して受けました。死ね
ば一度は入る白木のベッドの蓋を開けて
いちいち御礼を申上げること出来ませ
んが、生きているうちやと、あの方も来
てくれはった、この方もお越し下さった
と頭を下げる事が出来たと思いました。
このたび、こんな立派な花道を作って戴
きましたので、この花道を六方踏んで、
川柳塔社の主幹を引退させて頂いて、後
進の方にこの活躍をお願いするつもりで
ございましたが、このたびの皆さまの盛大

な、ご温情に感激致しまして、逃げの一
手は洵に卑怯だと悟りましたので、老骨
に鞭うって、川柳道に精進致す気持ちにな
りましたから何卒よろしく願ひ申上げ
ます。

最後にご出席の皆さま方はじめ、企画
下さいまして、当日は勿論、そのポスト
ポストにご活躍下さいました方々に心か
ら篤く厚く御礼申し上げます。本当に有難
うございました。

金婚や河内茶粥と梅干と

枳酒の昂ぶりもよし喜寿の宴

本来なれば、早速御礼に馳せ参ずるの
でございますが、感激のボルテージが上
りまして、医師より静養をきつく申し渡
されましたので心ならずも失礼致してお
ります。あしからず御了承の程お願い申
上げます。もう一度有難うございました。
謹んで厚く御礼申し上げます。

座右の句

可愛らしい目になって来た酔うている (生々庵)

私の句

手を振って行くふる里に借りが無い

市川鱗魚

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

御礼

西尾 栞 …… (1)

人の和

西田柳宏子 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 …… (4)

自選集

東野 大八 …… (34)

■川柳太平記 (90) 川柳の群像 高木夢二郎 ……

阿達 義雄 …… (38)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (二十二丁―二十三丁)

黒川 紫香選 …… (40)

江戸川柳に現われた八百屋お七 (四)

水煙抄 …… (56)

西尾栞喜寿金婚・句碑建立五周年記念川柳大会

橘高薫風選 …… (60)

愛染帖

恒松 叮紅 …… (63)

秀句鑑賞

西出 楓楽 …… (69)

同人吟

水煙抄

人の和

西田柳宏子

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」とは孟子の中に出てくる言葉であるが、将に天の時、地の利にも況して人の和が大きな力を発揮したのが、過日の西尾栞主幹の「喜寿・金婚・句碑建立五周年」の記念句会、祝賀パーティーでのあの大盛会、大成功であらう。

出席者四四二名、記名されていないご親族を加えると優に四六〇名にも及んでいる。

当初この話が遠慮がちに常任理事会に出され、即座に全員一致で賛同し、時が経つにつれて盛上の熱気はエスカレートして川柳塔社挙げての行事に一気に昇りつめた。

会場については黒川紫香氏のご縁で新阪急ホテル紫の間が選ばれ、準備委員も栞ご夫妻と共に再三ホテル側と折衝を重ね、ホテル側もその熱意に動かされ、畑宴会受付係、中島和食部課長、田中会場主任と全面的な協力を得て着々と準備は進められたが、最大の難問は果して何人来てくれるかにしられた。事前投句の足並みだけでは心許ないが、最終的に四五〇名にて予約を締めくくった。

はじめはライオンズクラブや、市・商工会議所等個人的、地域的招待客も予定したが、結局川柳人のみの会として進められた。

恒松町紅自選百句		(64)
両川洋々自選百句		(66)
青森県川柳大会に参加して		(68)
亜欧旅日記(上) シルクロード編		(70)
初步教室		(72)
「勇氣」		(74)
一路集「糸」		(74)
「洗う」		(75)
柳界展望		(77)
昭和60年度川柳塔社同人総会		(78)
昭和60年度二賞表彰本社十月句会		(80)
各地柳壇(佳句地10選/春城武庫坊)		(84)

■句会だより「駒つなぎ川柳会」/里 小路 94
 ■11月各地句会案内 95
 ■編集後記 97

座右の句

菊の花明治は遠き世となりぬ

私の句

家計簿を揺さぶり続けて子が育ち

(作者不明)

北山 悟郎

一方、河内天笑、月子夫妻、小出智子さんらを中心に、こまごました当日までの準備や品揃え、或は当日の案内、受付、はては救護班まで揃えた綿密な役割分担、配置計画が企画推進されたことも見逃すことの出来ぬ大きな蔭の力と言えよう。

更に榎主幹ご夫妻はもとより、お身内の皆様方も参会者に如何にお応えするかと記念品その他に私共が恐縮する程のご配慮である。こうした皆の和の結果が大きく更に盛り上り、前後からの泊り込み、早朝から駆けつけて下さった同人、誌友を問わぬお手伝いの方々が夫々の持場、持場で、予行演習もないのにピタツと役割を果して下さった、ご協力、ご努力には本当に頭の下がる思いであった。そしてあの和やかな、楽しい大盛會を大過なく終了することが出来て、榎主幹ご夫妻をはじめお世話方一同本当によかったと心から満足感を持たれたことと思つ。

更に他柳社の方々からも大変温かい賞讃の言葉を頂いた事も素直に嬉しく受取らせて頂くことにします。

川柳塔の皆さん本当にご苦労様でした。有難うございました。この人の和を大切にしますます川柳塔発展にご協力、ご支援を心からお願いします。

なお榎主幹もお疲れのため入院静養しておりますがお元気で皆様によろしくとのこと。



西尾 葉選

竹原市 小島蘭幸

弘前市 波多野 五樂庵

ホームドラマのなかに帰ってくる父か
家計簿の赤を笑うて見る男

ジョークひとつあたためている無一物

猫が笑うと犬も笑うてくる家族

水道の漏れをときどき妻が言う

ブランコが揺れているのは秋のせい

境内で演歌を競うまつり笛

松原市 谷垣史好

文明が衰弱白が流行るのさ

単三形電池で動く軽い脳

老いの斑み昭和の御代がまだつづく

惚れているから返してほしくないお金

きょう口をきいたは集金人とだけ

筑波へも行かずキャッツも見ずに秋

一九九九年大つもごりの蕎麦の味

朱の文字を入れて寝心地たしかめる
使い捨て五十を四つ五つ越え

愕然と白髪みつめる下半身

豊作の匂い車窓を開けておく

齢のせいでしょうかバストを追う目つき

総代にたてまつられる金離れ

桜井市 岩本 雀踊子

左耳くすぐる他人がいて困る

凡人でよかった父の帽子掛

握り拳の中でもがいている私

糞真面目に生きてけだるい朝になる

日の丸云々アンタニッポンジンデスカ

能面の様な女の含み針

八尾市 高杉 鬼遊

十一月三日はかがやく人ばかり

看護料氣にして姉が病んでいる
ふるさとを語らぬ人へ墓も朽ち
遠い渚と軍靴の音が押しよせる
いくばくの血をちちはに承け継ぎし
来る時が来ればざくろも火を吐けり

島根県 堀江正朗

闇無限ぶつかったとき考える
幸せはいま噛つてる梨からも
妻を待つ日暮れの独り闇ひとり
物忘れ上手になって日の速さ
若い日の心で夢追う白い杖
眼を持たぬから太陽にせかされぬ

倉敷市 小野克枝

仲良しになれそう目尻の笑い皺
反対を向いて笑わぬのが味方
金持ちが金を出さない策を練る
要するに栖山コースであるらしい
美しく光る佳い日の良い涙
長生きをしたいさせたい種を蒔く

大阪市 西出楓楽

ハイライトシーンに決して居ぬわたし
まな板の上で言い訳せぬように
責任がないのでひたすらほめておく
幸せはけむたい人がひとり居る
雨の日に逢いたいひとで雨女
むつかしい年頃なのは親も子も

和歌山市 西山 幸

文箱にも秋の不安が満ちてくる
落し蓋明日の予感をあたためる
人非人にならないための嘘を言う
のし袋心の借りは返せたか
たとう紙を開けにくるのは秋の風
帽子掛けの帽子に溜まる会者定離

平田市 久家代仕男

同輩の悔み喪服を悲しませ
持ち駒が多く手違いばかりする
残暑なお厳し鰻屋値下げせず
罪のない糸瓜の下の法螺ばなし
日盛りの不平は蟻に未だ聞かず
負け犬に晩秋の月肌を刺す

兵庫県 遠山可住

素人の植木鉢には水が過ぎ
妥協せぬ個性に生きる除草剤
銀行には無力象牙の父の判
生と死とそもそも自由など持たぬ
自然との握手へ余生満ちて来る
だまされることには馴れているワイン

倉敷市 野田素身郎

台風一過鮮やか飛行機雲二条
ナイターシーズンが終わったら読む本を買う
パンの耳妻もやっぱり戦中派
ライバルとばったり泌尿器科で会い

蟋蟀よ今年は単身赴任だよ
定年が近いのに息子その氣にまだならず

豊中市 安 藤 寿美子

店員に外は暑いときかれ
方法はえらばぬ女のかたき討ち
子守唄うたえば痛む母の傷
昔のこと思い出してはおこり出し
涙して母のおしりを拭いている
寝たきりの母憎らしい事を言う

伊丹市 檜 谷 寿 馬

あと一枚向うに秋がある暦
別れの電話コードの捻れ直しつつ
動物園単身赴任の夫想う
殺された詐欺の男にある金齒

出雲市 原 独 仙

阪神が何故勝ったかと妻に説く
恥ずかしいことだが飯が待ち遠し

米子市 林 瑞 枝

一年草の誘う豊かなもてなしよ
ひと粒の種子に集まる陽の恵み
水甕を満たして送る火打石
風船と共に転がる瘤ふたつ
一本の大樹が枕から消えぬ
画廊出たふたりに青い風の私語

大阪市 西 森 花 村

影もまたヨボヨボ私に似て来たな
ガタガタになるまで男飛ばされる

松原市 玉 置 重 人

仕事ではない顔モデル横になり
遺産分けおとんば母が味方なり
禿けたってちゃんと散髪来やはりま
秋燈下立読み並ぶ紀伊国屋

大阪市 江 城 修 史

風化する面影かなし亡母の忌よ
セールの媚振る仮面脱ぎたい日
敬老は名ばかり孫の守りで昏れ
落丁に似た人生の隙間風
切り札を残す見事な捨てぜりふ
妻や子に蹉跌の悔は踏まされぬ

孤独馴れた頃巡る三回忌
巨神戦のぼせるファン居てしんしん
初恋の女を忘れるほどに呆け
お隣の主人そうよね養子型
爽やかな風婚約を乗せているヨット
血縁を造った父母は元他人

富田林市 岩 田 美 代

秋深し本音出たがるひとり言
ほろ苦い記憶は捨てた鯛雲
返り花そんな夢みるモノローグ
まずすぎる嘘の話に惚れました
翔べぬから芒と想いにひたり切る
感情を殺す受話器を持ち変える

ワンマンの机の位置は変えられぬ
みつ豆のおいしい店は知っている

馬鹿な金使い男おもしろし

無事でさえいればとそれだけを願ひ

グーチョキパー運命線は別にある

お元気ですねとは失敬なことを言う

松江市 小林 孤呂二

朋友相信じ酔うては肩を借り

通りすがりの目にも秋なり柿の色

シートベルトは窮屈だから歩きます

国債もちよつぱり増えてきた余裕

コスモスが咲いたビールから酒に替え

教育勅語も言えない政治家ばかりなり

松江市 柳 楽 鶴 丸

彦左と愛称で呼ばれて無冠

ついうっかり使った魔女の消しゴムを

妻のサンドイッチに勇気がはさんである

二重橋の上で糞をしている鳩

頭ではばつちり覚えているけれど

一糸まとわぬ父が羅漢の中にいた

松江市 舟 木 与根一

親不孝も一人ふえる筆不精

いつまでも子供で追伸念をおし

お似合いの夫婦でやはり婦唱夫随

積立てを内助の功と勘違い

ロボットもトビイロウンカへ腹を立て

夕景が素敵小都市のままが良い

倉吉市 奥 谷 弘 朗

無欠席その情熱を高く買い

根回しが効いてすんなり議事決まり

重荷とは思いたくない人の世話

言う奴は言わせておけに成れぬ口

六十年輪廻重ねて業に生き

下積みに耐えて汗拭く太い指

米子市 小 西 雄 々

梨の味がわらず亡父母の忌がめぐる

気楽でも首輪がきしむ宮仕え

しあわせを他人に言わぬ軽い自負

仮面から突然もれたプロファイル

敬遠のボールも来ない日のあせり

日に一度フオークボールを妻使う

島根県 西 村 早 苗

ロマンスに終止符打って縁すすむ

逃げ道が浮かんでからの酒の数

食べずとも死なぬ高嶺の松茸よ

口だけの強さ女がふと崩れ

先方は気乗り断る語を探す

西側の窓すばらしいいわし雲

島根県 堀 江 芳 子

おとうちゃん負けたらあかん竹を踏む

意気込んで市場籠から出す噂

ゆきずりの風も味方と思うとき

忘れたい事だけ胸に住む弱さ
手を引かれなに羨まぬ白い杖
総入歯はずして寝顔飾らない

熊本市 有働芳仙

風の糸切れると寒い掌

母にだけ分る娘の顔があり
恋心青いリングのまま熟れる
花火師の闇は暗いほどいい
床柱左遷の涙見て終い
台風が近い港の息づかい

岡山市 時末一灯

健康と書いて幸福論と読む

考えず迷わず生きてロボットよ
冗談だよという刃にある殺意
金で買えぬものを見つけて眠られぬ
過ぎて行く怨み無色になつてくる
ハイヒール転び都会の裏に出る

岡山市 土居耕花

バナナ剥く男は何も意識せず
風鈴をも一度度振つて片付ける

向日葵よ天動説を信じよう

地球散る日は星に居て眺めよう
家迄は尿を持たせるモーニング
ロボットの様に天皇歩かれる

米子市 林荒介

赤染にちちよはよと彼岸花

秋彼岸烟にむせぶ蟬の墓

森閑と月ありて僧堂の屋根

影踏んで父の輪郭なぞるなり

通り雨祭太鼓をかくさねば

曼荼羅を抜け出して万天の星

京都市 都倉求芽

書出しが何時までたつても残暑なお

暦には結局勝てぬ風の策

秋の陽へそろそろ今年の懺悔録

太陽の恩も地球が回るから

近頃は男も大ぜい女坂

窓口も細かい説明は方言で

倉吉市 渡辺独歩

ワンバウンド妻のミットが内助する

耳よりな話にゆるむ耳の栓

みぞおちに溜めた祈りは深くなる

阿蘇の灰お前火の子か土の子か

音速に負けたら序列から外す

病葉のことはコメントせぬ枕

寝屋川市 宮尾あいき

二泊三日の旅

米人も見学原爆記念館（広島）

琴の音も津和野おうすの味になり

萩焼の重さよ財布の軽さよ

旦那のお尻たたくに手頃のしゃもじ買う（宮島）

蟻地獄優しい人に手を引かれ（秋芳洞）

旅帰り食事の世話がうとましい

大阪市 津守柳伸

星の降る街で歯車きしみだす

最終便ついてドラマが動きだす

電話魔がいて土曜日の夜になる

も一人のわたし支えてこうるさい

健康がとり得歯科医へ週一度

プリンスの孤独が自我を募らせる

八尾市 宮西弥生

ばて気味の今日遺影に近くいる

禅寺に坐して小さな秋を知る

留守番のぎっくり腰へ電話鳴る

カルチャーで昼寝をしている八十歳

まだ働く道がつづくよ種を蒔く

堪忍袋ふくれて闇が深くなる

和歌山市 福本英子

紅ひいて出たのに座席譲られる

キャラバンシユーズの紐締めなおす下り坂

退職金出るまで待っている離婚

雨降って地固まらぬ中別れます

矯めすぎてまたも積木が崩れだす

故 浦野和子さんを悼む

ヤジロベ―好きな貴女が独り逝き

和歌山市 松原寿子

君の掌に堕ちる一途な想いとも

見詰められ慕情がすかに熟れてゆく

断ち切れぬ煩惱と知る黒髪よ

背を向けてそのひとことを石にする

手鏡に還らぬ刻をあたためる

きずな橋どうにもならぬ愛を抱く

和歌山市

おふくろと呼んで息子等遠ざかる

人生のいろどり花咲き花が散り

秋風へ旅の誘いのピラがゆれ

もう泣けぬきびしい明日へ脱ぐ喪服

他人事の噂へ女の好奇心

むつかしい道を選んで弾む靴

大阪市

心齋橋うぬばれ鏡ふところに

心までからからにして夏が過ぎ

孫二人笑い袋の口を開け

萩の花ほどの色香をまだ残す

それからの処置に困っているワイン

敬老の父の笑顔を見て帰り

西宮市

秋風に肩を押されて賭場を出る

霧が湧きやがてかなしい壁になる

秋の宵とどく越中麦屋節

遊び着の袂にまでも火を隠す

手折られて花のさだめと疑わず

またしても昨日の足袋を低く干す

西条市

片上明水

内芝登志代

柳原静香

林はつ絵

本家からお誘いがある秋の琴

転勤地少うし口が軽くなる

秋までに消えそうにない夏の傷

アルミ貨の届かぬ位置に賽銭箱

夏座敷二三日続け来る仲人

三十三回忌まだに不孝責められる

和歌山市

堀端三男

年金が煙草一箱分あがり

銀行は年金だけのおつき合い

時間厳守何時もいらいさせられる

ジェスチャーで補足している舌足らず

シャッターを頼むカメラに待つ二人

ほどの程がなかなか見つからぬ

和歌山市

垂井千寿子

低い所でよく聞こえてる裏話

結婚という美しい賭けをする

天神さんの細道で夢拾ろてくる

欲求不満奇抜な服に包まれて

いらいらの訳は眼鏡を忘れたり

入道雲へまだ負けられぬ夾竹桃

鳥取県

林露杖

国体を指呼にサルビア燃えに燃え

四十年水漬く大和の菊の紋

会う輪廻会えざる宿世孤児帰る

羅の黒に女の火を包む

涙涸れ寡婦の砦に立てこもり

裏切りを救せぬ不眠時鳥

寢屋川市

江口度

雨降れば降ったで文句のある限り

森は静かでタイムトンネルかくしもつ

水はもう冷たいだけの白い秋

茸狩り通草の棚をかくぐり

薬のように妻の笑顔を見に戻る

良い返事ふくみ笑いが気にかかる

寢屋川市

稲葉冬葉

連休に他人様のこと思うなり

おんなの日記昨日のことは書いてない

無理な話を蛇口から洩れていた

真心を平気で捨てる春の馬車

ばあちゃんと呼ばれて我れに返るなり

他人の情に驕っていた自尊心

豊中市

田中正坊

重欧の旅(五句)

足を知る暮らしか包の老夫婦

黒海の波を見ているティーカップ

ギリシャ語の蟬しぐれ降る丘の道

ワイン眠る倉で静かに飲むワイン

夏の夜の夢は書かない旅日記

玄関に隣の犬が来て座り

尼崎市

春城武庫坊

駆込寺の門を男が叩いてる

調子よい返事で何か落ちつかず

一円を落とすと一円だけの音

無人駅乗り込んで来た秋の風

折れたくはないが世間の顔がある

行き先をじっと見つめる父の雲

唐津市 仁部四郎

神鹿でないから餌を買ってやり

ヤンキーの皮膚弱そうな京の夏

千二千夏の灯寒い念仏寺

地藏盆宿題帳も持って寄り

竹光で破邪顕正は映画村

古都税を払って公式参拝す

米子市 菅井とも子

飯粒を拾えば苦しい日に戻り

ランボーの怖さを知った夏休み

銅剣が出て故里も陽が当り

白無垢を着せて追出す愛もある

祝杯にそっと泪も注ぎたした

視界十K火口で写すフルムーン

米子市 青戸田鶴

ヨーロッパの旅(五句) 大英博物館エジプトの部屋で

ロンドンで王のブロンズ落着かぬ

無造作に名画プラドの美術館

中世のトレードそのまま丘の上

モンマルトル晶子もふんだ石だたみ

ムーランルージュおしり可愛いパリの夜

芒野が乱れ不安につつまれる

和歌山市 坂部紀久子

立秋の約束忘れている残暑

見えずいた嘘を聞いてやる疲れ

テレビに出ても偉いとは限らない

一日で崩れる髪を結うて来る

じろじろと日本の着物着て見られ

脱線はまだまだあるだろ五十坂

大阪市 本間満津子

三世代の干し物気もちよく乾き

無事な肩抱いて言葉はみな忘れ

はハハイハイ良い年寄りってなんだろう

道くさの楽しさ知らぬハイウエー

自家用に買ったこと無いマスカット

お袂れにひとさし舞うて枯葉散る

神戸市 山口美穂

近隣に檜山がある世の移り

新聞の横文字老母がきいてくる

老母との二人三脚步が合わず

庭に葱植えて中流にはなれぬ

仏壇へ庭の萩です桔梗です

秋霖に無性に恋し人の声

岸和田市 島崎富志子

おつとりと幸運んでくる婿で

娘のために使うつもりへのソクリで

あれもこれもと予算オーバーの母の胸

母と似たもの同士で安堵する

はつとした心淋しい調度品
娘を出すときめた心がまた動く

尼崎市 春城年代

月の夜は男も女も騙される

泣き黒子ときに女の武器になる

こんなわたしと知ってほしいジンフイズ

いつときの思いに更ける木綿針

たんすの底の亡母の伏字が読めました

街のあかりにすっかり負けたお星さま

近江八幡市 前川千賀子

おかめ恋しひよつとこ恋し彼岸花

合わせ鏡の裏表まぎれもなくわたし

子を放ちおんな苦もなく脱皮する

余韻なお覚めず影法師と踊る

預金ゼロ借金ゼロで良妻で

振り出しに佇てば足跡消えていた

八尾市 宮崎シマ子

道筋の犬の名前を皆覚え

冷戦中と知らず多弁の友が来る

目覚めれば秋晴れの湖旅の宿

幽霊が一足先に来た計報

歯の治療食欲の秋旅の秋

湯上りの肌を盗んだ秋の風

松原市 佐藤藤子

あきぐくらは私は強くなりました
後ろ手に戸を閉めて去る未練かや

井の蛙井戸に帰ってはつとする
何不自由ないウエストが又細る
可愛さがまだ残つて膝小僧
旅立ちや十三日の金曜日

西宮市 杉浦婦美子

心理学に興味をもって病んでいる

錠剤は確実にへり季は移る

九ちゃん死す中身を濃ゆく生きた人

柳誌ありまだまだ私呆けられぬ

投薬にやさしい言葉も入れてくれ

長生きをしなけりや病気の愚痴もです

西宮市 西口いわゑ

秋風よ恋をさらって行かないで

親と子の小さな門にもあるルール

朝蜘蛛を殺してすこし悔いている

赤ちゃんへみんな平和な顔になる

赤とんぼ小さな祭見つけたり

無事な日が続いて神を疎んじる

西宮市 奥田みつ子

誕生日庭のさくらも同一年

裏庭にトマト実らせている内助

もう一人の私と握手する悪魔

ライバルもきつとこの月見てるだろ

神さまにも鬼にも門はあけたまま

裏を着て恋しい人の夢を見る

西宮市 藤村宏子

げんまんの頃は仲間が多かった
木洩れ陽に母と歩幅が合っている

思わくの通りにいった手を洗う

芒野の空にすすきのような雲

髪洗う予感を信じはじめてる

匂い袋祖母の強さを受けついで

岡山県

負けて勝て負けて勝てよと風の私語

灯を消してから悔しさがよみがえる

千羽鶴の一羽に裏切り者がいた

あたたかい言葉が欲しい夜の孤独

プランにはなかった危い橋渡る

島根県

コスモスを道路掃除が引っこ抜き

古武士的商法太りも痩せもせず

お隣が持ってくれた忘れ傘

心までマリオネットは操られ

ロボットにそのうち首を締められる

岸和田市

だんじりがそこまで来ている鉦太鼓

地車も眠る夜中にすだく虫

真夜中の二階気になる病妻の咳

カーテンを開けるとのどかな朝の部屋

わが青春ゴマも摺らずに悔いもなし

松江市

幸せへ突然襲う五十肩

嘉数 兆代賀

小 砂 白 汀

福 浦 勝 晴

恒 松 叮 紅

巡る忌へ彼岸が近い紫苑咲く

方向も唄も音痴で善人で

寺町は昔の音がまだ残り

屋根瓦ポツンと農継ぐ子がいらない

兵庫県

石で打つ釘のきしみが背を抜ける

夢を追うとき少年のハーモニカ

さりげない科白で傷を撫でにくる

訃を聞いてひそかに捨てるものがあ

る主義少し曲げて楽しく輪を保ち

京都市

訃報の朝も朝顔一つ咲く

長生きの秘訣を問えばただ笑い

三拍子ではない木魚のリズム

御供えの花も代議士いっち上

きわどい本老眼鏡で見てください

米子市

どんな時化でも父の船生きのびる

階段を斜めに歩くかたつむり

思い出の皿光らせて一人箸

直球を一步下って受止める

残されて手のり文鳥飼いました

米子市

じゃんけんで勝ち進むのは雑草だ

思い出が燃える旅路を急がねば

健康な眠り無欲のまま眠る

辻 文 平

松 川 杜 的

野 坂 な み

田 中 亜 弥

闘牛に育ちそれでも可愛い目
後ろ姿とおい記憶の母に似て

倉敷市

小幡里風

十月の風がおしゃれによく似合い

その手には乗らない風が吹いている

空っぽの宝石箱に夢を詰め

エリート列へ号令かけたがり

雑音がないから虫の音が冴える

玉野市

小谷仙山

善悪のその中間に居て迷い

法律のその境い目に種をまく

やしろべーどちらが先に草臥れる

昔むかしの話の好きな一円貨

心配の種は子供がまいてゆき

島根県

榊原秀子

下手な嘘思わぬとこでばれるもの

困らせる手紙ばかりを書いている

話題途切れ他人の顔になるこわさ

片付けが下手な女で裏切れぬ

甘くみたのかわたしを香具師が呼び止める

大田市

藤田軒太楼

噂とは似ても似つかぬお人好し

越して来た女噂の嬌態ごなし

気兼ねなく使う恩給受ける幸

年金をもらう月です秋さやか

年金を楯に強気の老夫婦

和歌山市
身の上は僕にそっくり一円貨

ジャンボ機墜落トンボは瞬に落ちぬ

祭壇を立派に飾るくらいなら

一円貨拾う勇気のない背広

亡き友の顔も涼しい秋の夢

仙台市

川村映輝

わが家では一万歩から朝が明け

カタカナで書いたところが誤解生む

悲しみの涙へ心ないマイク

ボケ老人の記事妻にも見せてやる

よい医者を探せとテレビ無理を言う

東京都

増田次章

衣食足り日本礼節求められ

新札も値上げもみんなすぐに馴れ

急逝をうらやましいという本音

ストレスの解説うなずくことばかり

糖尿へ反逆せんざい二杯喰う

今治市

越智一水

恋知って女はお湯の音立てず

許す気はないのに許す月の影

一匹で歩けば蟻は殺される

父の十七回忌

蟬の声だけは変らぬ父の忌よ

父の墓酒をかければしゃべりだし

大阪市

河井庸佑

裏話せぬから体面保たれる

管理職じつと耐えている孤独

善悪が小さい心去来する

放任のつけが回って来た積木

いつかどに出来る自信がくつがえる

鳥取県

清水 一保

大の字に寝て川の字にうらやまれ

かぶと虫角あるばかりに召取られ

一滴の水を集めて大河とす

六十の坂に靴底ちびた音

三十数度家のおしんに炎暑なし

倉敷市

稲田 豊作

神さまを買う気で御幣の代払う

年寄りのハイカラ素敵だわと嫁が着せ

やがてやがて一人が残る老い夫婦

俺よりも出来の良い子を持て余す

無口の母が余程うれしい弾み声

榎原市

岩井 本蔭棒

ロボットにテクノストレス労われ

敵攻めて来ても反戦ですか君

恋人の名前を大書する砂丘

盆栽はとてもしゃ死ねん数に増え

男性を負かして得意なの貴女

守口市

羽原 静歩

煩惱のピエロに着せたい柄を選ぶ

洗濯挟み浮世の苦労働吊りに

浮かばれぬ仏もあって読経する

オハジキとハジキの違い考える

わがいのち無心にまわる風車

堺市 高橋 千万子

忘れてた仏も盆で思い出し

しみじみと家の狭さの夏休み

噂の輪ぬけて噂の人思う

温泉のタオルとうちの湯にひたり

無視されてからの私に炎えるもの

笠岡市 松本 忠三

久しぶりその一言にだまされる

宴会の段どりだけの役目なり

転落がのぼせあがった結果なり

鉢巻が解けそうであり不吉なり

罪科を洗う遍路の旅静か

諫早市 原田メイシユン

世話好きが飲み屋のつけまでもって来る

言うだけ言うて己の粗を出し

奥方に申し訳ないマダムついて来る

現代っ子お経のリズムにガムを噛む

葬儀屋の涙は有難涙かも

神戸市 仲 どんたく

レントゲン悪女のように影残す

掌の中の虫を鍵っ子とおしむ

下駄の恋浴衣の恋が稔る秋
衣かける松が天女へ見あたらず
一と雨が変身させた夏と秋

柳井市 弘津柳慶

本当の事は隠せと弁護団
人情も割り切りエリートがのさばって
酔いが廻って本当の事さらけ出し
部長に合して詩吟習い初め
ささやきがピタリ止った咳払い

米子市 石垣花子

虹を見る皆んな優しい目になって
身ぎれいにしてから山へ足向け
紅皿を持てば女になる役者
深く打つ釘はまだまだまかせない
女手に素直になれぬ釘の性

美祢市 安平次弘道

罪深いおんなと思う裕足よ
家元の正座崩さぬ夏羽織
不漁とは見えず漁火美しい
風の便りに聞けば故郷も無人駅
補聴器をあてると溜る嫁の愚痴

大阪市 中川滋雀

一病息災敵を愛する余裕かな
おごそかな一発今日もたしかなり
安全ベルト保険はかけていますけど

想像にお任せします目鼻立ち
うっ憤のばたばたとちりはたき

和泉市 西岡洛醉

中流の窓に安楽椅子の顔
縄のれん大阪弁が好きな顔
自画像の裏側にある黒い点
年金の余生に今日の雨しきり
煤煙に負けぬぞ夾竹桃の赤

呉市 林野甦光

老眼に変えてあしたはバースデー
ひぐらしと陽が落ちかかる妥協点
網焼きの煙に決意定まらぬ
饒舌も手振りも派手なエトランゼ
あめんばう雨が近づく日の多忙

大阪市 天正千梢

風穴を上手にあけて深呼吸吸
足の立つ深さで人生渡り切り
文明のサイクルとまる送り火で
遺言状入れてるだけの貸金庫
からし漬今年の茄子は粒ぞろい

東大阪市 森下愛論

貸してからさっぱり家に寄りつかず
成せば成る努力知って成さぬなり
綺麗どこ並べているのにもう酔うた
お向いが美人で欠伸かみころし

ご馳走のサラミ入れ歯にもてあまし

下関市 国 弘 半休門

病床より

半年も寝てると医者のこととも言い
運命は天にまかせと他人は言う

クラーで板にされそうな冷えが来る

お盆も過ぎて巨峰で見舞われる

健康が崩れて不治よと消光す

京都市 山 本 規不風

冗談がとおらなかった鬼の面

赤いきつねがもう中国で住み始め

口止めにうなぎまむしを食わされる

合槌をうつらうつらと打たれてる

相性が悪い夫婦で仲が良い

宇部市 平 田 実 男

出血大売り出しなのにこの笑顔

見せかけの善意で敬老会がはね

女強し母女房はなお強し

サラ金に勤めサラ金利用せず

送別の酒飲むほどに汚えてくる

岸和田市 古 野 ひ で

呼んだとて届かぬ亡夫にまだ縋り

友情にかこまれ倅せ噛みしめる

打水の先へ先へと飛ぶ蛙

秋風へ約束事が多すぎる

気にかかる事かたづいた白い足袋

新宮市 川 上 溪 水

ささやかな脱税パチンコ屋で儲け

困ったらいと行ったら留守ばかり

手の届く位置で頑固な栗のイガ

覗き穴の位置から返事がある団地

秋風にいろんな思慮が付いてくる

岡山市 川 端 柳 子

かく逢った別れた無駄な人居らず

血液型知りたい孫がひとりある

入れ歯して素敵な笑顔もう出ない

役柄が言わすくすくつたい言葉

ふり向けば夢ははかなしさりげなし

七尾市 松 高 秀 峰

貧乏が薬になった負け惜しみ

金塊に騙されてからする郵貯

妻に舵委せて平和な日を送り

一ランク落したらしい嫁が来る

それ程でなくても褒める嫁姑

富田林市 藤 田 泰 子

あすなろに星まで届く夢があり

街の灯に飽いて故郷の白熱灯

掘り過ぎた墓穴の中で喘いでる

来年に着る夏服を買う九月

やすらぎを求めて川は海に入る

富田林市 田形美緒

巨人から阪神ファンに変る母
良い話ばかり街から便りくる
家族には見せない顔を持つ職場
遊ぶのも大義名分いる私
欲と欲役者が一枚上でした

八尾市 山下みつる

末っ子の宝可愛い雨ガエル
指先でちよつとつねつてあだな恋
田や畠休耕して迄輸入する
無謀だと他人の勇気あざ笑う
滝へ来て心の中を洗つとく

高石市 牛尾緑良

地平線があるから男駈けてゆく
ライバルも燃えてるらしい仕切線
式次第誤字がありますふたつ三つ
末席で帰りの予定打ち合わす
自爆して明日に生まれかわろうか

芦屋市 竹中綾珠

北海道から宅配便で来たメロン
外人の陶芸一味違ふ物が出来
涼風にほどよい秋の散歩道
散歩道挨拶交す人や誰
宇宙服の生地を着て歩き

出雲市 石倉英佐子

追いかけて追われてゲームしてる恋
女手で生活支える糸切り歯
前だれの真赤が好きなの石仏
軽い口男は軽く計られる
トラブルの要はひとり雨女

鳥取県 森田布堂

だしぬけのクシヤミに猫が飛んで逃げ
ロボットに似た蟬螂の動きよう
道連れに他人のうわさ聞きあきる
朝飯をまだ食わせぬとげははじめ
夜の蝶チップで建てた家に住み

島根県 錦織文子

ウイंकはあなたとだけの合言葉
レントゲンびつくりするよな事も言い
二人三脚折り返し点はラムネ色
紫の花の素直さ信じよう
ほうせんか七人の敵にも負けまいぞ

大阪府 坂口公子

法師蟬鳴いて井戸端静かです
満月よ西方浄土照らしてか
自分まで売ってしまっていた誤算
喰わず嫌いであんなもんこんなもん
女ですもの死ぬまで見栄を抱いてます

竹原市 森井菁居
休止符が無い熟年のスケジュール

すごまれて我が家に防犯ベルが無し
お彼岸や群れる藪蚊を払えない
来て欲しくない高校の参観日

間に合つてマース団地の覗き窓

大阪市 藤田 頂留子

辻斬りのような引逃げ事故現場

売切れかホツとするよなおしいよな

近道を早がてんしてとおまわり

牛歩でも足ふみだけはしたくない

誠実に土にみあつた花をつけ

大阪市 北 勝美

関取にシルバースートの無い嘆き

行きずりの人に箒をねぎらわれ

順番が狂うて老婆悲しませ

雨降つて夾竹桃の二番花

君が代の君を素直に読み給え

鳥取市 森田 熊生

見栄捨てた裸足砂丘の砂が鳴る

シーズンが終つて浜の砂憩う

原点に帰ると解決策があり

成功を亡父に報告して眠る

残業で聞くナイターが負けている

鳥取県 金川 満春

今の世に内助の功は忘れられ

台風の進路気になる娘の婚家

父と子のキャッチボールの触れ合いよ
最高の便利重宝妻がいる
贅沢に二十一世紀が怖い

河内長野市 井上 喜酔

風向きが変ると怖い四面楚歌

倅せなりズムのんびり妻の里

寺の虫諸行無常の声で鳴き

舶来のワイン日本でけつまずく

ハイミスの愛が静かに燃えてくる

奈良市 森田 カズエ

ためらいを秘める唇紅うすく塗る

出しやばりを操る糸がもつれだす

老母からの電話梅酒のこととも言う

一手先よむ性格も母に似る

無器用な指を組板みぬいてる

町田市 竹内 紫鏑

急停車男女でこうも違う声

自適同士ひと月かけて返事書く

角封筒有終の美をかざる友

絶句する癖転勤でもう知られ

硬と軟歯科と床屋に週刊誌

寝屋川市 柴田 英壬子

こぼれ萩無聊の散歩道にゆれ

鰯雲化粧くずれをしなくなり

秋晴れの祭日日の丸映えるのに

干し柿の甘さ乾いた胸に沁み
求人欄なかなか年齢と符が合わぬ

大阪市 黒田 真砂

想い出はいつも美し墓洗う
熱帯魚の歎き知ってた水中花
今日のノルマじっと見て居た水中花
美しい肌寄せが満ちあふれ

佐渡旅行

悲憤の涙秘めて松風音もなく

大阪市 神夏磯 道子

みだれ萩女の業が美しい
おだんごで話す悩みは知れている
現解する気持にさせた秋の風
姑洗うた食器を洗い直す罪
齒車のくい違い直すに小半日

貝塚市 行 天 千代

使わねばだんだん惚けて来る頭
外孫の小五空手で金メダル
母と子を完全看護分離す
工芸展ため息が出る絵に出会う
AB型恥じらいも無く奇抜な服

今治市 矢 野 佳 雲

拝まれて石は仏になりすまし
洗うてゆくと本当の味方まで不気味
有頂天そんな帽子の被りよう

単身赴任妻がひよっこり来て慌て
一城の主の壁がベニヤ板

岸和田市 原 さよ子

自転車を押して駅まで話好き
孫の出番済めば居眠る演奏会
旅なれば女も見てるストリップ
嫁の身になってやりなと叱られる
思いやる心で繋ぐ嫁姑

浜田市 中 川 幸一

慎重という臆病で立ち遅れ
橋の上から阿波の渦潮みる国費
御曹司中味は問わぬ七光り
原爆を知った不幸な世界一
下請けのその下請けがこき使う

出雲市 園 山 多賀子

スイートコーン何さ南蛮黍のこと
泥臭さ抜けぬ女に祭笛
機智に長け女の探す可能性
白緋りウマチを病む女とやら
機に応じアドリブばかりの夫婦独楽

出雲市 板 垣 夢 酔

イミテーション宝石箱でいびられる
黒色が足りない寡婦の絵の具皿
退却のラッパは妻に持たせとく
大法螺のふくらみ針で突いてやる

老いもまた楽しからずや年金日

倉吉市

渡辺 菩句

金婚式泣いた笑った五十年

高知県

松岡 三吉

扇風機よわたしの首も廻らない

体温を超えた言葉を飛ばして

蟬しぐれ中にだんまり蟬の彼

昼寝して火宅の人として目覚め

浮き袋枕にラッコになってみる

岸和田市

清野 こう

寝ずに待つ姉女房が鼻につく

姫路市

松浦 輝月

ヌード写真に見つめられてる男部屋

切符一枚明暗分けた飛行事故

上向けば九ちゃんの星笑ってる

夏送る愁いを秘めて地蔵盆

待望の雨とは言えぬ俄雨

守口市

野呂 右近

好きな娘の尻を狙っている輪ゴム

唐津市

久保 正敏

きびしかった残暑を話し秋の旅

秋も又恋の季節か芸能界

此の月の月こそ見んと物供え

少ししか食べぬが豊作とは嬉し

一と言を控えて保つ茶の間の和

高知県

赤川 菊野

辻斬りが出そう土塀の続く町

唐津市

浜本 義美

ふところ手竜馬がすれば絵にもなり

お喋りの話半分聞いておく

何もかも見ぬかれそうな眼に出会い

生きて来た年齢はかくせぬ鏡ふく

シナリオにない人生を強いられる

雷よねた児が起きるお静かに

唐津市

田口 虹汀

明日帰る娘だゆつくりと寝せておけ
ゆつくりと漕げば彼岸も見えて来る
ライバルに感謝夫の今日の椅子
止り木に見るライバルの爪のあと
夢一つ持たぬ男の高軒

名古屋市

越村 枯梢

僕はピエロ妻も頼つべに紅をひく
運のない男で漫画の中に住み
他人ごとのように鳴る空財布の鈴
病棟も告別式もＣクラス
方向音痴の夫で手綱緩めない

西宮市

野呂 鶴汀

断崖の後ろに居る人信じよう
盛夏床西瓜三ツ四ツ並べられ
夏座敷どこから来たか蟻二匹
残暑身にこたえてすすするトコロ天
ライバルを褒める卑怯な男にて

東大阪市

崎山 美子

待ち時間の長さへ虫歯うずきだす
待ちばうけさらさら空しい砂時計
検温の声に病院の朝があけ
生還の報へ一息つく茶の間
プロポーズなかなか言えぬ遠花火

和歌山市

神平 狂虎

ささやかな人生だった亡父の椅子

弾き語り秋の深さをうたおうか
人間が怖いと思う流れ星
風の中少し言葉が過ぎますよ
行きずりの風と小さな旅に出る

大阪市 鈴木 節子

ボタン一つ取れたぐらいの人が好き
マンネリに妥協する日の不眠症
成り行きで任せた舟は最終便
とどの詰まりは老後のはなしになっている
一盛百円のきゅうりに裏切られ

松原市 北野 久子

空は嫌下は地獄の船も嫌
お化粧の持ちも楽しい秋の風
ああ女着たい食べたい遊びたい
腰しやんと伸ばして入る喫茶店
聴こえない耳へこだわるイヤリング

大阪市 板東 倫子

地獄絵をテレビが見せる熱帯夜
飛行機をこわがる人を笑えない
高熱を発し地球が病んでいる
到来のワインの封は切らぬまま
不機嫌な低血圧の女店員

寝屋川市 岸野 あやめ

孫去んで茫然と居る夜の秋
御本尊くしゃみをなさる京の寺

話さねばならぬことあり冬近し
ホス病めば越後はもとの雪の底
諍いはしても此所まで埒守る

和歌山県

天満 三千代

手をついて万感こめる嫁く前夜
嫁がせる父の涙は酒と呑む
紋付の重さを堪える日の長さ
出番まだ来ず到来のネックレス
唐突の発言会の流れ変え

米子市

澤田 千春

夕映に父が唄うよ枯れすすき
誕生日自立の石を積み重ね
そば枕私の一部始終知る
傷深い心に凜と鬼あざみ
挫折して共に内助の夫婦です

高槻市

竹内 花代子

コップ一杯一気に飲めぬ老いの汗
ペンの字がよろめいている咳のあと
いろいろな犬の散歩に逢う散歩
亡夫の手のうずき知ってる扇風機
寂しさに胸の痛みも一周忌

島根県

松本文子

ぐつと目を閉じた儘聞く海鳴りよ
どん底で眺める月よ人の背よ
黒粋の亡夫の笑顔が優しすぎ

哀しみを一皮脱いで今日を終え
電卓の独りばつちと知っている

尼崎市

奥山 美智子

さわやかな音で流れる母の川
孤独かな庭いっぱいに花咲かせ
秒針の刻みに惚けがおしよせる
ちちははの音で織りなす回顧録
世のすたれ男の好きな赤烏帽子

大阪市

長谷川 春蘭

青すだれ客待つ部屋のととのいて
コスモスがゆれてけたたましきはもずの声
いわし雲追って故郷を思わざる
旧街道靴をいじめる石畳
訪えばすぐ涙ぐむ母口すくな

和歌山市

福井 桂香

コスモスの道で小さな恋拾う
ケチャップの赤も嫌いな母であり
性善説信じていつも馬鹿をみる
まっ白な腹ですバリウム飲んでます
就職をきめて満月仰ぎみる

鳥取県

森山 盛桜

一度だけ男が握る骨がある
ゴキブリの足から冬がやってくる
うつ病を映す都会の窓の列
物は何だろうと影は円くあれ

キューピーの首を見つめている乱視

堺市

柿花 紀美女

気疲れの一日だったしまい風呂

サーカスの象の目静かに耐えている

若き日の遠泳母の自慢なり

子等巢立ち庭の拓榴ははぜたまま

精一ばい育てたはずの子との距離

大阪市

吐田 公一

亡母の茶の香りが残る古瀬戸碗

器用に箸持つてすき焼ワンダフル

廻り道した人間の温かさ

定退の心構えは妻がさき

洗いのもの済ませて女にかえる妻

羽曳野市

佐野 白水

月詣りのように老宅を子が訪ね

老友は遊びに行った話行く話

ゲートボール旅のグループから離れ

水着また濡らさぬまで秋の風

夏バテを知らぬミノ虫冬仕度

岸和田市

芳地 狸村

だんじりの屋根に天下を誇る顔

お祭りに市長法被でおどり出る

筋書はみんな知ってる黄門記

たつぷりと無駄買いつけるクレジット

花嫁が見つかり母がはつとする

出雲市 吉岡 きみえ

グラスゆれ心の乱れを手につつむ

情熱にもえてコッペパンかじる

ひとり子と別居の条件嫁決まる

影踏み少女に影がうすくなる

寝て見ても起きても秋の空高い

豊中市 奥田 満女

漫画読む現代版の金次郎

飛機慘事魂なぐさめん虫の声

瘦せぐすり売る薬屋の猫もやせ

花泥棒へせつせと花を咲かせます

ネクタイは中流上の課長さん

島根県 松本 はるみ

情熱の亡母の話を盆に聞く

親も子も疲れて秋の金魚鉢

兄弟でも借があつては動かれぬ

尋常なことではすまぬめくら判

欺されてはいないと思う夏のキッス

和泉市 岡井 やすお

めいわく駐車自分めいわくしておらず

甲子園声の大きいのは補欠

負けたらし今日は素知らぬ顔しよう

夏休み終る日親が徹夜する

どうみても人形がしゃべる文楽座

米子市 寺沢 みど里

ひとり居の屋根から月が離れない
鯛焼きで祝杯老母も丸くなり

象の鼻りんご一つへ揺れている

思い出の亡夫は笑顔を絶やさない

反抗期空気ゆすって見ただけ

羽咋市 三宅ろ亭

荒模様今日は二百二十日だな

燕の巢不法占拠の雀ども

先駆けかはぐれか白鳥潟に浮く

嫁便り孫の仕草に緩む煩

百以上増加古稀老人とは言えず

鳥取県 中原諷人

ひたむきに内助の海は風いでくる

もつれ糸解いて腕まくらの痺れ

灯の下安堵へ人とともに病み

モナリザの瞳には極楽鳥が棲む

ミレーの絵から秋のさ中へ誘い込む

大阪市 中西兼治郎

めがねめがね日に二、三度は探す老い

獅子舞のあだ名も金の総入歯

追加予算鉄骨さびたままで待ち

生と死で神はバランス取り給い

朝めしを抜いとく釜ヶ崎の雨

寝屋川市 平松かすみ

おかげさま傘寿スラスラあかしたな

本当の齢は役所へ預けてる

ご免なさい亡父の命日昨日です

向う三軒届いています糸電話

この缶へお入れ下さい露天風呂

松江市 竹内寿美子

地に在りて反り返る鷗尾仰きおり

故郷の歌忘れ給うか半伽思惟

神様のノートにペケがある恐わさ

上げ底に仲間外れの風が吹く

燃えつきて蟬は舗道に仰臥せり

尼崎市 角野かず子

オペラグラスせい話は聞き流す

シャンデリアの下で欠伸がしたくなる

風吹けば風の想い出寡婦の部屋

散らかした部屋でところが通いだす

澄んでいる水が流れるわらべ唄

姫路市 大原葉香

三面鏡三つの顔に意見され

点の位置変えて漢字は別の顔

冷凍魚まだ火焙りの刑が待つ

冷凍魚涙も凍てて耐えている

田が売れてはや建設の槌の音

尼崎市 西村かすみ

肩書のない付き合いで続いている

求婚のセリフを妻はまだ覚え

アナウンサー日本中へ咳を詫び
嫁姑二人の時は失語症

爪を切るいつか妥協の音になる

豊中市

上田 登志実

宿命と言うほかはない運もある

なるようになるこの世だと慌てない

老いたりと言えど私は男です

曼珠沙華天逝の娘の衣かも

秋の彩訪ねる群れに犬も居て

鳥取県

新屋 完司

助手席の妻がやさしい地図を持つ

米の値を知らず毎日食べている

人間になりそこなった犬と住む

ひまわりの変り果てたる姿かな

去年からもぐったままの潜水艦

大和高田市

岸 本 豊平次

詐欺商法日本語にも穴があり

二つ程買ひそうにしてさくら立ち

舞台衣裳溜息で観る細雪

盛り花に妥協をしない枝もある

病院のベッド妻の足音待っている

宝塚市

丸山 よし津

薄くちで生きよう余禄の日々だから

下積みの自負に泰然城の石

気配りが過ぎて厭味になっている

大仏の大きさ御利益が薄いよう
デジタルの点滅見つめ五分待つ

高石市 浅野 房子

城下町小町娘とすれ違ふ

意地すてて女の城を開け渡す

しがみをつち切る術なし米をとぐ

消しゴムで二人の過去が消せるなら

秋深く京友禅が目さうばう

姫路市 人見 翠記

江の島の海を見守る観世音（大船山観音像）

ひとときの旅のやすらぎとところ天（鎌倉山樗亭にて）

蜩の声山椒洞（樗亭別館）を寂とする

一人旅ほけさ加減をたしかめる

杖ついて友は逢瀬をよく喋り

箕面市 坪田 紅葉

水やりに気づくばりたのむ盆の留守

整理して押入広く夏も逝く

この辺でよろこんでおこう老いの知恵

墓まいり木蔭で話す後家二人

御馳走は出来たがビール冷えてない

岡山市 行 吉 照路

右左スイッチオンの顔並び

英語には弱くて中国からの旅

インプット次のボタンが楽しみで

水虫がかゆい負け犬らしくなる

大阪市 大塚節子

愛人よこの城ばかりは渡されぬ

古都税で右往左往の門前町

四十年戦争用語生きてゐる

カタカナの氏名へ遺族の目が走る

唐津市 浜本久仁於

星の子になったあの子の誕生日

夢にまで明日を信じた千羽鶴

ライバルを意識した日の通せんぼ

方言を乗せて降ろした赤字線

福岡県 横地雅風

好々爺で生きてはおれぬ豊田式

粗大ごみにされて仕事が懐しい

高校のふかし煙草も教育費

吊革は五分遅れた朝の靴

倉敷市 藤井春日

想像の世界に生きて世を貶し

忘己慈他心開いている和顔

母の背の温み懐かし経を読む

叱られてあの子はしぶしぶ塾通い

兵庫県 藤後実男

未練橋女は細い帯を締め

橋渡り違った風と喋り出し

生み生まぬ嫁と姑の長話

紙人形女系家族と共に生き

姫路市 丁坪サワ子

御在位を世界に誇る長寿国

百歳も生きてと言うは他人さま

虫達が出番に迷う熱帯夜

まっ先にライバルの名を探しとく

寝屋川市 堀江光子

無口だが握手はいつも温い

配分に悩む遺産のない平和

言い訳をしてる自分へ言い訳し

生き延びて聞く戦争の裏話

岡山市 井上柳五郎

残暑を避けた人混む地下の街

真実をだんだんぼかすかばい合い

打水のホースは風も連れてゆき

先輩に阿呆になれと二度の職

浜田市 佐々木裕

唇を拭って女は本音吐く

気の弱い男勘定書を掴む

八つつあんの暮し熊さんの語を真似る

裸銭尻のポッケに歩く街

岡山県 二宗吟平

司会者のマイクを持って若返り

趣味違う客で番組無視される

希望した古典講座へきていびき

路郎師へあやかりたくて句碑に佇ち

西宮市 津山冬子

姑と距離握手する橋見当らぬ

寝たぎりを窓から見せる祭りの灯

敬老の日市長の言葉信じましよう

小窓から話題を拾う老夫婦

西宮市 朝山千世子

お隣のひまわりに見下ろされてるコンプレックス

うだる残暑台風来襲待つ昨今

残暑いとわず謡う「砧」の声透る

洗いざらい愚痴ぶちまけて母娘です

岡山市 岩道博友

阪神戦聞く妻料理の色を変え

気配りが上手くカラオケまで歌い

愛し合う二人に嫉妬の根廻しす

姉妹の電話を聞いていた姑

島根県 石田清泉

頭上の星九ちゃん星と名をつける

招き猫必死に過疎へすがりつき

本棚を埋めて余生の火を燃やす

自画像の鬼も白髪が増え始め

島根県 北川民子

いいとこへ急ぐ足どり俄雨

雨惜しや情が惜しや雨蛙

ほどほどにしないかジョーク魔女の舌

年金の暮しへ毒矢が飛んでくる

大阪市 北山悟郎

老眼鏡世間を円くしてくれる

分別が無表情な顔にしてしまふ

根廻しの笑顔の温みに騙される

無職には脳味噌の目減り目立つ日々

羽曳野市

中村 優

書くまでの表彰状の軽い束

即席の味噌汁にらむ葱坊主

表札の木彫が温い雨宿り

ペンダコが疾く日もある句読点

大阪市

坂本 仙吉郎

中国で洗脳されても元通り

洗堰琵琶湖の水位見張番

なつかしや燈下の下の子車

秋来れば鱒秋刀魚の煙かな

和歌山県

寺田 裕美

生え揃うまでの重たい如露の水

干からびたミミズにおそい秋の雨

布団かけ合って互いに老いみとめ

どさくさに夫婦の息がためされる

島根県

大屋 秋峰

善人の仮面脱ぐ日のコップ酒

戦傷の義手でバンザイとは悲し

茜色落ちて鉄の土洗う

野次馬を左右に分ける救急車

尼崎市 伊藤 春子

ひとすじの光をたぐる寡婦の汗
つき離す裏が読めない青リンゴ
筋書きを踊り終った自己嫌悪
マンネリへ女危険な出来ごころ

境港市 細木 歳栄

辛い日は夢さえ辛い夢ばかり
手続きはあなたまかせのマイホーム
祖母育ち三割足らぬと言わせない
秋空へ愁いはみんなあげましょう

島根県 藤原 鈴江

鳩時計十二度鳴いて今日も無事
ジャンボ機に生命の尊さ教えられ
娘に会って互いの本音比べあい
愚痴ばかりされど吾が娘は逆らわず

島根県 木村 はじめ

川柳にゲートに老いこむ齢でなし
完敗を素直に認め人が出来
野仏の沈黙思考雨に濡れ
ジレンマに空の青さを吸いに出る

松原市 小池 しげお

踊りの手河内音頭にのせまして
豊田商事を向うにまわした門構え
お月さん借金待つてやりました
保険屋の根性女の泣きばくろ

枚方市 二宮 山久

期待する親レールに乗る子供
素直に育つ子供であんじてる
酒好きな男で甘党それもよし
ひと言が過ぎて友達去って行く

大阪市 松屋 柳右子

大安に求めたくじも当らない
信号を上手に渡るよその犬
菊の香は大原女から流れ来る
りん月は待つ手がさする生たしか

神戸市 山片 紀雄

大きめの湯呑み茶碗が父の席
平和以外何を望もう新世紀
熟れてきて食べ頃になると惜しくなる
明暗を分けて成田の廊下ゆく

交野市 山本 テルミ

鈴虫のあわれ別れがそこにある
夫と孫の肌着を買って満ち足りる
大ジョッキ一氣に夏と勝負する
体調を占う体操五分間

兵庫県 松本 ただし

年を経し糸の乱れの車椅子
三日月を支えてビルが死んでいる
檀山へ急ぐことない花を剪る
働くな舶来買えが受けている

和歌山市 山川 克子

メルヘンの心で秋の実を拾う

晩秋の煙訣れた人想う

不器用で二足のわらじはけません

十円の情に縋る赤電話

鳥取県 中原 汲香

眠ってる亡父の晴着よ記念樹よ

秋の花飾った部屋で毛糸編む

隠し場のない古稀の皺みがきます

琴の爪嵌めない指が太くなり

鳥取県 中原 みさ子

サヨナラは嫌い昏乾くから

戻れない橋を渡ると虹に逢う

グーチョキパー夫はいつでもグーをくれ

倅せは枕ふたつのある暮し

鳥取県 土橋 螢

旅発ちの荷物にならぬ女です

チャランポランに生きてきた顔がある

限りあるいのち限らない空よ

それから先は言ってはならぬ天高し

倉吉市 淡路 ゆり子

故郷の路地にたまった温い風

火の輪水の輪くぐって母は風となり

美しい壘の栓には触れたがる

無花果の甘さに馴れて堕ちて行く

倉吉市 広本文子

女神さま女宇宙士誕生です

ふるさとの橋にあずけてきた涙

亡父らしい鳴咽は深い海の底

青いグムの底で狂った村ひとつ

枚方市 稲葉 星斗

戦友会僧侶の友と慰霊祭

敬老会女ばかりでワイン飲み

冷房のデパート歩き避暑気分

奈良県 宮川 古都路

ペンだこがハッピーエンドの原稿紙

不器用な父の手つきに釘まがる

墜落機弱い女が生き残る

大阪市 塩田 新一郎

本日券あり道頓堀は夏盛り

事成らず夜の遮断機俄雨

ごま塩をとび越え白髪になりたいなあ

大阪市 町田 達子

服選って女に戻る秋の彩

御先祖も言い分ありそう彼岸寺

鈴虫をもらって用事また増やし

岡山県 直原 七面山

旅に来て恋に酔い

ガム噛んで理屈こね

過去負うて今日を生き

自選集

野村太茂津

曲解の補聴器外れていた男
たかが一匹いずれ消えてく秋の蠅
深追いはするな木刀振りながら
ハッ裂きにしたい下劣な言葉尻
前頭葉あしたへ遊ぶ撚りをかけ

長野文庫

お茶碗の丸味がうちの家風なり
末は吉易を信じて長らえる
一番乗りテーブカットが待ち遠い
辞典にもない字無意味の意味があり
農民のパワー出来高上まわり

山内静水

金が降る金が降る降る恵雨
つねられた程度ですんだ仲直り
本音ちらつかせ後にはもう退けぬ
残り火もちよろちよろこれからこそ夫婦
ラーメンをひとりでひよいと想うこと

藤井明朗

大国の核廃絶のかくれんぼ
突然に起る明暗の運命知る
人災の多発へ平和ゆれ動く
健康へ合掌国勢調査九回目

水粉千翁

水色のところ分け合う絵具皿
風鈴を聞くごぶさたの筆を持ち
立秋をめくる暦の風に逢う
波の背にゆれて花一輪の旅
余生悠々と肩では切れぬ風

米沢暁明

山と水より添う里の人間味
雲悠々どこにも見えぬ落ちこぼれ
計られた悔いは心の底に欲
パチンコで負けたら負けた酒にする
豊作の方が案山子にも嬉し

市場没食子

八月十五日

玉音がまだ耳にあり敗戦日
戦後四十年まつり手のない英霊も出

一喜一憂看護日誌の字も乱れ
思うように尿量さえも出てくれず
紙おむつ要る病状をやつと脱け

高橋 操子

指紋拒否日本は先進国でしょう
五百羅漢私も涙に耐えてます
いじめっ子帰れば母に甘えっ子
たたずめば園児が似合う花時計
百歳とやらできれいなおばあさま

八木 千代

私まで燃やしてしまう曼珠沙華
ポストの底に咲きたがるのもまんじゅしや華
したたかに生き骨壺を笑わせる
水平線船から捨てたもののいくつ
すぐ沈む船を發たせてばかりいる

小出 智子

真実があふれる秋の果物屋
午後からの空気を換える電話ベル
忌憚なく語る息子のような人
平穩のかたちに椅子が四つある
郷愁に変わるちり紙交換車

金井 文秋

亡妻よ朝顔がまだ咲いてるよ
七十四年使った体いたみだし
転機とは僕にたばこを止めさせる

お客様用の灰皿だけは置き
阿呆にもなれば長生き出来るだろ

尼 緑之助

Uターンの里で美髯は剃り落とす
舐めて貼る切手に何が伝わるか
底辺の沈黙生きている知恵で
煙突のゆがみ生きている町工場
いたずらな衣裳ひらひら晩夏の蝶

月 原 宵明

そして秋石焼芋が通り過ぎ
盃をコップに変えたいきどおり
王監督の焦りに残暑去り難し
年金の暮し国旗は忘れない

祝 栗理事長

温顔へ三つ重ねたおよろこび

藤 村 女

その続きは聞くまい君の瞳がぬれる
ゆずらない主張を瞳にためている
妊つてとてもやさしい瞳に出合う
裸体画の瞳は阿弥陀様に貰う
ブライドを持てと鏡に励まされ

川 口 弘生

トパーズの青と黄色の霜月夜
桜茶をうっかり飲んだ初見合
厄神を崇め祀りて無事祈る
五十白髪月光仮面胸に棲む

自分には当らぬ気で群に居る

小林由多香

さわやかに定年となる誕生日
悲しみの深さやつれが戻らない
ライバルの余裕横面まで憎い
夫唱婦随夫の個性に染められる
特価品それでも女まだ迷い

黒川紫香

（主幹御夫妻の祝賀大会にて（二句））

あの人もこの人も来た祝賀会
花婿と花嫁さんにしてライト
対岸の明りの中に住む女
過去言わぬ女に深い皺がある
うつ伏せに寝る癖ついてひとりぼち

市川鱗魚

平均寿命までと思う酒たばこ
父の樹の名札を探す五十すぎ
蜂の子をくれる不便な嫁の里
石橋は叩く気のつてみる話
ちよこまかと母年の瀬が見ておれず

本田恵二郎

野仏さんお久し振りね里の道
恋知った蛭ひときわよく光り
祝杯が口下手さんを囁かせ
仲裁好きタイミングよく中を取り
妻君が艶ぶきん役を相つとめ

浪曲に想う

正本水客

当代一の話芸と許す声の張り
（京山幸枝若）
琴伴奏情念の深さ見せられる
（泰野百合子）
タンカ節入魂の域人を魅す
（浪花家辰造）
師鸞童の半芸を越えた顔を持つ
（天龍 三郎）
次代を荷う華やかな若さよし
（松浦四郎若）

児島与呂志

大事な日々に噂が先乗りし
誰かが知ってるだろう余白にし
沈黙も大事と思う話し好き
本当の涙は心で落ちるらしい
義理だけの仲人が持つ顔写る

工藤甲吉

右へ習えご免いくさも又ご免
先祖代々はびこつて草死なす
寡夫と寡婦背中合わせに住んでいる
独り寝にチンコロリンが鳴いてくれ
薄気味が悪くあずかる他人の金

大矢十郎

黄金の波銀めしも格が落ち
人間のいない会社の盛衰記
少しずつ不利に陥る妥協性
励ましてやれば寄附帳出してくる
お貸ししますその貸し付けが左遷され

川柳太平記 (90)

川柳の群像

高木夢二郎

東野大八

私の柳歴

高木夢二郎

大正七年元旦の函館毎日に私の短篇小説と短歌が入賞した。それを見て町内の池田大作（川柳人）が私を訪ねてきて「小説だとか、短歌などはつまらぬものだから川柳を作れ」とすすめられた。若くて作家志望の私はそんな言葉も馬耳東風だったが、相手は毎日のよう川柳をすすめるにくだるので、二十年の年長者に免じて一応川柳の試作を約した。

実作したがうまくまとまらない。それにフアイトを燃した結果、その年七月同志四人と川柳鴉詩社を興し「川柳すやき」を発刊したのがそもそも川柳病患者になる因縁だった。

大正八年十一月札幌に出た。そこで川柳足跡社を結び「川柳ひかり」を創刊したが二号で廃刊。大正十二年二月、田中五呂八の「氷原」に参加したが、五呂八の言う诗情豊かな

作品のみに統一できず、所謂鶴彬のいう二頭灰色作家となってしまう。大正十四年春、長女の死去にあいはじめて五呂八の意図する革新作家としてたつ決意をした。爾来、既成的作品の製作は中止し専ら詩性を求めて作句したが、純粹な詩性に徹しきれず、常に内心を流れる社会性に作品が傾く、五呂八よりその点の反省を求められたこと一再ならず。

しかし作品は「氷原」「影像」の二誌を中心に当時革新を呼称する「たまむし」（大阪）「おほどり」（金沢）「躍進」（甲府）「ほのほ」（函館）「うしろ」（横浜）等に随時発表していた。やがて五呂八の死により氷原の発行ならず、影像も姿を消し、革新陣営の発表場所は僅かに九州の「火華」（後の川柳時代）のみとなった。

侵略戦争がはじまり五誌を統合して「川柳

公論」が革新派の唯一の拠点となったが、紙不足でこれも数号にして倒れた。

昭和十七、八年に至り、柳誌は大阪の「番傘」東京の「きやり」の発刊のみとなり、川柳を離れられない私は「番傘」同人となったが、作句的に相容れないので、戦後二十二年一月「ちまた」を創刊、戦後、北海道柳誌の第一号との光栄を有したが二十三年九月、和田黙然人追悼号（五〇頁）を出して終刊。

昭和二十三年四月「川柳人」復刊に際し同人として参加、昭和三十一年七月、井上信子の依頼を受け「川柳人」編集の重責を担う。もとより浅学非才なすところなく十七年録々として今日に及ぶ。（以上は「川柳ひろしま」昭和四十九年一月号掲載、この年十一月に死去）

夢二郎は本名高木正一（別名康正）明治二十八年名古屋生まれ。七歳の折両親に伴われ北海道にわたり四〇年間教鞭をとったが、その柳歴は右に掲げた彼自身の記述の通りである。

「私は今、昭和三十三年八月二十日発行の川柳人三一六号を手にして、深い思いに沈んでいます。それは騰写版刷りの20頁ばかりのみすばらしい雑誌ですが、この三一六号より高木さんと「川柳人」の長い長い苦闘のおつきあいが始まったのです。この号に「北上信子訪問記」がありその中に八十九歳の信子が

「自分は皆様のお力で川柳人を続けて頂きたい。それを土産に剣花坊の許へ行きたい」との言を、百雷が落ちたように感じ、信子にこのような懸念をさせるといふことは、全柳壇の責任であり、殊に正系を継ぐ「川柳人」同志の責任であると考えられ、川柳人を継ぐ覚悟を決められたことが書かれています」（「川柳人」夢二郎追悼記より大石鶴子）

こうして昭和三十三年から「川柳人」に十八年もの長い間、編集長としての夢二郎の苦闘がはじまるのである。

夢二郎は昭和四十五年自宅のある東京都町田市に相模原川柳協会を興しその会長として川柳PRにつとめ、さがみ新聞柳壇を担当しながら、昭和四十九年十一月八日病死。享年七九。（正信院育英活雄居士）

「高木夢二郎がどういふわけで剣花坊の偉業「川柳人」に参加し、事実上の主宰とあまり異ならない立場で編集人になったのか。彼は本来、剣門ではなく、むしろ反剣花坊的な田中五呂八の「水原」の系統の人であったはずである。その理由については、彼に質したことがないので正確なことはわからないが、多分川柳人が発行の危機にひんしたのをみて、「義を見てせざるは勇なきなり」と発奮し、北海道を引揚げて中央に定住したのを機に、

それを引きつたのであらう。その根本理由の一つとして、前記彼の志向の変化があるのではないかと考えられる」（「川柳人」夢二郎追悼号にて石原青竜刀記）

この件について筆者も青竜刀とよく「夢二郎論」を戦わせたものである。その論旨をよく大陸川柳人同窓会（初期三、四回）出席の夢二郎当人に訊いたことである。

大正十四年八月井上剣花坊が満州や大連で革新川柳論を鼓吹した。「白頭豚」の大島濤明、井上葉吉（剣花坊子息）がこれを肯定するにおよんで、青竜刀は小林茗八、中西若蛙らと大連川柳会を起し非詩川柳誌「青泥」を発行し、革新川柳撲滅論をぶちまけたものである。青竜刀は戦後も「川柳非詩論」を掲げ「諷詩」を発行した。「要するに青竜刀の川柳非詩論の終着駅は、新しい川柳のジャンルで詩を創造するということにあり、青竜刀の真意を三十余年にしてはじめて悟ることができた」と夢二郎は筆者にそう述べ懐いたのが、晩年に近い頃であった。

青竜刀の非詩論に対し真向から立ち向った夢二郎と青竜刀の強烈なライバル意識は、かくて古稀を境いに一転して歩みよることなき柳友となったようである。

「人あるいは高木夢二郎の作家としての常

識性を指摘し、飛躍の乏しさをいうかもしれない。なるほど彼の作品には、名作家のようないふもの、あるいはうまい句として人をうならせるようなものはあまりみられないが、それは性分がらくるもので、ここにも「文は人なり」という語の真実性をおもわざるを得ない。このような夢二郎が、現代生活に去来するさまざまな想念を批判精神によって短詩文芸化すればよいのであつて、そこにリッパな夢二郎作品としての存在理由がある」（「川柳雑誌」昭和39年1月「高木夢二郎を語る」石原青竜刀）

玉音放送あの日の暑さまだ続き 夢二郎
右も左も頼りにならぬエゴばかり
般若心経唱う静かに死に對す

昭和46年剣師生誕百年記念事業「井上剣花坊伝」を発刊。同48年「川柳人」五〇〇号記念集を刊行。「川柳人」三一六号から手を初め五一一号をもって終る。すなわち同誌を一八五号にわたる手がけたわけで、その編集実績は長期療養を除きまる十五年間にわたることになる。

古川鶴声刊（昭和49年）夢二郎遺句集「面影」がある。

句集なく句碑なく夢二郎残り 大石鶴子
★次回は「岡橋宣介」

俳風柳多留廿六篇研究 (二十二丁〜二十三丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一
南 得二・小野真孝・多田 光

故岡田 甫

372 慈悲な事あいつとあいつ二度に出し

本多「二人りへ二度に異見じひなこと」(三〇・26)という句もあるが、句意は、下女と手代の不義が露見し、懇ろに論してから目立たぬように間をおいて一人ずつ解雇した。あとになってそれを知った店の者が、主人の篤実温厚なやり方を、誠に情け深いことであると噂する。これが武家なら「かろしめたやつらと二人り御いとま」(明六天)で即刻追放となる。

大屋「二人りつつ御いとまの出るさつ内チ(二三・15)でなく、スマートに処置してやる

ところが「慈悲」。

多田「賛」。

岡田「武家屋敷、厳しいところでは、「不義はお家の法度、手打にしてくれる」なんていうのもあったらしいが、大ていは追放。

373 どの子が目好き古市の踊也

本多「古市」は伊勢の古い街で、内宮外宮の間にある。遊廓が軒をつらね、伊勢参宮が終わると古市の遊里で遊興する人が多かった。伊勢音頭に合わせて踊る妓を見立てるのはまさに選取見取というのである。

古市のおどりどの子が目好き也 七八・14

多田「賛」。

岡田「同」。

374 筆に手八付す墨をば売所

本多「奈良墨を詠んだ句」。

奈良筆も有名であり、筆は鹿毛が上等とされている。鹿も奈良は縁が深い、奈良の春日神社の鹿は神鹿として崇められているから奈良の鹿は手を出すことは出来ない。「筆に手八付す」はこの事を表現したものである。

句意は筆の材料である鹿の毛は沢山あるがこちらは神鹿だからそつとしておいて、もっぱら奈良墨を売っている、くらいの意。

墨を売る里でハ筆の毛に恐れ

一六七・26

墨の出る町にハ筆も生きて居る

八二・20

多田〓賛。とにかく目前に原料が歩いていても、奈良ではその毛が使えなかったことを強調したものであろう。

岡田〓賛。今もって奈良の墨は名物。

375 ぱひく儒者もするすなと始皇下知

本多〓「ぱひく」は幼児語でおっぱい。ぱひく儒者は乳臭い儒者の意。

有名な始皇帝の焚書坑儒を詠んだ句。

激怒した始皇帝が、儒者は何人も許すな、たとえ青臭いかけ出しであらうと坑に伏せと厳命を下したというのである。もって帝の憤怒の凄じさを「ぱひく儒者」と洒落たところが句の山。

詩の語のといわせず始皇皇帝

四〇・35

高慢なやつらを始皇とつゞめる

傍二・1

八木〓賛。「べいべい」の意か。

石田晋〓『浮世風呂』に「荒事師が一息フツと吹くと、二十人ばかりのばいばい役者が揚幕の方へ吹とばされる」というのがある。ば

いばい役者（「はいはい役者」とはいはいと返事をするだけの役者で、とるにたらない、したっぱの役者の意。ここではその言葉を使った、したっぱの儒者の意と思われる。

多田〓句意としては最もとるに足らぬ儒者も許すなというのであろうが、「ぱひく」は1、礎稿 2、八木説 3、石田晋説とある。私は石田説に加えて命令したのが中国人の始皇なので「はいく」をわざと「ぱひく」と発音させたのかと思っていた。

岡田〓同。

二十三丁

376 里帰りぢいば、アをまづ咄し

石田成〓里帰りは、結婚後新婦が初めて生家に行く儀式。婚礼後、三日目または五日目に行くを例とする。『広辞苑』とあり、帰るという語を忌んで「里開」ともいわれる。

里帰りむかしくをまづ咄し 五四・16

おちいとはばあが有ったとさ嫁こまり

一三六・41

むづかしい方だと咄ス里かへり

明四・桜4

昔話の冒頭にある「昔々あるところにじいさんとばあさんがあったとき」という常套語をふまえ、先ず里帰りをすると、姑について最初に話すことをよんだ句。

多田〓賛。

岡田〓同。

377 嫁の供けちな小間物屋ほど持チ

石田成〓嫁入して来た新婦は普通姑女が、場合により仲人又は親類の内儀などに付き添われて近所を戸別に挨拶回りをする習慣があり、句はその時のしるしとして何かくばり物をし、他の供の者が貧弱な小間物屋の風呂敷包を背負っている姿に見立てたものか。

八木〓賛。荷物の多いことを「小間物屋」にたとえた。

南〓嫁となれば気ままもならず、年に数えるほどの外出を機会に、化粧品、小間物などあれこれ買物が嵩張って、けちな小間物屋程の荷物を供に持たせる。

多田〓礎稿に賛。

岡田〓紅・白粉および装身具などを持たされたお供ですから小間物屋みたい。回礼の供ではありません。

江戸川柳に現われた八百屋お七

(四)

阿達義雄

(四) 釜屋武兵衛とお七

浄瑠璃に出て来る悪方(あくかた)の釜屋武兵衛は、お七と吉三との關係を吉祥寺の和尚に談じ込み、久兵衛夫婦は勿論のこと、和尚や吉三を散々罵っているが、後になると新築の普請金に困っているお七の父の久兵衛を尋ね、「預けるでもない遣るでもない、普請の用に立て、やる、手廻自由になるまでは、二百年でも待つ金子、手形取るにもおよばぬ」と、金二百両を授け出して呉れたので、久兵衛はその金で普請をして、一家、寺より引越したのであった。

ところが、武兵衛から、娘のお七を嫁にと望まれて、之を拒むことも出来ない窮地に陥り、お七からは、「なう父様母様怨めしい」と泣きじゃくられる。母は母として、

「世間の掟は夫をば、大事く」と教ふれど、顔も心も憎体なる、武兵衛に添ふは世界の

義理、厭(いと)がる、様に身を持ちなしや。何時去っておくすとも、恭(こ)しと請取って、其時こそはうち晴れて、好いたお人に添はせてやろう。」
と言ひ聞かせているが、お七の心はいつかな動(うご)かばこそ、

両方がかまだにお七好き嫌い(八三・58)

男色の対象としての若衆を「かま」と言う。

「好色五人女」には、小姓吉三を和尚の念友(男色關係)の仲としてある。同じく金でも吉三の釜なら好き、釜屋武兵衛の「釜」は大嫌ひ。

皮切りは釜屋はいやとお七言ひ(九七・22)

皮切とは最初に一つ据える灸(い)のことで、釜は江戸小網町三丁目の艾屋釜屋治左衛門見世から売出す「釜屋もぐさ」の釜と釜屋武兵衛の釜との両方に掛けてある。従って、お七がその初夜権を釜屋武兵衛に拒否する意味をも

含んでいるものである。

コチヤ釜屋せぬと小姓へお七言ひ

(一二二・29)

お七曰く「武兵衛など怒つても、こちやカマヤせぬ」

金銀がなくて武兵衛になり込まれ(不明)金づくで釜武は聲(こゑ)になりはぐり

(宝暦八年十一月五日間)

ひたすらに小姓の吉三に逢いたがるお七を引き裂き、なだめて釜屋武兵衛にやろうとしたことが、益々お七の恋心に油を注ぐ結果となり、

「我が大戻せ呼び戻せ、さなくば寺へ連れて行け。」

の一途の心に走らせ、お七をして、前後のわきまえもなく、我が家に放火をさせるようになったのであった。

(五) お七の放火と年齢詮議

お七の親久兵衛夫婦が日蓮宗の信者であったことは既に述べた通りであるが、お七をして放火の大罪を犯させたのを「俳諧武玉川」では、

久兵衛が堅法華から事起り(武玉川九・22)だとし、又、宝暦・明和時代の川柳子は、お七の一途な恋を、その頃の風潮と比較して

八百七の時分は恋も律義なり(拾遺九・5)

八百久の娘はきつい意地ッ張り

(宝暦十年・礼印一)

勿論、お七の意地ッ張りは、次の年齢詮議についても言っていることである。

お七の実説については、『墨水消夏録』巻二、『我衣』、『近世江都著聞集』巻二・二、巻二等に述べられている。

それ等によって調べてみるに、一般文芸書には、お七の恋人の小姓を吉三郎として、お七が、実は山田左兵衛由緒ある武士の二男)という者であつて、吉三郎と言ふ名の者は、吉祥寺門前の無頼漢で、お七を欺いて放火させた大悪人であつたと言ふ。次に参考の為に最も簡単な『墨水消夏録』から、お七が放火に至る個所を抄記してみよう。

「普請も出来、太郎兵衛もとの所に引移りてより、佐兵衛に逢ふことも出来ず、歎ずる所に、駒込吉祥寺門番の子に吉三郎といふ若者あり。これを知りてお七を欺き、その家に火をつけ焼払ひなば、また元の如く菩提寺へゆき、佐兵衛に逢ふことの心のまゝなりと勧めければ、お七も之に欺かれ、恋の切なるにより火をつけしを、其騒ぎにつけ込み、吉三郎は太郎兵衛が金銭衣服を盗み取り、遁れ去らんとせしを火方盜賊改の中山勘解由に召し捕はれ、遂に吟味に及びて、お七が火をつけし事を申し立て、兩人とも刑に行はる」

右の太郎兵衛とは、勿論、お七の父親で、

この吉祥寺門前の無頼漢吉三郎は、はじめお七が金銭などを与えていた中だけは、お七と小姓の佐兵衛との間の色文の仲介などを引受けていたが、お七はもとより娘のこと故、遂に支えるべきものも無くなったと見るや、放火しても自分の家だけで消し止めれば、大した罪にも問われないなど、恋のために盲目となつたお七をたぶらかし、附火の方法まで教えて、大事に至らせたのであつた。

話として割合に興味ある、奉行所におけるお七の年齢の詮議や祖師堂の額などに関することは、江戸文芸の主流に立つ西鶴の『好色五人女』においても、紀海音の『八百屋お七歌祭文』に於ても、少しも記されてはいない。然るに、之については中山殿文庫の日記によつて筆記したと称する、馬文耕の『近世江都著聞集』の中の関係記事が最も詳しいようである。

放火罪に対する刑は火烙である。

この事件を取調べた中山勘解由が、「近日御定法通りに火烙に仰付られ候はん」と、其筋へ何書を差出した処、老中達は……御定法なれば、争ふ処なく火罪を申付くべし」とのことであつた。ところが独り土井大炊頭利勝だけは、

「まことに情ないことである。件の女が可哀そうだと言ふのではないが、治世に少女を火烙の刑にするとは、御代の恥であり、日本の瑕瑾である」

と、中山勘解由を呼び、

「今度のお七の罪は通れ難いところである。自分はお七をかばう心では、さら／＼ないが、徳川の治世に少女を火烙の刑にするとは、天下の恥辱である。何とぞして遠流などという様にする方法はあるまいか。

既に詮議が済んだ上は是非もないことである。だが、かれは歳十六歳と申ししたというが、此処をもつ一度吟味してみて、万一、十五歳以下であつたなら、それは子供であるから、其罪を一段引下げる手段もある。

自分の家に火をつけて圓乗寺とかへ行きたいなどとは、疑もなく無心の子供の情である。よく／＼此の所を詮議してみよう」と、深い意味の籠つた申し渡しをしたのであつた。

それで、中山勘解由は、早速お七の両親・名主・家主等と呼び出して土井大炊頭の意のある処を伝え、

「お七の此度のやり方は、まことに大人気ないことである。大方、子供心に前後も弁えずやつたことであらう。前に十六歳と申し上げたが、よく／＼有体を申し上げよ。此処が大切な処だ。お上に對し偽を申し上げては為めにならんぞ。」

という情ある取調べであつた。

(つづく)

水煙抄

黒川紫香選

大阪市 清水康恵

投げられぬ小石をひとつ持ち歩く
シャボン玉おんなを秋へさそう彩
嘘をつく女を嫌う白いくつ
母さんのこぶしはいつも暖かい
真白いページの中に居る私

米子市 光井玲子

出来心三面鏡に見抜かれる
ここからはゆっくり漕ごうよ夫婦舟
太陽の笑顔がづらい時もある
松ぼっくりころころ人を恋うている
結局は皿の上からはみ出せず

佐賀県 寺中三枝子

紙ヒコウキに乗せてもらった仮りの妻
風向きが変わるあなたの気も変わる
ワルツ背に熟女哀しきまでに舞う
なれ染めをすこうし妬いて聞いている
産みますよりタイヤなんでもう出来ぬ

西宮市 紀市郁栄

顔洗う朝の命があるかぎり
隠れ家に少しは細工してあるぞ
母のない子が満月を描きたがる
蛇口全開愛欲の手を洗う
山荘だから人妻とはいりよい

尼崎市 田中晴子

バラの棘枯れても自己を主張する
爪噛んでいつもの勘をとりもどす
鎮守の森にとり残されたわらべ唄
叱られて月の雫に濡れにゆく
六十の恋は外野がうるさくて

尼崎市 福田礼子

未だ消せぬ炎が風に包まれる
あかね雲縄だけ残る縄電車
火祭りの夜は男が美しい
煮干し乾す匂い故里近くなる
心变りの女と座る終電車

熊本県 高野宵草

温泉はひとりだ泳いでみたくなり
赤い羽根硬貨を持たぬから避けた
快川を畏敬す灸を我慢する
台風の目もう過ぎたやら停電し
意のままに飛ぶ撒水で気が晴れる

熊本県 永田俊子

母の手になじんで光る鯨尺
美しい扇の陰から出る噂
めがねふく余裕が芝目よんでいる
喪の客の雨傘もたれ合って立ち
ふところ手昨日の愚痴をむし返す

熊本市 宇野昭代

孫一人増えた電話が鳴りひびく
指握るお手々以外な力持ち
検査シロ強がりの目がちとうるみ
お役所の親切話の種になり
颯爽と歩く女の肩パット

熊本県 大川幸子

言葉まで変えさせているタイヤです
昔はの愚痴は喉でとめておく
バスの中誰かが貼ってるサロンバス
大きな波紋にあえぐ水たまり
守り札持って旅路の安堵感

八尾市 高杉千歩

作り話もやがて底つく兎小屋

年金の軽き引き算慎重に

あと十年二人三脚風の宿
にんげんの性よ哀しや戦さ好き
紙芝居のつづきを隣の駅でまっ

兵庫県 森脇和子

赤とんぼ鈍行の旅がしたくなる
地球儀を廻して二人の夢の部屋
バイバイと外孫あつさり引揚げる
カラオケへ調子はずれもいて楽し
亡夫との思い出楽しい事ばかり

藤井寺市 赤木和子

中流に届かぬところで昼寝する
生半可に生きて楽しいことばかり
やっと捕まえた尻尾を放すものですか
身を堅くしても割かれる栗のいが
湖水からぬつと顔出するくでなし

富山市 舟渡杏花

デジタルへ明治の振子筋まげず
逢うたびに同じこと聞き不憫がり
恋終る点となるまで佇ちつくす
どの男も同じセリフで通り過ぎ
殺し文句考え信号待ってます

長岡京市 木本如洲

酔うた日の父が漫画の顔をもつ
コーヒーを奢って貰い愚痴を聞く
一枚の地図には描けぬ街がある

平凡な余生を愛しセルを着る
表紙絵に稲荷の鳥居業界誌

尼崎市 丹下玉子

狙われる事は覚悟の美人秘書
アドリブがわからぬ人で糠に釘
クラーの部屋で一冊読み終る
髪洗う單身赴任の夫婦る
書道展一気呵成の筆のあと

名古屋市 藤井高子

石の肌撫でて仏にしてしまふ
灰汁を抜き切つて男が涸れてゆく
行き交うて一矢狐の眼に射られ
一日を猫に飼われて暮れにけり
化かさない狸が徳利さげて来る

守口市 森川まさお

病む妻と夏の終りをうどんすき
束ねたる髪で西日の庭に出る
船着場出店は犬とじゃれながら
日盛りにはじけた種は育つたら
お天気の良い日も蟹は泡を吹く

熊本市 黒田緑

肩肘をはれば息までつまりそう
枯れそうな鉢にもそつと水をやり
さて尽きる命はいずこ日本地図
秋たつて下着の袖を風が抜け

今治市 野村京子

したたかに生きて女の座りだこ
手鏡の鬼がしきりに叩くパフ
愛一途流れにまかす花筏
標的になつて旗振る鬼女の面

今治市 月原つくし

夕顔へ一夜の情かけて月
待つことに慣れて女のうすい紅
涙もろい女の鈴が鳴り止まぬ
お喋りな人形に陸言聞かれてた

米子市 茂理高代

どの風にもなびく芒の穂がにくい
カーテンがゆれて電話は鳴りひびく
青柿が帰る子待たず落ちてゆく
道連れになろうよ先の無いとんぼ

弘前市 斎藤 荔

屋上でうろちよろしてる蟻に逢う
日曜は犬にまかせる散歩道
国道で小説片手にアイス売る
青空に放したいさぎ草の花

兵庫県 脇田米朝

古稀過ぎて塗りたい彩がたんとある
綿菓子膨れてダンジリ宮に入る
賛成をして片棒をかつがされ
中年の焦りへ化粧が乗つてこぬ

東予市 小山悠泉

一杯は義理お芽出度へ下戸の酒

妻だけに分るサインは僕が持つ
年金の暮しがきしむ向い風
横に這うかにのルールが笑えない

滋賀県 安田志津

消ゴムが小さくなってゆく不安
折れそうでいてコスモスのしたたかに
もやもやをシャワーで流すひるひなか
記念切手はって友よりいい便り

吹田市 茂見よ志子

情熱はもうないのかと自問する
主の居ぬピアノカバーが褪せてゆく
働いた今日を満足して眠る

爪染めた手で草引は見えてられぬ

高槻市 河瀬芳子

追伸になると本音をしゃべるペン
キョロキョロと名ほどでは無い鬼やんま
まの抜けた狸ならんで招く里
昔にも村に一人はいじめっ子

尼崎市 児玉歌子

寝たきりが静かに鳴らす鈴の音
いい老後病気知らないくつの音
悪いとこ無くて退屈させる嫁
夏物を全部売り切るいい残暑

堺市 矢倉五月

受かったら下宿させてと驚かされ
振り袖が出来てくるので伸ばす髪

恋唄に耳かたむける妻の午後
蟹の子はやっぱり横にあるいてる

伊丹市 山崎君子

口笛が女をドラマにのせている
日だまりで拾った話にかけてみる
人妻と踊るネクタイゆれていく
門しめて彼の足音きいている

出雲市 小玉満江

病院を替えたが良いと小さい声
失恋を母が大きく泣いてやり
薬草が程良く乾いて夏終る
秋風は夏の疲れと共に来る

京都市 森川春子

玩具買う孫によく似た姿見て
バス待ちの日陰で話しかけられる
雑学の夫は話飽かせない
入れ墨の男と薬の順を待ち

高槻市 笠嶋恵美子

ジャンケンで負けたら妻の肩を揉む
私のために鳴ってるクラクション
通勤車独りになれる隅の席
ひよっとこもおかめも涙もろい秋

京都市 松川芳子

口下手を入歯のせいにして孤独
年金に中流意識支えられ
何一つ似合う物なし形見分け

地藏盆化粧直しを待つ地藏

西宮市 松本一郎

信号がゆっくり待てるうれしい日

マイホーム色褪せてゆく青写真

阿波踊り棧敷に妻と見る阿呆

振り返る過去の全てが美しい

吹田市 栗谷春子

秋風や本家も分家もビルの中

すだれ越しいつも日暮れの色があり

大方は理解した顔してるだけ

枝豆を煮る日夏から秋の風

鳥取県 福田あや子

地下茎に誰も気付かぬ出来心

蝸牛しずくの夢も又乾く

便利さが親子に隙間風を入れ

寝たきりの母本番で指図する

久留米市 鶴久 百万両

アイヌ語もテープにとってきた夫婦

クリスマスの商戦に勝つカリキュラム

バタレンの呪詛を転がす郷土史家

河鹿鳴くと男は離婚考える

堺市 山本半銭

相続が絡み御破算された恋

駅前の未来図わたしの影がない

生花をほめて縁談たのまれる

浪曲が好きやなんてと酌いでくれ

和歌山市 桜井千秀

後姿へあかんべーして気を晴らし

こだわりが宴会の席遠ざける

フィクションめいてる過去は語れない

遍路笠消える霧中に鈴の音

羽曳野市 田中隆二

菊花展バカチョンカメラが忙しい

悪友が再婚話持つて来る

秋風が少し気儘に吹く街よ

妻よ出て見ないか庭に赤とんぼ

兵庫県 奥野テール

母という誇りの位置に塩の壺

しのび寄る秋のきざしに針急ぐ

一と目ひとめ愛の絆を編み続け

角のない鬼が持つてる仏花

弘前市 田中 叶

白黒の写真の中のよき時代

川柳のことであなたにきた電話

ごく軽い気持ちで従いてゆく少女

頬杖を組むと埴輪の目となりぬ

岡山県 小林 妻子

早魃と不況行くとこない地球

湯上りの髪梳く素顔に女見る

一票へ大事な声をかけておく

夕涼み月から来いと呼んでいる

鳥根県 高尾 よし子

病める子に祭り提灯吊って見せ

手花火の匂い残して夏が去り

義理悪い人とならんだローカル線

一人になった時の二人のはなし

鳥取県 灘 尾 民 子

男一匹思案に余るふところ手

カップルで仰ぐ星座は美しい

ライバルに背なを向けると負けになる

手の届く花にゆらいだ出来心

静岡県 渥 美 弧 舟

無言のまま優しさ残るデスマスク

コーラスの喜び大きな輪になって

残り火を燃やす私の生活詩

転居の句届きはかな愛想う

山口県 高 崎 雀 声

着こなしの下手な浴衣の娘が歩く

嫁った娘の壁にスターは待ちつづけ

易の灯に人生不安もってゆく

会葬をしながら昇進望む人

岡山県 伏 見 す み れ

母の手紙きっかけ少年立ち直り

長雨のあとの日照りが身にこたえ

布切れをためて女は夢を追う

ひとりだけ百姓好きな子が助け

大阪府 古 川 美 津 枝

台風は気分屋矢印がお嫌い

衣裳見せはずんでいるのはおばあちゃん

美しい月夜を待てるやじろべえ

金星を取った力士の男振り

呉 市 蔵 重 成 人

赤字線でも古里がそこにある

お祭りの気分をもらう笛の音

金で済むことと他人は軽く言う

鈍行の旅でスリルがやわらかい

尼崎市 吉 永 伊 三 郎

老眼鏡外して女見届ける

ワープロは打てぬが老いの知恵袋

年金証書に死ぬまで保証され

振り向かぬ男の肩に陽が沈む

尼崎市 山 田 保 蔵

山高帽かぶりもできず捨てもせず

出口には蛇の目の傘が待っている

雲水が袋たくさんぶらさげて

皆さまの銀行皆に金貸さず

竹原市 信 本 博 子

石仏をかばうような松の枝

友情のほころびを縫う糸が無い

川柳の入門書読む曲角

ピカソの絵解説読んでから観よう

和歌山県 森 三 枝 子

低い鼻つまんで鏡をにらみすえ

太陽がいっぱい今日のお湯が沸く

待たされた苛立ちストロー嚙みくたく
口ばかり達者で中年肥り過ぎ

泉南市 坂根流水

世はうつり稲田の案山子絵にならぬ
野ざらしの貨車の下からくつわ虫
秋彼岸墓前の池に雲うつる
欲得がなくなり老いて福々し

豊中市 辻川慶子

朝顔も小さくなって秋を知る
若やいで派手も着て見る秋の中
虹色の風に乗ってる蝶の夢
風通しよいとこ猫は知っている

守口市 結城君子

ブラインド紐が反抗して困る
相談をして年の差を考える
水上バス他人に手を振る橋の上

吹田市 井上照子

退職がま近足音重くなる
白菊が涙を誘う小さな棺
捨てられた子猫ぬれてる秋の雨

尼崎市 鈴木良征

米櫃の米満ち中流の灯をともし
木の校舎になったら非行やみすか
叙勲とは無縁の父と酒を酌む

尼崎市 尾宮弘治

鬼の面売ってる親父の顔がいい

文字のない絵本を孫と二人読み
ロボットの体操ですかと妻の声

尼崎市の場 十四郎

おいらくの恋にも太陽あるだろう
食卓に育ち盛りの箸の音
この彩を煮つめて花を咲かせたい

尼崎市 野瀬昌子

女王になった気になる美容院
浪人の夫ふっくり肥満する
さりげなく立ち聞きしてる影法師

岡山県 松本元江

こむらさき雨に逢えないまま秋に
紫の涙を拾う花鋏

熱帯夜外はきれいな星月夜

大阪府 横山為子

真心の母の便りが誤字当て字
にらめっ子心通わぬ京人形
裏金を使って渡る虹の橋

鳥取県 土橋はるお

ホルモン屋に氷の旗が揺れている
核のない紙飛行機をとばしてる
冷奴今日は格別冷えた妻

新宮市 山田平和

知恵のない話女に逃げられる
コントめいた人生でした七十年
単身赴任たまに逢う妻またよろし

唐津市 米倉彩女

鈍行の客みな善人の顔にみえ
海がめの産卵を見る軽い罪
方言に通訳がいる電話口

西宮市 秋元てる

おとし穴きれいな雪をのせておく
それぞれの秋それぞれの風の彩
ビタミンCなどとお茶まで薬めき

熊本市 北川一進

腹の虫押さえ日記にやたら書き
初孫にフィルムこれで何本目
縁結びの神様だからよく参り

大阪市 榊本落児

喧嘩したい時もあるやろ道祖神
もう少し派手着てほしい妻である
漬物が自慢で隣茄子も漬け

竹原市 岩本笑子

脳外科の朝看護婦に起こされる
付きそいもいっしょに寝てる昼下り
いやな時あろうに看護婦の笑顔

羽曳野市 吉川寿美

いらだちを宥めすかせる紙の鶴
ギヤマンの夢はもたない紙コップ

柳友千佳さんの死

流れ雲どこから何処へ逝く運命

鳥取県 羽津川公乃

どの色に染めよう個性褪せて来た
沸点の低い女でよくしゃべり
出来心そんな写経は許せない

大阪市 今西静子

どの道を折れてもまるい月が追う
写される角度意識する女

米子市 足立由美子

文学が好きで女で弁がたち
思い出に会いたくなって眼をとじる
今日生きる空気をたんと吸ってやる

青森県 荒田つる

いささかの庭に蒔きたい種ばかり
七光つつかい棒がまだ足りず
簡単にむすぶ祝辞に湧く拍手

青森県 福士トキ

星空に九ちゃんの歌聞えそう (ジェット機墜落)
かぶと虫ボツケに騒ぐ始業式
どじょう取る川をのぞけば都会の子

兵庫県 東浦砥代

ぬかりない人で美人でいて孤独
待ち針の位置で女の過去がある
女には夫にだけの詩がある

貝塚市 池田寿美子

風通し冷たい廊下に修業のあと (天龍寺にて)
旅仲間かえりはジャンボでケセラセラ

秋茄子を漬け忘れたので寝つかれず

唐津市

浜本ちよ

握らされ反對居士が小さく居る

お人善し齒の浮くような世辞も聞く

芸は身を助け近所に慕われる

西宮市

待田麻黄

糸電話孫のおねだり聞き直し

洗濯機の音に合わせてタツプ踏み

出稼ぎへ洗い晒しを詰める妻

茨木市

堀良江

暑い夜それでも虫は秋の曲

盛り売りの小芋に黒い土匂う

アタツシケース抱いてお隣舟を漕ぐ

八尾市

驚見章

鯛雲駅へ二軒の峠坂

学歴は問わぬ会社の歩合給

婚礼の荷が来て路地は華やかに

岡山県

後安ふさえ

整形で他人の顔が誕生し

ひぐらしに急ぎ立てられて山の宿

添乳の児へ果てしない夢を追う

鳥取県

西川和子

夕暮れの渚で赤い貝拾う

出来心償う旅に一人出る

きれいな思い出集めてクラス会

高槻市

芦田静江

婦唱夫随燈明ゆらぐ一人言

踊る輪のパロメーターに姑平和

趣味せわし一人になった老いの賭け

尼崎市 佐藤美代子

ブラジャーして家事に取り組む病み上り

行つて来いに勇気を出して受診する

細い目の掴みどこ無い大男

愛媛県 八塚三五島

救急車こちらこちらと呼び込まれ

靴音の高い女に路を開け

幸せな朝湯顎までゆるませる

指宿市 渡辺伊津志

ついばみを待つ家鳩の瞳が涼し

意地張った心算が誰も気がつかず

言葉使い剣術使いと言うがあり

大阪市 山田妙子

コスモスが別れ話を嫌い抜く

旅先で川柳天国見てる幸

同じ手に決して乗らない白い足袋

岡山県 杉本伊久栄

古布におもいでたぐる小引出し

火と水の二人で渡る橋幾つ

風鈴も虫の鳴色に押され気味

広島市 望月晴彦

片減りの靴を気にする足の裏

血統は言わず美人を貰う猫

冷蔵庫開いて今日を思案する

米子市 小村 てい子

太陽に合図はいらぬ善人で

娘に渡す飯なら何時も炊けている

空腹のとき大事な事思い出し

新発田市 上鈴木 春枝

昇給の分だけ増えるノルマなら

振り込みの給与へ通帳妻が持つ

綿密なプランへ旅の急ぎ足

竹原市 石原 淑子

あきらめか背のびをやめたローヒール

レース針ロマンチックな夢を織る

うっかりと過した時が悔やまれて

米子市 大田 みさと

危ないと知ってる橋が渡りたい

仕上りが期待できないママの腕

受け皿に誰も知らない露が乗り

旭川市 朝倉 大柏

他人のミス面白そうについて話し

責任がないから多数の方につき

バックカスに勲章いたくほどに飲み

広島県 田村 新造

はおずきに江戸の下町生きている

父の日に集まる息子みんな父

六十路なり恋もしたいが腰痛い

岡山県 千原理 恵

重い口開かせるのも妻の知恵

波枕亡母の声する子守唄

ころころと八方美人の鈴笑う

弘前市 真喜内 實

無理じいは酸素吸入とていやや

君の歌夢で聞いてもよかつたな

青い鳥ときにはさみしい歌もよし

新潟県 高野 不二

一泊の旅へこんなに持つ薬

バイトはあつて就職口はなし

イヤリングが目立ち顔は忘れてた

愛媛県 石手 武

砂時計無視して嵩む電話代

同権を叫び男に重い物

裏道へ急げばこども工事中

鳥取県 乾 隆風

素直になれと歪んだ道で蹴つまずく

行いが歪んで見える寺を訪う

お葬式出して時計の音と寝る

岡山市 中嶋 千恵子

赤く燃え人待顔の葉鶏頭

水くきの跡も憎らし女文字

倅せは愛しと思う人がいて

富田林市 松本 今日子

虫の音を宝の橋にきいてねる

うつぶせに寝るも胸元邪魔になり

退職の無い母親でコマ廻る

岡山県 戸田種子

病床で一輪さしの花とねる

手枕で孫をねかせて手が抜けず

噂話とはばりさめて閑古鳥

岡山県 福原悦子

掃除機に吸わせたい妻の愚痴

これからの余生を渡る橋の数

意見する心算で少し内助する

堺市 桜沢あかり

横糸が絡んでドラマが揺れ動く

チヨボチヨボと金魚は餌をよくたべる

足音を聞いてスイッチ切り換える

出雲市 入澤壽恵

家中を荒らして帰った孫台風

民宿のように次々夏の客

減反も話題にならず嫁も無く

尼崎市 木下義嗣

敬老会出かける妻の薄化粧

善悪を知らせる親の玉手箱

煮るよりも焼いて食べたい桜鯛

高知県 山下登舟

会釈から会話に変わる散歩道

生きている内に建てよう夫婦墓

人生を書く自叙伝の飾り言

吹田市 西岡豊

ようこそそのアーチを潜り大鳴戸
校長のセコハン地区の貌となる
実力がないのに力む蟹の泡

出雲市 小白金房子

山門をくぐれば匂う秋彼岸

ひと汗を木陰で休む農のお茶

入場券持つて欠伸の長い列

吹田市 山田里子

試合より野次面白い外野席

子の留守に少年マンガ読んで見る

一徹な父が首振り祝い唄

島根県 喜島ノブ

休耕田病舎の窓の草いきれ

サングラス外せばパンダの貌になり

夏の夜に淡き夢あり籠枕

八尾市 椎尾公子

老いてなお年々ふえる年賀状

定年後定期恋しく定期買う

胡瓜もむ女の縮図まな板に

堺市 江辺天鳳

鳴り出した太鼓にじつとしておれず

日航機事故

落ちていく機内で父のペン走る

残念をくり返しつつ書き残し

入院に馴れて淋しい針と糸

大阪市 大倉圭介

表札を変えず亡夫と居る暮し
立っている夫を使う洗濯機

西宮市 山 田 喜代子

かぶと虫かぶとの型でおもちゃにされ
雌蚊だけ血を吸うと知り哀れなり
一日をおかげ様でと老いの日々

鳥取県 乾 喜与志

曾孫手を振り視界から消えて行き
雷を落とさにやならぬ雲が湧き
藁焼き捨てて稲の穂がさも軽い

川西市 野 村 静 雄

兵隊が還って孤児がかえれない
転職をすすめて妻のあせり気味
二つ三つ布施のこぼれる盆の僧

大阪市 田 中 節 子

あちこちの踊りが混ざる街の盆
校庭のひまわり垂れて夏休み
吠えられぬ様に愛想を犬に言い

島根県 岩 田 三 和

マネキンと一緒に風呂へ入りたい
隣の兎写して来たぞ泣いた顔
便利よくなって泊らぬ村の宿

岡山県 牧 野 秀 香

居ながら宇宙の果ても見える今
草刈れば虫は止むなく旅に出る
莊厳と静淑を観る五山の火

鳥取県 津 村 八重子

周囲皆仏に見えた嬉しい日
肉まんじゅうほかほか家路まだ遠い
奉仕した心ほのぼの灯に急ぐ

守口市 若 林 市 郎

防波堤洗って帰る波の音
砂利洗う流れて遊ぶ親子蟹
食べ頃を教えるざくろ口を開け

竹原市 古 田 鈍 舟

蜘蛛の巣へハエを一匹とめてやり
わん白でいいと夫婦で一人言
字余りを正せば肩がこってくる

西宮市 飯 森 泰 世

想い出の石一つずつなでてみる
吉祥寺お七の墓に花がある

大洲市 西 山 えつ美

ピッチャーはまるで打つ気のないバット
マニキュアをおとした爪に艶がない

寝屋川市 立 床 晴 風

ロボットも夏ばてしてる操作ミス
金槌が機嫌損ねて釘を曲げ

高知市 北 川 竹 萌

名月を窓で堪能したと母
主人もつ鎖で犬のリラックス

老いの目にデジタル時計見えにくい
大阪市 北 田 秀 月

また同じ話になって酔うてはる

出雲市 大野しま子

茶柱に商談かけて朝の靴

計算が先に走ってきらわれる

兵庫県 野々口 ゆう也

老いらくの刺激返り血あびてくる

買い被りされて仮面脱ぎ損う

米子市 川上より子

満月も聞いているじいちゃまの話

誰の時計も十二時を打った通夜(恩師逝去)

大阪市 北脇清治

夕立で息吹き返す街路の樹

安らぎは湖水溢れる洗い堰

新宮市 田中国彰

城山に立てば聞こえる関の声

皿を割る音より大きな妻の声

大和郡山市 岡田寿美礼

白桃を供えて父母のうれし顔

わびしくて娘の電話元気づく

米子市 金山夕子

欠けてゆく月に届ける冬帽子

崩れては松の姿で立って見る

米子市 宮本佳女男

生き甲斐の趣味も世につれ変わって来た

孫たちの塾になつて祖父の部屋

女房に昔のレター持ち出され

断りの返事をつつむオブラート

八尾市 松下蕉露

炎熱も去ればやっぱり慕われる

艶のない茄子よおまえは日射病

島根県 菅田かつ子

思い切りたいた夫のほっぺの蚊

義姉になる人を覗きにお茶を入れ

堺市 宮本かりん

なかなか糸が通らず五十路に

墜落のニュース大きく新聞来る

兵庫県 平和茂一郎

炎天下化粧くずさぬ京美人

年金の暮しに子猫が遊びに来

高槻市 笠松高子

ローン無いから中流かなと思ひ

あんな女のどこが良いのか他人の恋

羽曳野市 麻野幽玄

許す気になつてゐるのにやって来ず

まだ妻の涙は見た事が無い不思議

橿原市 西本保夫

断崖の下に母なる海がある

妻に注ぐビール一言声かけて

茨木市 井上盛雄

青森県 波ただお

空腹へうなぎの匂い刺戟する
九州の夜はクーラーに負けていず

唐津市 山口 高明

幼虫の昔は言えぬ黒揚羽
冥土への土産が欲しい巻頭句

富田林市 田原 久子

白きもの舞いながらくる冬の使者
ノルマだけこなし出世に遠い顔

島根県 園山 世似

十銭の川柳誌見つけた大掃除（水府川柳の手引）
素麺をおいしく食べて秋に入る

島根県 小田川 智重子

怒鳴られてわたしの傷は癒えました
いい事があつたか隣のお早うさん

大阪市 井上 白峰

潮騒を聞く釣宿の夜具固し
核家族隣の犬が尻尾振り

大阪市 堀口 欣一

蟬の声音ながらの秋子句碑
終戦日今日も満員甲子園

河内長野市 大西 文次

税金で舗装した道掘り返し
厄介者にされているのに気がつかず

大阪市 末永 芙久枝

中流をささえる背広くたびれる

病んでいて果たせぬ夢を見続ける

大阪市 服部 頼一

夏の美味すずきの洗い目の保養
しつけ糸取って愛情子に着せる

岡山県 池田 半仙

雨欲しい時の雷音ばかり
日曜日年金通知一日延び

大阪市 朝田 晃世

祝い事金糸銀糸で結ばれる
かかしにも時代の顔が勢揃い

奈良県 和田 萬里

さあ飛んだ運をまかせて雲の上
のら猫にえさやっているねこ嫌い

大阪市 山本 炬齊

風呂場にて身体を洗うが楽しみて
糸ひいた水飴の長いすそなめる

藤井寺市 菊地 繁男

赤レンガ叩けば明治を語り出し
子の便り威儀を正して父上様

広島市 花田 繁子

何十年してきた洗濯あきもせず
暑い暑い口ではいうが名残り惜し

島根県 堀江 百代

お手玉にのこる昔の数え唄
あっさりとかぶとをぬいだ母の味

独り旅悠々自適幸思う

病む人の膳に楓を添えて置き

大阪市 松岡久留美

ライバルを考え過ぎて雨になり

兵隊蟻を孫の裸足が踏みつける

益田市 里本たかし

雨のプールで泳ぐ夢見る熱帯夜

空想の世界に住める夢の国

大阪市 山脇正之

田の小道バッタ母子にグッドバイ

我が顔の見えぬがままに般若面

大阪市 高森文子

談山神社のもみじは神の創る色

折返し点から量より味にかえ

大阪市 渡部さと美

極楽にとでも行けない小悪人

毎日の米があるから倅せさ

八戸市 島田昭治

軒下の顔が見上げる通り雨

孫に糸通して貰い浴衣縫い

大阪市 野村八重

秋の野に赤で淋しい彼岸花

横道に避けて良い事有りそう

大阪市 喜多佐津乃

明石海峡
橋なんか要らんと蛸の一人ごと

春蝶と舟木一夫と俺が痩せ

大阪市 宇久はる子

連風の糸につながる子の笑顔

庭石に夕立一過苦句う

島根県 森山英子

台風に休みもらった扇風機

灯籠へハチマキさせた蔦かずら

岡山県 富坂志重

山路行く野アザミの花揺れる中

エサ運ぶ蟻は素足で愚痴言わぬ

大阪市 川原章久

伊吹山藻草の里は蔭日干し

娘が帰る嫁いで七年舞鶴弁

大阪市 安西カネ

ひとひらの雲に魅せられ灯のともる

湯あみする窓に輝く星ひとつ

大阪市 富岡温子

豪快なホームランって胃の薬

暑さばけ拭い去れない新学期

新宮市 船越正

風呂上がり冷えたビールの瓶の汗

親ばなれ子ばなれ出来ず長電話

高槻市 大池好古

身を洗う小鳥のしぐさ自立感
やつこ風天まで届けと糸を張り

岡山県 後安江山

照りつづく涙の雫もない日和
おとなしく無口で花は人を恋う

大阪府 橋本悦子

今日の汗洗い流して夕涼み
美しき五色の糸に願ひこめ(七夕祭に)

兵庫県 円増貞子

手料理の温みの中にいる家族
子や孫の笑顔の笛になごむ家

兵庫県 伊沢午郎

座禅会心の垢を洗い落し
高僧の洗心の額よく見かけ

唐津市 筒井朴竜

近松寺煙香迎れば近松碑
俗念を断つ権現の滝行者

泉佐野市 大工静子

一泊の名残り大文字の火も見ず
十円玉音ききわける氏神様

河内長野市 植村喜代

夏早いテレビ番組皆お盆
テレビより涼しさもらう滝の音

和歌山県 北山凡太

どう見ても企業に甘いお役人

中流と言ひ兼ねている貯金帳

泉佐野市 真崎浪速子

喜びを口一杯で示す初孫

鼻だけがお祖父ちゃん似となった初孫

堺市 本田草生

開き直りおかげで打てたホームラン
居酒屋の柵目ギリギリまで見てる

豊中市 額田明吉

真夏日にかすかに響くピアノの音
言いつぎたむなしい心反省会

和歌山市 三谷周三

残酷と思うが矢張り躍り食い
あの声が出ては早くももう峠

大阪市 神崎貴代美

はりつめた糸切れたよう新学期
真白や色とりどりのおせんたく

愛媛県 二宮沢子

老いてな趣味に若さを取りもどす
夏休み父の連休待ちわびる

枚方市 二宮撰子

雨宿りけつきよく最後はずぶぬれで
えんぴつをもって机ですぐねてる

枚方市 二宮正彦

ぼく一べんにゆうどう雲に乗りたいた
夏休みべん強ドッサリゆめだった

西尾 栞 喜寿・金婚

句碑建立5周年記念川柳大会



★昭和60年 9月29日 新阪急ホテル

「9・29を大成功させよう」を合言葉に、川柳塔社総力挙げてのビッグイベント「西尾栞喜寿・金婚・句碑建立5周年記念川柳大会」が昭和60年9月29日（日）シャングリーリア輝く新阪急ホテル紫の間において盛大に行なわれた。夜来の雨も午前中に上がり、全国各地からお祝いに参集した紳士淑女四百四十名、七時間に亘り記念句会、祝賀パーティと繰りひろげられた、その熱気、興奮、感動、喜びは到底ここに再現することはできない。それは本日の主賓・西尾栞主幹ご夫妻の人柄そのままに、明るく楽しく、大らかで、そして、ちよつぱり感傷的な、実に素晴らしい一日であった。

《記念川柳大会》

午後一時、司会の西田柳宏子が開会宣言、野村太茂津川柳塔副理事長が「誌寿七百号の年に主幹の喜寿・金婚・句碑建立五周年と三つのお祝いが重なり、こんなに喜ばしいことはない。川柳界の皆さん、これからも川柳塔を愛していただきますように」と開会のあいさつ、ついで川柳界を代表して日川協理事長・藤島茶六氏が祝辞を述べられた。

「栞先生には四年前、私の傘寿の祝いの席に東京までかけて下さり、『天皇にあやかる傘寿きょうの幸』という祝吟を頂戴し、

また「懇篤な祝辞を賜わった。それで今日は
お招きを受けなくても率先駆けつけなくては
ならないと思っていた。

先年、金沢の宿で先生と枕を並べ、今年も
日川協全国大会（奈良）で奈良ホテルと同じ
部屋で枕を並べさせていただき、その時つく
づく先生のご人格に触れて、なるほど川柳塔
の皆さんが団結して栗先生を盛り上げている
のだなと感じ入った次第である。

重ね重ねおめでとーございます。

名スピーチの後には、川柳塔社相談役・東野
太八氏のおはなし。



祝辞を述べる藤島茶六氏



おはなしの東野太八氏

「私は五年前まで栗先生を婦人科の医者とばかり思っていた」と、二十五年前の栗主幹との出会いのエピソードを披露、川柳雑詠昭和34年9月号の特集「我が愛妻の句」に栗主幹が書かれた。来年は銀婚式」と題する随筆と、句集「水鶏笛」に寄せた麻生霞乃さんの序文とを紹介して、栗主幹ご夫妻のおしどり夫婦ぶりを浮き彫りにされた後、句碑の「一歩出すれば我れ旅人となる心」について次のように述べられた。

「弘法大師のお言葉に『一足三礼』というのがある。人間の一步はいつの場合にも大事な一步なのだ。昔、中国の芭蕉和尚は年中、山の中を旅をしていたが、修行に出来る一步と遊びで出来る一步とは気分が違う。遊びで出来る一步はスムーズだが、修行に行かねばと思うと、その一步はなかなかむづかしい、と言っている。『一歩出すれば……』の句を、私はこういうことを弁えてから、これは栗先生、端倪すべからざる句を作ったなど、正直思った。

人間だれでも家を出るとき、旅に出るとき仕事に出るとき、その第一歩が事の始まりである。旅人となる心」というのは、言い知れない自分だけの契機があるわけで、だからむづかしく一步を考えないで、旅に出るよう

な軽やかな、そしてはつきりした足どりを残すような気持ちで出て行けば、その日は恙なく無事ではないか、そんなふうに見える。

そう考えると、この句碑の句は何かを人に訴え、教えつつけるものを持っている名句だと私は思っている。

司会の河内天笑が祝電を披露、小憩の後、兼題の披露に入り、まず栗主幹が、事前投句「情熱」の謝選を披露。（協取―那須鎮彦・



「情熱」を披露する西尾栗主幹

宮園射月芳・清水健司）入選百七十五句の内時間の都合で佳作六十句と三才が披露された。「ロマン」「祝杯」「空気」と続き、後半の協取が両川洋々・森田熊生・林荒介に交代、「思い出」「小説」「先祖」「太陽」と各選者個性たっぷりの披露が進み、午後四時過ぎ記念川柳大会を無事終了した。

《祝宴》

（谷垣 史好記）



大坂形水副理事長から記念品贈呈

音楽の流れる中を和服の桀主幹夫妻が拍手を浴びて入場、橘高薫風副主幹が川柳塔社を代表して「張り替えた障子の中に母います」「最後の最後の味方は妻なりき」の主幹の手柄を浮彫りにした作品を引き、「六百人の仲間の頂点に立ち、人の和を大切にして歩んでこられた充実した人生の中で、老母に孝養をつ

くしたことを誇りとする先生に改めて畏敬の念を新たにしたい」とあいさつした。

ついで大坂形水副理事長が記念品を贈呈、林瑞枝さんらから花束を贈り、西田柳宏子さんが西尾青一路さんの祝辞を代読した後、桀主幹が、結社の垣を越え、全国各地から多教参会されたことにお礼の言葉述べるとともに、「圧倒されるようなみなさんの情熱に報いるには、川柳の道に精進する以外のなにもでもない。今後とも老骨に鞭打って川柳のために大いに働きたい」と決意を披瀝した。続いて鏡割の後、山田良行日川協副理事長の発声で乾杯、田中好啓ふあうすと川柳社副主幹の謡曲「養老」、三井醉夢さんの詩舞朗詠、故小松園夫人堀小葉寿さんの小唄「竹の八幡」、きやら木有志の安来節など、数々のプログラムが進行する中で大ホールを埋めつくした参会者が時の経つのも忘れて祝杯を酌み交わし、黒川紫香副理事長の閉会の言葉と万歳三唱で宴を閉じた。

（田中 正坊記）

（カメラ・阿萬萬的）

「情熱」

西尾 葉謝選

（A）情熱の詩人が降りた無人駅
（B）情熱のワイングラスは欠け易し
（C）情熱はわが家の塩となる女

弥生 哲郎 鎮彦



三井醉夢さんの詩舞



三津草会連中の民謡踊

(補)考古学に情熱燃やしている夕陽

「ロマン」

八木 千代選

(因)西行・文覚に及ばねどわがロマン 薫 風

(補)ロマンチスト最後は笑っている心算 水 客

(因)橋の名を幾つも越える人形師 藻 介

(補)欠けては満ちる月のロマンにひざまづく

「祝杯」

橘高 薫風選

(因)祝杯の代りに本を三冊買つ 良



きやら木有志の安来節

(補)文学やまだ祝杯はあげられず

(因)祝杯はあす恩人の墓洗つ

(補)うれしさは一つ心で杯を挙ぐ

「空 気」

寺尾 俊平選

(因)一呼吸きらさら海がよってくる 麗 水

(補)頂上の空気が喝采ばかり聞く 雄 人

(因)こんないい空気を独り吸っている 妻 子

「思 出」

小松原爽介選

(因)思い出は乳房小さき妻がいる 大 八

(補)走馬灯やさしい順に死んでゆく 藻 介

(因)思い出もちりぢり花もちりぢりに 俊 平

(補)眼裏に棲む復員の波がしら

「小 説」

渡辺 蓮夫選

(因)小説を伏せて夫の顔を見る 久 子

(補)スラム街一人一人の私小説 寿 馬

(因)没落や小説めきしこともなく 俊 平

(補)透明な仮面を被る小説家

「先 祖」

去来川巨城選

(因)樹の影に先祖の思いやりがある たつお

(補)山の木を売ると先祖の咳払い はつ絵

(因)秋茄子の彩に先祖をうたがわぬ 恵美子

「太 陽」

磯野いさむ選

(因)太陽に演技をつける大巨匠 三 窓

(補)ゴーギャンの画布に触れると陽のぬくみ 幻四郎

(因)太陽がいつぱい男同士のないう午後 道 夫

(補)太陽とあそぶスコアー競い合う

《祝電拝受》(敬称略)

日本川柳協会・番傘川柳本社・川柳展望社時
実新子・大阪川柳クラブ・昭和川柳クラブ
水粉千翁川柳道場会員一同・川柳しんぐう吟
社・財団法人健康管理開発センター職員一同
郡上八幡翠柳吟社一同・西宮北口川柳会・日
本詩人クラブ藤村青一・麻生アト・尼緑之
助・浜野奇童・月原宵明・歌藤一麦・畑中大
三・西村左久良・工藤甲吉・波多野五楽庵・
堀江芳子・土田欣之・西垣錦風・藤岡花梢・
小砂白汀・増田竹馬・森田布堂・弘津柳慶・
吉岡通児・梅みどり・米沢曉明・青木惜春・
鈴木良征・森山盛桜・高橋夕花・田口虹汀・
久保正敏・仁部四郎・浜本義美・浜本ちよ・
田中叶・山口高明・相葉あき・筒井朴竜・住
田三結

お 礼

9月29日の西尾菜喜寿金婚・句碑建立
五周年記念川柳大会には、ご多忙の中、
多数ご臨席下さいまして、まことにあり
がとうございました。お蔭様で大盛會裡
に無事終了致しましたこと、ここに謹ん
で厚く御礼申し上げます。

川 柳 塔 社

愛染帖

橘高薫風選

若者が来て新しい火をともし

大阪市 西森花村

取り入れるおむつの端の十三夜
今日も亦秋刀魚の煙火子家庭

米子市 田中亜弥

風船にすきを見せたら終だぞ
十の指の切れ味母がくれました

松江市 竹内寿美子

小面に私の心見すかされ
湖が溢れて恋がこぼれ落ち

笠岡市 松本忠三

十円の切手六枚はってくる
付け届け梨の礫となっただけ

岡山市 岩道博友

譲られた席で隣は酒臭う
表札の隣へ趣味の名を掲げ

和歌山市 坂部紀久子

ずっと前か昨日の事か母の死よ
誓め方が違う男同士女同士

宝塚市 丸山よし津

こぼれ萩掃き寄せ亡母の忌が巡る
墜落の機より少女のまばたく瞳

米子市 八木千代

秋の扇はこんなに熱いものなのか

八戸市 島田昭治

肩書きも無かんたんに焼けるだろ

豊中市 一瀬福一

石に強く花に優しい雨の音

近江八幡市 前川千賀子

水時計額田も歳を重ねたり

米子市 林荒介

靴音も父の太鼓に似てしまふ

富田林市 藤田泰子

苦勞した話はない樟よ

堺市 桜沢あかり

朝のビル谷間に潮が満ちてくる

倉敷市 小野克枝

成し終えてすこし淋しい帽子掛

米子市 祝部寿美子

花の実はこぼれて生きた証とし

広島市 望月晴彦

紙飛行機より複雑に飛びて落つ

和歌山市 神平狂虎

引金に指がかかったまま眠り

岡山市 松本元江

朝の月宵の月見て孫あやす

羽曳野市 吉川寿美

溝いくつ埋めたら姑になれますか

大阪市 山田妙子

パソコンの乾いた声で挨拶状

高知県 曾我部裕

ひと言も触れずに妻が寝てしまふ

兵庫県 松本ただし

静謐の火花飛び交う菊花展

鳥取県 林瑞枝

色帯でいつまで隠す疵だらう

広島県 田村新造

ふるさととは遠くなりけり目もかすみ

高知県 松岡三吉

弁当のなさを知らぬ若者よ

吹田市 後藤火鳥

亡国の兆し週刊誌に溢れ
こころよりは咩形のみを供として
ひき出しの奥に隠れているハイド

藤井寺市 赤木和子

鳥取県 新家完司

恩師 長谷川霜鳥氏急逝
青森市 工藤甲吉
鼻先の死のささやきを誰か知る
ヤジロベー君は非武装中立か

笠岡市 木山遠二

寝たきりのお膳について猫が来る
寝たきりといえども九月十五日

今治市 月原宵明

惚け夫婦毎日喜劇繰り返す
日本に生れて国歌うたわさず

鳥根県 堀江芳子

見えてたらこの一喝は無いものを
冗談が湧いて下座の酒せわし

鳥根県 堀江正朗

けんめいに生きる此所にも蜘蛛の糸
おしっこをゆっくり苛立ち流します

鳥根県 堀江正朗

亡国の兆し週刊誌に溢れ
こころよりは咩形のみを供として

藤井寺市 赤木和子

ひき出しの奥に隠れているハイド

鳥取県 新家完司

ひき出しの奥に隠れているハイド

人恋し秋の夜長の長電話 高槻市 笠 鳴 恵美子

さるすべりほんに残暑の色に咲く 吹田市 栗 谷 春子

孫くる日はなんなりとした蒲団干す 守口市 結 城 君子

耐ハイにレモン浮かせて待つてます 鳥取県 土 橋 螢

映画「お葬式」も中流です 豊中市 奥 田 満女

錆びた矢で射られたくない秋の空 和歌山市 福 本 英子

緞帳の下りて凡夫の顔となり 和泉市 西 岡 洛 醉

さりげなく妻が持つてる隠し球 唐津市 久 保 正 敏

タラップを人形だいて女の子 堺市 木 田 草 生

街角のポストも秋へ充実す 和歌山市 西 山 幸

マイカーでとてもお寺が近くなり 寝屋川市 平 松 かすみ

いもたきの本場きれいな川があり 愛媛県 西 山 えつ美

磯かまど島の真水で身を浄め 東大阪市 津 雲 一

子の夢へ老残敢えて逆らわず 唐津市 浜 本 義 美

サイエンス医学以外はもう要らぬ 唐津市 仁 部 四 郎

兵庫県 野々口 ゆう也

浮くでなく沈むでもなく八十路来て 出雲市 板 垣 夢 醉

羽繕いして待つ女の適齢期 米子市 川 上 より子

遊ばせてあげたい蜂のいる小庭 米子市 小 西 雄 々

歓迎の握手に鬼の手も混じり 新発田市 上 鈴 木 春 枝

単身の夫を受話器で診断し 高槻市 河 瀬 芳 子

今だから解る女としての亡母 和歌山市 桜 井 千 秀

本棚で私の思想赤茶ける 名古屋市 藤 井 高 子

口止めがきつうて喋らずに居れぬ 竹原市 信 本 博 子

優しさを見せて過ぎ去る白い雲 和歌山市 三 谷 周 三

敗戦の夕日照る海血で染まり 岡山県 小 林 妻 子

鳥取の梨は二十一世紀へ続く 尼崎市 春 城 武庫坊

月の出はビルより塔の横がよい 河内長野市 植 村 喜 代

いやなこと皆んな消えても淋しすぎ 寝屋川市 堀 江 光 子

ふるさとの柿をしばらく手で眺め 和歌山市 山 川 克 子

理想とは勝手なものですでも理想 島根県 西 村 早 苗

眼を閉じて亡妻の声聞く彼岸花 島根県 西 村 早 苗

蟹気楼そつと片目で見えてこらん 佐賀県 寺 中 三 枝子

秋夜長女源氏を読むとする 今治市 野 村 京 子

陽と遊ぶ魔女が夾竹桃が咲く 久留米市 鶴 久 百 万 両

素石碑へ追慕の弔句うるむ供華 唐津市 筒 井 朴 竜

日本語がこんなに温いもの帰国 伊丹市 樫 谷 寿 馬

出稼ぎの包みほどくと父になる 弘前市 波 多 野 五 楽 庵

ゆずられた席をためらうこともある 島根県 大 屋 秋 峰

表門にも裏門にもある赤電話 滋賀県 久 保 和 友

軍隊手牒かつての僕のライセンス 豊中市 田 中 正 坊

西日さす向う三軒両隣 守口市 森 川 まさお

妬く事が好きな女の枯れた顔 島根県 佐 々 木 裕

寿司つまむダイヤの指輪よく喋り 愛媛県 石 手 武

入院中なので救心預かれ 大阪市 市 場 没 食 子

山の灯が近づき秋に手が届く 西条市 片 上 明 水

何気ない話の中で詩を拾い 高知県 山 下 登 舟

富田林市 岩 田 美 代

午前11時5分から

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

恒松 叮紅

妻という身分証明書を埋める

松本文子

ご主人が50歳の働きざかりで急逝されたのは七月中ばのことである。その深い悲しみの中から他の五句もともに作句されたもので、中でも特にこの句が私の胸を突いた。心の中にポツカリと大きな穴のあいたような淋しさを、健気にも川柳へ向けられた作者の心情に敬服し、早く元気に立ち直られることを念願するものである。

貧乏人でウソの話にもらい泣き

高橋 千万子

貧乏人は正直で、何事も素直にうけとめる。嘘の話と知っても、つい騙されて涙を出してしまう。

冗談を本気にされてからの距離

有働 芳仙

お互いどちらも善人で、うっかり放った冗談が結果を悪くしてしまった。小さな距離が

大きくならねばよいが。

対岸の火の粉をもろに保証印

西川 景子

「対岸の火事」と楽観していたが、被害は自分の方へ廻って来た。豊田商事の事件もついこの間のことだ。

三度三度きつちり食事とる無職

舟木 与根一

現職の頃には付き合ひも多く、時には午前様だったりして、そんな頃を思い出し、今はあくせくする事もなく、家族と一緒にきつちり食事がとれる幸せを感謝する句。

年金のくらしへ白いめしがある

嘉数 兆代賀

これも前の句と同じような句意。わずかな年金でも満足な食事が出来る健康な日々に感謝する句。白いめしが佳い。

肚割って話したい子は遠く住み

江城 修史

頼りになる子は遙か遠くに住み、長男とは別居して淋しい独り暮らしの老人を真近に見ている私にはこの句が痛いほどわかる。

しじみと傘の大きさ老母逝つて

堀江 芳子

失つてみると母親の愛は傘ほどの大きさであつた。母親の深い恩情と母への思慕が傘の大きさによく表わされている。

休肝日だからビールでやめておく

増田 次章

この句を見て私はふつと可笑しさがこみ上げて来た。晩酌が欠かせない人間の心の底を

見透かされているようだ。

編棒をさがしておこう床の冷え

柴田 英壬子

何気なく感じた床の冷えに編棒を連想されたのはさすが。秋の夜長や、冬の炬燵での編物は女の楽しみのひとつ

小糠雨ついそことすにだまされる

大塚 節子

住みついた人の「ついそこ」は長い道のりに感じた。おまけに小糠雨である。

気にかかる子がひとりいて生き伸びる

古野 ひで

みんな同じように育てたつもりだが、中に落ちこぼれの子が一人居る。この子のためにはまだまだ生きねばならない。

コピーしたような息子が気をもませ

時末 一灯

自分の若い頃とそっくりだ。嬉しくもあり心配でもある。しかし似ているからこそ深い絆で結ばれる

独りいて複数の金魚飼っている

園山 多賀子

複数とは面白い。何気なく見過す状況を作者はうまくとらえて句にした。

傷口をさかなでにするボールペン

野中 御前

甘言にすぐ乗りたがるイヤリング

堀端 三男

まだ書けぬ返信があり失語症

岩田 美代

句百選

紅 叮 松 恒

男手で嫁かせる朝を小雨降る
定年前になつて本気で金を貯め
双方に自由があつて嬉しい日
それだけの話に妻の長電話
過ぎ去れば竹槍火叩き皆狂気
電話口小さな嘘を妻がする
炊くコツを知らず電化の味に馴れ
酒好きと見たかグイ呑みの旅土産
未完成の夫婦が住んでいる団地
休肝日一日延ばす会があり
菜種梅雨知恵がわかない粗大ゴミ
働いた手を大正は大切がり
平均に播いた種にも出来不出来
野仏の道を曲ると亡母が居る
たたまれて放浪癖をもつ紙幣
中年の夫婦に皿が一つ割れ
別居して嫁の意見について押され
巻く筈の竹へ逆らうつるもある
正直のレールを父が敷いてくれ
両手があるのに勿体ない自動ドア
牡丹雪人が倒産する話
芸が身を助けて無職忙しい
孫もまた血筋近所へ詫びに行く
肉食と菜食別居して平和
夫婦して積んどく主義の性が合い

落ち目なら庭の盆栽までも枯れ
善人の夫で小さい灯をともし
正直な路線へ遮断器が降りる
あらそえぬ血筋に高所恐怖症
痩せましたねエと気になる事をいい
耳遠くなつて意固地な人にされ
魚にも祝膳にのる運不運
贅沢な夫婦喧嘩の発火点
負け犬の男へそそぐ小糠雨
縁談へ宗派の違ふことでもめ
仏にも不運真夏の火葬場
晩年の辛さを噛むループタイ
この道もいずれ舗装か曼珠沙華
衝動買いがまだ治らない子無し妻
デジタルを使つて指先から惚ける
晩酌の向うで妻のアレルギ―
親も子も器用貧乏の生れつき
あれ以来電話口では騙されぬ
夫婦して決め幸せの文字を書く
チャンとした理由があつて昼の酒
同棲をしたとは大杜さん知らず
人間の都合は酒が責めを負い
仏壇を飾り小さな安堵感
ここらまだ薬屋根がある人情味
組板のリズムに早い日が暮れる



ロボットのようには部品は替えられず
店先で粗品と書いてはばかりず
初詣で古いくらしがまだ残り
体力の限界を知る雪の量
やがて長い旅が待ってる蝸牛
爪に泥菜園秋の風が吹く
つっぱりが素直にもどる無人駅
世話好きな夫婦で小鳥・犬二匹
うっかりと風呂が溢れていた電話
下着まで箆笥の隅にいる夫
犬・小鳥・金魚に孫の兜虫
仏壇の横で聖書を子が開く
キリストで結び和服で色直し
庭石にすえると見える裏表
負け犬の男が仰ぐ昼の月
断りの文句を探すインキ壺
還暦に一つ秘密を置いておく
身体だけ大人で学生証をもつ
物惜しむ父に息子の捨てる主義
正直な夫婦でいつも残がない
ロボットに自律神経侵される
子育てを終えると主婦のサブ権
美人画を買った日からの自閉症
一気飲みここなら許す花の下
ワープロで思いのだけは届かない

木守柿子供は塾へ忙しい
木守柿ここら旧家のたたずまい
木守柿二階の窓は受験生
傍系の中に不倫が一人居た
国道渋滞ガラ空きの特急車
チュウハイを大正邪道だと思い
ロボットにいつか年功序列来る
離婚話を遠い角度で書く夫婦
焚火して背を向けている仕掛人
水瓶の底に浮いてる母の地図
ロボットに能面だけは作らせぬ
ぶつかるともろい心をもつ世代
人間をせっかちにする交差点
一徹で許すがいえぬまま惚ける
演出に踊らされてる色直し
死後がまだ気になるほどの苦労性
故里は深い絆の曼珠沙華
ロボットに職人氣質わかるまい
会葬でパッタリ逢った笑い声
寿命ですという手で新型買わされる
昔話が風化しているほり炬燵
秒針の速さへ老骨ついてけず
ゲートルを巻いた足です神経痛
金持ちになれぬ弱気な葱坊主

句選百

々 洋 川 両

バラ愛すおとこ悪役にはなれぬ
握る手の一つ敵意に炎えていた
平和ボケその脳天で核が裂け
約束を果たす返り血妻と浴び
人を恋う色で真夏のカンナ炎え
風見鶏の非哀どの笛でも踊り
ああ賢母涙に弱い鬼を飼う
百姓のロマン古米へ揺れつづけ
故郷恋うますます替女の三昧が冴え
渡り鳥覗く戦火の国いくつ
ホラ吹きのラッパも不況から湿り
走馬灯回ると過去が疼き出す
喪の明けたおんな再起のバラを買う
春の鹿恋のもつれへ角を研ぎ
メルヘンの月ようさぎも核呪う
湯の宿で失意のハート縫い急ぐ
鬼が吹く口笛だから振り向けぬ
ロボットになれと始業のベルが鳴り
敗北感沁みた制服脱ぎ急ぐ
ゲンマンを燃えた小指に言い聞かせ
印相を変えても味方ひとり減り
辞表書く紙の白さにまだ迷い
花ビラの一つ一つにある妬み
火消し壺へおんなの性を封じ込め
中流のサイフはいつも風邪をひき

人生の真ん中辺で運に逢い
俺の主義稼ぐ軍手に言い聞かせ
たった今国が生まれたクーデター
極楽の地図ふところに亡母送る
ローカル線死ねと政府が補助を切り
深海でねむる大和だ起こすまい
ふところに辞表を抱いていた叛旗
懺悔まだ足りぬ座禅を蚊に食われ
ライバル失脚すこし高目の枕買う
ノーマアの核が地球の裏で裂け
債鬼から逃れる嘘を子につかせ
枕木の寝言も聞いて旅ひとり
マンネリの打破へ印相変えてみた
親の気も知らず二浪の腹を決め
たくらみのすべてオリオン見てしまふ
倦怠期のり切る変化球らしい
十字切るその手で鳥の首を締め
ロボットに切られる僕の首を撫で
減反の愚痴を雑草聞き飽きた
地球儀の裏は飢えてる泣いている
火の恋へ愛のヒューズが切れかかり
枕木の四季の寝言を工夫聞く
開眼のダルマ一票差にや触れぬ
始発いまドラマを詰めて北へ発つ
優しさに逢うと仮面がみんなずれ



職安で無職と書く日歩が重い
割り引いておんなの涙見積もるか
ゲンコツを開くと怒り一つ落ち
争いの国も地球儀抱く疲れ
矢弾尽き果て今日を限りのレール剥ぐ
制服の処女へ熟年けつまずく
出稼ぎよ帰れ帰れと苗が伸び
レール二本敵意を抱いたままだに伸び
再会の友の羽振りをすこし妬く
握る手に休戦ライン血が匂い
針千本憎いおんなに飲まそうか
浸水のここでも市税ふんだくり
妻という鶴匠へ稼ぎみんな吐く
神様も偽装結婚とは知らぬ
化粧落とすとピエロ笑えぬ顔になる
また議員ですかと汚職記事に飽き
主義主張ないからエサで釣ってやる
理性まだあって不倫の字におびえ
反抗期さとして丸い語を選び
汚職など知らぬ手の平陽をはじく
多情なる女を神も持て余す
ストの日の駅を乾いた風が抜け
反主流が振る旗だから血が匂い
過去胸にしまうに胸が小っちゃすぎ
失意の日つづきエブロンうす汚れ

奢られる財布の中味見てしまい
苦労させた妻の白髪だ抜いてやる
顔で笑って心で泣く日酒が要り
やわ肌へ理性の蓋が外れかけ
キリストも無力善人泣いている
小骨抜くそんな人事で左遷され
頑張ったレールが赤字ひつかぶり
コケシが目覚まずぞ喧嘩よしなはれ
永眠へ痛さも抜けた手を組ませ
倦怠期ころの襷に雨が漏り
人柄がズボンの折り目にも匂い
割箸を割ると汚職になりそうで
癌だとは亡父に知らせぬままでした
引き金を引く指先で十字切る
心貧しき日なり振り袖でも着るか
孤児の目にやたら子連れが突き刺さり
時間よ止まれ亡父焼く点火ボタン押す
守備範囲広い妻です家に居す
白い杖風の私語にも立ち止まり
愛冷えてからの仕草が鼻につき
会者定離俺を憎んだままで死に
再建へ遠く空車の貨車を組む
ざまあみろの拍手へ棺の蓋が開く
運一つつかめぬ父を子よ許せ
正直な男の針で妻へ向く



青森県川柳大会に参加して

秋晴れの九月十五日、川柳塔相談役の東野大八さんを特別選者に迎えて、第三十九回青森県川柳大会が東奥日報社ホールで開かれました。

大会では、県内各地から集まった約百名の川柳人を前にして大八さんが『夏のこたつ』と題して講演しました。この題名は、同氏が去る八月二十五日、第十九回島根県文芸祭に参加した際、尼緑之助さんが真夏に火を入れ、たこたつに座り、訪れる人々と柳論をたたかわせるのを見て名づけたもので、大陸にお

ける戦争中の思い出、愛妻八重さんとの出会い、戦傷で左手を失った話を枕にして短詩型文学論に入り、川柳と俳句・短歌との比較や川柳のあゆみを述べるとともに、田中五呂八の神秘句やいわゆる難解句を批判、「三要素を近代化することが川柳の進歩につながる。作句は自分と自分との対話である。一句の中にドラマ性が必要ではない」など、約一時間にわたって説き、参会者に強い感銘を与えられました。

また、大会では川柳塔参事の工藤甲吉さんが総合得点で第一位となって県知事賞を獲得し、特別題「星」（東野大八選）では、「星凍てて津軽の口が重くなる。（福士光生）が天位となり、第三十五回大会特別選者の川柳塔副主幹の橘高薫風さんが、路郎、生々庵先生とともにこの大会に参加した思い出を語り、営々として大会を続けてきた東奥日報社の功績をたたえました。

なお、この大会には川柳塔から藤田泰子・田形美緒・田中正坊も参加し、帰途、東野大八夫妻とともに、函館、十和田湖、平泉、八甲田山、松島、仙台を訪れ、初秋のみちのくの旅を楽しみました。

（田中正坊記）

第27回

豊中市民川柳大会

日時 昭和60年11月23日(祭) 正午開場
場所 豊中市立中央公民館

阪急富根駅下車南一丁三叉路東半丁

柳話
宿題 素顔
コーヒー

嵐 久保田元紀選

粹 尾谷 清風選

視野 西田柳宏子選

滴(しずく) 黒川 紫香選

ルーツ 岩井 三窓選

当日席題一題 水島羊之介選

各題二句 神前 朋義選

賞 豊中市長賞他(各題秀句に水島

羊之介画伯の額装版画を贈呈)

会費 一、〇〇〇円(記念品・発表誌呈)

主催 豊中川柳会

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

西出楓 楽

五句選ばれた方の句は、さすがどれも秀句に入れたくて、読者の鑑賞にお任せすることにした。

秋は結婚のシーズン。周囲を見まわせば、何組かの夫婦が誕生する。二人はこれからの長い年月が幸せであると信じて疑っていないだろう。けれど、ほとんどの夫婦に耳をすませば、不協和音が聞える日もあるのではなからうか。

他人には見せぬ夫婦の隙間風

小山 悠 泉
息切れをしながら廻る夫婦独楽

光井 玲 子
うっかりと妻の似顔に髭を描き

羽津川 公 乃
てのひらで夫のエゴを丸めると

山田 妙 子
老夫婦お茶うけに出る古い嘘

亀井 円 女

返事せぬ妻とその上この暑さ

田中 叶
恐妻に乾杯をする恐妻家

大西 文 次
妻いない一週間は長かった

松本 一郎

夫も妻も、いろいろ愚痴ってはみても、最後のこの句が本音であってほしい。この句の「妻」は「夫」に置き換えてはならないと思う。「夫」にこの句を詠ませる「妻」像、ひいては夫婦像が彷彿とし、頬がゆるんでくる。誕生したばかりの夫婦が、波風を何度も乗り越えて、それぞれの愛の型を作ってほしいと願う、今月特に目についた夫婦の機微にふれる秀句を選ばせてもらった。

つかんだ虹をそつと小皿へ盛ってみる

さえき や え

幸せは主観的なもの。そして女は、ほんのささやかなことにも幸せを感じることができるもの。「小皿にそつと盛る」表現が、女ならではといえよう。

冷えきつた妻茶があつて熱いお茶

この句を巢に主婦の心得とみるよりも、一歩奥を読んで、人生のありようと取って選んだ。

融通のつかない老母の鯨尺

吉川 寿 美

老母はひとりになると、鯨尺をメートル差しにかえられぬ自分をうらんでいるのかも知れない。老母と鯨尺の組合せが秀逸。

人のことほめてたのしくなりました

真喜内 實

説明や鑑賞は、蛇足となるくらいがあるが敢えて、「平易なことばで奥行のある句」の見本。

赤いシャツ着て過去は振りむかず

稲本 凡 子

作者にどのような環境、心境の変化があつたのか知らない。けれど「赤いシャツ」から前進の様子をうかがうことができる。

窓しめてカーテンしめて人を恋い

桜井 千 秀

ひとは孤独をかこつとき、それを他人のせいとしてうらむ。しかし、よく考えてみると自分が心を閉ざし、窓もカーテンも閉めてしまっていることが多いのではなからうか。

ひまわりの下で貧乏くじを引く

広本 文 子

そう言えば、世の中はひまわりと、その下で暮す人の二種類かも知れない。そして貧乏くじを引かされるのは、いつもひまわりの下の者なのか……。

見直せばカマキリ可愛顔してる

小田川 智重子

日本ではあまり好感を持たれていないカマキリが、ある国ではその体型から「祈りの虫」といわれているそう。このように、ものは見方によって随分受取り方が変わってくる。句も、ものを正面だけでなく、横、裏、下、上、遠くから、等視点を変えて見るにより、奥行きや味わいが深くなるだろう。

亜欧旅日記

(上)

シルクロード編

田中正坊

八月五日から同二十四日まで、大阪外国語大学の黒木義典名誉教授（フランス語科）、山口慶四郎教授（ロシア語科）をリーダー兼ガイドとする一行二十四名のオムニバスツアーに参加した。私はこれまで何回か海外旅行を経験しているが、黒海・地中海の船の旅を是んでアジアからヨーロッパへ、地球を半周する二十日間にわたる長い旅は「初体験」であり、一般のツアーでは立ち寄らない都市とその周辺を見聞できたことが、何よりの収穫であった。

新潟空港からアエロフロート（ソ連国営航空）機で約二時間、到着したハバロフスク空港は、シベリアの玄関口だけに、日本人が多数いりまじった乗客でこったがえしていた。翌朝、船でアムール河を下り、バスで市内を

観光した後、七時間の空の旅で中央アジアのタシケントへ向かった。

タシケントは、ウズベク共和国の首都で人口約三百万の大都市。ここを起点としてシルクロードの各都市を訪れたわけだが、この町は二十年前、大地震に見舞われて多くの建物が倒壊し、その後、短期間に近代都市として再建されたもので、地下鉄も走っている。滴のような大噴水がある壮麗な共和国政庁はじめ市内の石造建築物の壁面彩色は、木を表す緑、空を表す紺、水を表す白の三色が基準となっており、高・低の調和も図られ、町全体が整然として美しいのが印象にのこった。私たちのバスが駐車している時、近くに矢張りによく似た模様の民族衣装を着た婦人が



たむろしていたが、やがて太鼓を鳴らしながら輪になって踊りはじめた。住民の大半を占めるウズベク人の表情は、日本人とよく似ており、陽気で人なつこい。どうやらこの一群は、郊外の農村から市内見物にきたものらしかった。バザール（市場）でラグビーのボールを一回り大きくしたような西瓜を買って食べたが、実は淡いオレンジ色でメロンのように甘かった。

七日午後、小型プロペラ機で二番目の都市サマルカンドに着いた。この町は、かつてイラン系のソグド人の都であったのが、アレキサンダー大王によって征服され、十四世紀末にはチムール帝国の首都となっており、チムールが晩年に愛した王妃の名を冠したビビ・ハヌム寺院、彼の一族が眠るシャーヒ・ジンダ廟群など、貴重な中世回教建築が市内のいたる所にあり、いかにもシルクロードの町らしい。

シルクロードは、NHKテレビの特集でおなじみだが、古代中国の特産である絹が、草原を通り、砂漠を渡るキャラバンによって運ばれた「絹の道」で、西方からは宝石、織物などとともにイスラム（回教）文化が東漸、通商路に沿った各都市に根をおろした。文字どおり一片の雲もなく、青空というより「蒼穹」という表現がふさわしい空に、エメラルド色のドームが照り映え、さまざまな幾何学

文様で飾られたモスク（寺院）は、華麗の一語につぎ。

その中の一つ、シャーヒ・ジンダ廟群は、東方回教徒の霊地で、いくつもの寺院と霊廟が石の階段をはさんで所狭しと建っており、廟内には石棺が安置されている。また、レギスタン（砂の町）広場を囲んで三つの巨大なメドレセ（回教寺院）があり、その一部の内装が復元されていたが、金色とエメラルド色に輝くまばゆいばかりのドームには、星や孔雀の羽根をかたどった文様が描かれており、チムール帝国の栄華をしのばせていた。

八日は、サマルカンドから東へ約七十キロ



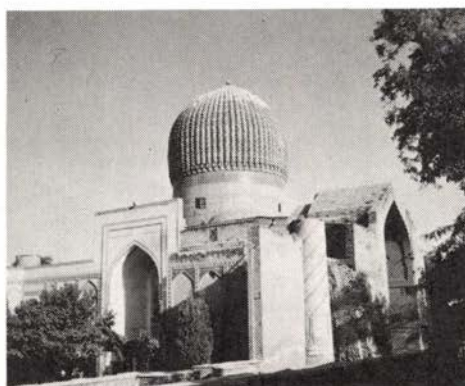
タシケントのバザール

の地点にある幻の古代都市ベンジケントを訪れた。ソグド人によって築かれた町が八世紀ごろ、アラブ人によって破壊され、長く砂の下に眠っていたのが、戦後、広大な面積にわたって発掘がすすめられており、寺院や工場、民家の遺跡が明らかになっている。古代ギリシャ人のような美人ガイドとともに見学した博物館には、ソグド土器をはじめ鉄器・国印など、発掘された遺品が展示されていた。

次の訪問地、ブハラへは六時間余の列車の旅で到着。翌朝、バスでブハラ砂漠に向かった。道路の両側は一望の砂漠で、所々に美しい水をたたえたオアシスがあり、泉が涸れて岩塩が露出した窪地、岩とみられる土塁があつて、NHKテレビの画面のような風景が展開され、バスが停車した辺りには一面に砂丘が広がっていた。

細かい粒子の砂は焼けつくように熱いが、それでも鋭い棘のある草が点々と生え、小さな紅い花をつけている。砂の上に何やら動くものがあるのでよく見ると砂と同じ色のトカゲで、炎天下の不毛の地に生息する動植物の生命力の強さを感じさせた。帰途、砂漠の中にバオ（包）があるので立ち寄ると、モンゴール系らしい老夫婦がひっそりと住んでいた。

ブハラ市内には多くの古代回教建築があり、町全体が博物館の観があるが、いちばん目立つのは市街中央の十二世紀に建てられた高さ五十メートルのカリヤンのミナレット（尖塔）



サマルカンドの回教寺院

で、メッカへの祈りの時刻を知らせる鐘楼であるとともに、敵襲に備える望楼の役目も果たし、キヤラバンのための砂漠の灯台ともなっている。あるモスク風の小さな建物に入ると、内部は喫茶店となっており、テーブルから流れるコーランを聞きながら濃いアラビアカーヒーを飲んで旅情にひたつた。

これでシルクロードの旅は終わり、タシケントから空路、エレバンを経て黒海沿岸のオディサに着き、ここからソ連の客船ベルロシア号に乗船、黒海から地中海への船の旅に出発した。

初歩教室

題——道——

阿 萬 萬 的

「道」という課題に対して一つは思い出に
つながら故郷の道と、もう一つ人生の道の句
とが多かつたようです。特にみなさんは数多
くの人生経験を持っていられるので多くの佳
句に接することが出来ました。では先ずふる
里の道に通ずるものから。

バスが行く岬の道に光る海 草 生
(光る海岬の道をバス曲る)
古里の道なつかしい杉木立 国 彰
(杉木立故郷の道は風光る)
お地蔵も泣いてくれます別れ道 高 代
お地蔵もを字余りになつてもやさしくお地
蔵さん、としてみては如何でしょう。
頂上の稲荷へ石段つづく道 静 子
頂上の稲荷を私なら山頂の祠としますが、
みきたいし道 石のしるべのあたたかさ てる
苦むした笑顔に供花あり道祖神 輝 月
四季それぞれに変わる遠い山の景色などを折
り込めたら尚一層美しい絵になるのと……
バス降りて嬉し懐かし里の道 ち よ

人情があつたがたがたバスの道 かすみ
昔中村メイ子が歌つた。田舎のバスはオン
ボロ車……を思い出しました。

道ぐさの子に戯れる赤トンボ 白 峰
雑草の道案内を跳ぶ蛙 明 吉
斑猫が道を教える山の道 勝 美
散歩する道の句もたくさんありました。

公園の小道はのかな恋めばえ 久留美
今ときのギャル達は仄かな恋じゃ？
散歩道いつものメンバー定つてゐる 晃 世
(いつも会う顔ぶれ緑の散歩道)

深呼吸妻といつもの散歩道 弧 舟
老夫婦が散歩する光景 私も少々羨ましく
なつて来ました。

散歩道不安を消してくれる花 高 代
夢で歩く小道は今も花が咲き てる
(散歩道おんな心へ曼珠沙華)

近道にやっぱり吠える犬が居り だし
吠えられて今日から変える散歩道 春 枝
棒切れを立てて岐れの道をきめ 八 重
(棒切れで占つて見る秋の道)

告白をボツリボツリと遊歩道 愛 子
廻り道それも楽しい二人なら サワ子
月がとつても青いから遠廻りして帰ろを
思い出す私も少々古いかなあ……。

自動車公害の句もありました。
道幅を広げりや駐車でなお狭め やすお
(道路拡張 駐車違反でなお狭め)
どの道もみな自動車に乗つたられ 兼治郎

なるほど私達歩く道はほとんど無い始末で
すね。

コンクリの歩道口マンも冷えてくる 英久枝
夕立で湯気立てている暑い道 温 子
下五暑い道をハイウエイとかアスファルト
とかにしてみた方がよいのでは。

牡丹咲く島が栄える道が出来 高 代
(牡丹島の夢が消えそう道が出来)
国道になつて世の中、かえつて暮しく
便利になつたの、

まだ生きていた裏道の浜寺草 草 生
私不勉強で浜寺草を知らないのですが、お
教へ願えたら幸甚に存じますが……、もじり草
なら知っています。

裏道は一番電車へ歩く道 勝 美
朝の道速歩で歩く人つづく 節 子
この道を抜けたら早いと定期券 里 子
(改札を速や足で出て朝の道)

この道を曲ればやさし紅芙蓉 松 子
道行けばあちこちの庭さるすべり 千代女
(団地みなおんなに花で四季めぐる)

巡り来る春を信じて秋の道 克 子
耐えること道の雑草に教えられ 昭 治
元近鉄の鈴木選手の草魂ですか。

雪山はリーダーの靴痕道となり 繁 男
登山道声かけあつて今日の友 島
山道を歩けば青空見えてくる 泰 世
細道で美人によける余裕なく 周 三

(細道でおんなに隙のない歩幅)

苛酷な砂漠つらぬいて長い絹の道 節子

(シルクロード 苛酷な歴史秘めて延び)

参道に万灯ゆらぐ盆の宵 白峰

お墓までマイカーで行く里の道 やすみ

道一つ隔てて地価が違つてゐる 義男

伊勢詣で玉砂利の道さくさくと 久留美

旅や好し知らぬお方と道連れに 章久

道連れに人生開けるローカル線 洋子

(ローカル線で道連れとなり栗貫う)

さて人生の道の句であるが、これは皆さんの

の貴重な経験から生れたもので、出来る限り

原句のまま並べさせて貰いました。

道草をしたので彩が深くなる よし津

回り道して来たけれど役に立ち 芙久枝

(回り道して来て芸に幅が出来)

多趣多芸陽のさす道が見つからず 昇

運という逃げ道がある人生論 正之

逃げ道をつつ残して攻めたてゐる 実男

道連れになったばかりに悔い残り 仙吉郎

人生の道連れだしたら、この句奥さんに

見せたら叱られますよ。

道ならぬ恋に走つた曼珠沙華 里子

人の道外せし末路哀れなる やすお

愛一途おんなに辿る道がある 寿子

通ると立札のありけもの道 久子

人間社会にもこんな立て札があるといひの

ですが、それでも暴走族などが……。

一本の糸をたぐれば修羅の道 千恵子

日本のあゆんだ道の嶮しけり 国彰

(戦後日本あゆんだ道の嶮しけり)

栄光は歩いた道が違つてゐる 晃世

近道に大きな穴が出来てゐた 博子

栄光の道にあつた落し穴 静子

(エリート)の道にもあつた落し穴) 洋子

陽なだ道歩く要職上の事故 日航事故、これも一つの落し穴かもね。

道草を喰つたご亭主空いばり カネ

屋台かどこかで一杯ひっかけ来て「これ

も交際だ」とばかりに空いばりしている光景

又ほはえましからずや……ですな。

出世の道学歴だけで決まらない 寿美子

後進を信じて開く茨道 義男

平坦な道を願うは親の方 てる

無意識に無難な道を選んでゐる よし津

終章につづく道程現在地 久子

この道はいずれ行く道母を看る 新造

亡き夫の影を慕つて遠い道 寿美子

夫婦坂越えて余白の花の道 実男

(夫婦坂の余白に白い花の道)

生きている道の余白は晴天だけを希い 愛子

(生きている道の余白は晴天だけを希う)

老いの道妻と二人の視野狭く 昇

どの道もひとり道の道は安からず 松子

(女ひとり道の道へ覚悟の風が吹く)

老兵の道に指揮者はもういない 昇

曲り道極楽浄土はまだ遠い 泰世

皆さん淋しい事ばかり言わないで下さいよ。

人生に思索しどきの岐れ道 正之

再起期す度に道の数が減り たかし

(再起期す度に私の道が減り)

泣きに出て泣ききれぬまま回り道 愛子

来た道は振り返らない恐れから 泰世

ゆきずりの道で素顔を見失う 寿子

罪一つ捨てて明日への道をゆく 千恵子

色の道年輪隠す厚化粧 白峰

六十路まで歩いた道に自信あり 新造

世渡りにうとい道士の父を恋う 輝月

(世渡りにうとい亡父の道を恋う)

日暮れ道迷わず帰れはぐれ鳥 千恵子

青い鳥どこに居るのか道とおく カネ

踏み外すレールなき道しかと行く ちよ

少しづつ主婦になつてく帰り道 春枝

地図にないくらしの道にあるドラマ だだし

寄り道をしない僕だがこの程度 昭治

花道はないが家業の農をつぐ 静子

好きな道歩いて今日の叙叙沙汰 よし津

母の道振り向く事は許されぬ 克子

一筋に老舗の道を守りぬく 千代女

女の道説けば古さを笑われる サワ子

題「松」 11月10日締切(1月号発表)

「石」 12月10日締切(2月号発表)

宛先 〒598

泉佐野市中庄一〇八一一九九

阿萬 萬的

勇 氣

植村客遊子選

欠点をかくさず言つてプロポーズ
山頂を目前にして去る勇氣
ライバルの勇氣に負けぬ子に育て
勇氣出して唄う音痴が笑えない
占いで勇氣を貰う朝の膳平松かすみ
散り急ぐ勇氣を持った花の自負 伊津志
腹決めた女の勇氣に後がない 古都路
ひまわりの勇氣太陽直視する 正敏
酒止める勇氣は孫から注意され 博友
七人の敵へ勇氣が一ついり しげお
ハイハイと一歩後退する勇氣 豊
嘘をつく勇氣都会で学んで来 志重
フラッシュを浴びて勇氣の花開く 裕
子の勇氣はめても釘は刺しておく 三枝子
イエスよりノーに勇氣が要りました 多賀子
親に似てじつと我慢の男の子 草生
受けて立つ勇氣の鍵をもっている 実男
気兼ねした分だけ勇氣でてこない 弘舟
敗戦の弁は相手を褒めるだけ 天
フン切りがつかず四十でまだ一人 あだし
夫に勇氣ないので妻がシャシャり出る 理恵
素顔では笑う勇氣のないピエロ 京子

子育てへ亡夫の遺筆が勇氣づけ
馬鹿になる勇氣が人生丸くする
つまらない勇氣を出して座がしらけ
父の死が勇氣をくれる向い風
末席の勇氣が痛いところをつき
イエスノーはつきり言える娘に育ち
熱燭を持つと不思議に勇氣出す
真直に歩く勇氣を教え込む森脇和子
ノーという勇氣を母は娘にさとし
勇氣一つ二つ重ねてプロポーズ
飼主が居て勇ましく吠える犬
反対の手を一人だけ挙げている
はつきりと私がしたという気持ち
靖国神社勇士の中に兄二人
いい人いい恋そつと打ち明ける
佳
妊つて未婚の母になる勇氣
背なの子に勇氣をもらう母子家庭
巣立つ日へ勇氣を出せと親つばめ
傷心へ勇氣をつける言葉撰る
子に賭ける母の勇氣の平手打ち
人
出しすぎた勇氣で不味い朝の飯
地
幕下りて勇氣がうまい水を飲み
天
勇ましく新婚旅行に行く二人
軸
もつむぎになれない勇氣うずきだす

サワ子
テルミ
路児
義美
隆二
輝月
みつる
大柏
どんたく
重明
宵明
弘朗
素身郎
与呂志
寿美
春枝
テル
ひで
文平
雄々
可住
七面山

糸

榎本吐来選

白黒の糸巻きだけですむ夫婦
この糸をたぐれば確かに亡父のうで
目に見えぬ糸をたぐつてむせぶ孤児
蜘蛛の糸設計通りに風に乗り
針箱で針と糸とがあくびする
好き嫌いやうて三々九度の糸
路地裏に糸染め分けて錦織る
くもの糸死角はちゃんと心得る
襲け糸とる日の母は泣き上戸
納豆の糸で親子が会話する
巣をかける理由は言わず蜘蛛の糸
企みは糸と針穴妥協せず
糸切歯こばれ少女に春がくる
糸巻きを手伝い老妻と暫し居る
墨糸に大工の誤差のない柱
勘忍袋補修に太目の糸を撰る
木綿糸兵で覚えた鉤づけ
糸切り歯遠い昔に役を終え
針と糸單身赴任へ念を押す
横糸に朱をませ老いの未練かな
中々に通らぬ糸に亡母が見え
宗教も混ざりいよいよもつれ糸

市郎
妻
大柏
米朝
節子
与呂志
清治
洛醉
枯梢
ゆう也
秋峰
正坊
軒太楼
古都路
里風
宵明
不くし
婦美子
喜代子
可住

釣糸が静かに無我の刻をくれ

糸切歯母性本能ちらと見せ

逆境を支える妻の糸ぐるま

入院に馴れて淋しい針と糸

初孫に夢がふくらむ糸玉

蜘蛛糸の虜となつてゐる自虐

あや取りが上手蜘蛛の巣壊せない

空想の糸はりつめた奴風

逆縁の姉のタンスのしつけ糸

糸屑の膝を払えば星月夜

糸切れて飛んでる風のをれし

ぶきつちよの針長糸を捌きかね

持つだけでちゃんと伝わる糸電話

結ぶ糸とける糸あり年重ね

喝采は知らない母のしつけ糸

住

切れそうで切れない糸に繋かれる

千人針の夢に怯える木綿糸

乱れない糸目を誇る寡婦の道

亭主関白糸ひく妻が後に居る

借金糸の糸口までの無駄話

人

男手の針に長目の糸がつき

地

糸切り歯確か女は自負捨てず

天

切れた糸まだ捨て切れず持つ未練

軸

出直しの心にふれた地味な糸

洗 う

矢野佳雲選

鍵っ子に洗い晒しの身嗜み

娘は二十歳父にまぶしい洗い髪森脇和子

老いの背を流して知った弾の跡

顔洗うだけにあれこれ要つて美女

ポケットに札入れたまま又洗い

皿洗う約束もした共稼ぎ

墓碑洗う八十を叱る声は父

犬洗う用事はいっばいあるけれど

指切りげんまん月が洗うたわだかまり

米洗う妻に苦勞がたとある

幾度も洗い直した好きな服

夜の蝶の足洗う夜の月が澄み

少女書く砂絵を波が来て洗う

石庭の砂を洗うて時雨ゆく

皿洗いしていることは故里へ伏せ

洗いものすませて女にかえる妻

家計簿の衝動買いを洗い出し

洗うこと多く心の傷を持つ

マスコミに洗い出された門構え

髪洗う表に鍵をかけ忘れ

洗い立ての浴衣のような女の子

晩酌と言う名で今日の修羅洗う

赴任してランドリーでの友が出来

夫婦茶碗洗う心は他人かも

健気にも風呂屋で下着を洗ってきた

絵具皿洗う程度の恋終る

ひよつとこおかめに洗いざらい聞く

お日様を見れば洗濯したくなる

帰省子と年に一度の墓洗う

墓洗うて亡父に聞きたい事がある

不思議な不思議な話を聞いて墓洗う

洗礼はせぬがマリアのファンです

洗脳を強いられるのは姑の方

洗っても洗っても灰色消えず

惨劇をコインランドリーで消す男

傷口を洗うて逢いに行く末練

住

武装解く姿で女髪洗う

己が罪洗う聖書が読み辛い

けつたいな一日だった髪洗う

大根を洗う値下がり聞きながら

地下足袋を洗つて遠い祭り笛

人

生きている序でのように顔洗う

地

中流のローソンの足が洗われぬ

天

欲望の靴を洗えば生臭い

軸

アイドルと握手した手が洗えない

★新年号特集★

川柳塔社同人総参加（一人一句）

「私の一句」

（今年中に発表されたもの）

●締切 十一月二十五日着便まで

年賀広告受付!!

また年賀広告をお願いする時季になりました。

★一口千円（2.3cm×7cm大）

「この社告のスペースが三千円（3口）
「下の横一段は二千五百円です」

★原稿締切・11月25日必着

★送り先

〒581 八尾市中田二丁目二番二高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

このスペースは2,500円

昭和60年度大阪文化祭

第37回 川柳大会

日時 昭和60年11月16日（土）11時開場

会場 大阪中央公会堂中集会室

地下鉄・京阪「淀屋橋」下車

講演 「口伝えの文芸」 坪内稔典

宿題 「時事雑詠」 広瀬 反省選

「紙」 北川アキラ選

「反射」 永田 帆船選

「ひらく」 鍋島 十歩選

「雲」 梶川雄次郎選

「灯」 西尾 杲選

席題 当日2題

各題2句・締切1時

出句は出席者に限ります。

賞 秀句に大阪府知事・市長・府市教育

委員長から「川柳賞」贈呈

会費 五百円（作品集代を含む）

主催 大 大阪府

大 大阪市

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

柳界展望

集録・板尾岳人

制 申込み川柳天守閣久保田以兆宛
★岡山県芸術祭参加
ますかつと五百号川柳大会
日・60年12月1日(日)
所・岡山市中央公民館5F
題と選者

希望の方は70円切手5枚)
締切り11月30日・発表61年
新春の予定
綾句先・〒711倉敷市児島下
の町10-8-14 宮本海人
★川柳公論創刊10周年記念
企画の多角的編集による特
集号として全国知名作家の
交歓名刺広告による協賛一
口千円、二口以上は特集号
を贈呈
送金先〒144東京都北区栄
町三八-12「川柳公論」
▽お便り及び同人消息△
■大会終了からもう48時間
それなのにまだ心は大坂、
体は微熱でゆらゆら、いつ
までも語り草となるような
素晴らしい大会。川柳塔にい
る有難さ。

(八木 千代)
■9月29日大変盛大でおめ
でと。不思議な縁であんな
晴れ舞台でひとさし舞い
を、又唄を約束を果たせて
うれしい思いでした。ほん
まによかった、おおきに、
おおきに。

(都倉 求芽)
■落合正江(同人) 9月16
■大八先生の随行で青森へ
その帰り中尊寺、松島へ。
泰子・美緒・正坊・薫風
■雨吸いて吾妻小富士の淨
い肌

新同人紹介

城 角 鶏 生
——紫香・正明・明明佳薦

曾 我 部 佳 風
——

小 沢 幸 泉

中 内 朱 坊
——(以上三名)松風・三吉・菊野・薫風推薦

田 中 叶
——大八・薫風・甲吉・五楽庵推薦

★橿原市文化協会川柳大会
日・60年11月17日(日)13時
所・橿原市公民館
題||近詠(杉森節子・土田
欣之)姿(吉田味差子・古
川一高)本堂(加茂すみれ
・片岡つとむ)各題2句、
会費五百円
★第20回川柳天守閣・豊岡
川柳天守閣・瀬戸川柳おと
ひめ共催のカニすき句会
日・60年11月24日(日)
所・豊岡市瀬戸日和山温泉
「乙姫荘」会費千円
題・虎/(寅)・光陰・意
外・忙しい・彗星・ユート
ピア・羨む・時事雑詠
第二部懇親宴||6時30分
会費一万二千元(一泊)翌
朝川下り(千五百円)予約

★丹波文化団体連絡協議会
総合発表交流展賛助川柳大
会、日時は未定
自由吟3句・兼題||文・流
れ・各3句。投句は10月31
日締切り、投句料60円切手
5枚
送り先||兵庫県水上郡柏原
町柏原五〇〇——丹波
文化会館内丹波川柳協会
★第3回 供養川柳募集
課題
「父」 田中好啓選
「母」 小野克枝選
「子」 土居哲秋選
投句料不要(但し発表誌)

(名田まさよし)

昭和60年度

川柳塔社同人総会

60年10月6日

昭和60年度川柳塔社同人総会は10月6日(日)メンズファッションセンターで午後二時から開催。9月29日の記念大会のあと入院中の西尾葉主幹の経過報告をかねて薫風編集長が挨拶を述べた後、議長に黒川紫香氏を選び、議事に移った。

○事業経過報告(櫻谷寿馬)

《事業》

59年10月・同人総会(7日・なにわ会館)

11月・路郎賞選考委員に薫風、水客、紫香、太茂津、柳宏子の五氏、川柳

塔賞選考委員に鬼遊、史好、天笑、岳人、智子の五氏が就任

60年1月・本社句会場がメンズファッション

センターに変更

〃・15日新春おめでとつ会(大成閣)

4月・「初歩教室」の担当、本田恵二郎

から阿萬萬的に交代

〃・川柳塔改題二十周年行事として郡

上八幡旅行(翠柳吟社10周年記念

川柳大会へ参加)

6月・第9回全日本川柳大会(奈良市)

に参加(小出智子「部屋」の選)

8月・NHKテレビ川柳天国に参加

9月・西尾葉喜寿金婚・句碑建立5周年

記念川柳大会を新阪急ホテルで開

催。全国各地より四百四十名参加

《受賞》

藤井 明朗 藍綬褒賞

高橋 操子 大阪府文化功労賞

林 はつ絵 兵庫県民川柳大会議長賞

西村かすみ 阪神文芸祭兵庫県知事賞

奥山美智子 〃 川西市長賞

《句集発刊》

須崎豆秋川柳句集「ふるさと」復刻版

川柳塔七百号記念として9月刊行

「川柳にみる大阪」(藤沢恒夫・橘高薫風共

著・60年7月)

若柳潮花遺句集(59年11月)

「白い皿」竹内寿美子(60年2月)

「縞かすり」岩田美代(60年4月)

《句碑建立》

故小西無鬼⁷幼稚園の列とかえった日の和み⁸

(兵庫縣篠山町・王地山観音境内)

《新同人》

北田綾子(寢屋川市) 星野侑正(島根県) 竹

内花代子(高槻市) 落合正江(出雲市) 前川

千賀子(近江八幡市) 二宗吟平(岡山県) 板

東倫子(大阪市) 松本ただし(大阪市) 町田

達子(大阪市) 北山悟郎(大阪市) 朝山千世

子(西宮市) 山片紀雄(西宮市) 寺田裕美(和

歌山県) 神平狂虎(和歌山県) 後藤正子(和

歌山県) 福井桂香(和歌山県) 山川克子(和

歌山県) 柿花紀美女(堺市) 丸山よし津(宝

塚市) 岸野あやめ(寢屋川市) 塩田新一郎(大

阪市) 大屋秋峰(島根県) 奥田満女(豊中市)

岸本豊平次(大和高田市) 大塚節子(大阪市)

浅野房子(高石市) 人見翠記(姫路市) 坪田

紅葉(箕面市) 平松かすみ(寢屋川市) 上原

逸(高槻市) 松尾柳右子(大阪市) 二宮山久

(枚方市) 広井すえお(泉大津市) 園田文子

(吹田市)

○会計報告(高杉鬼遊)

前年度に比べ60年度はかなりきびしい状況

にあることが報告された。

○役員改選

新しく参事3名、常任理事9名、理事25名

を選任(別掲参照)

○同人規約改正

(11) 同人及び誌友に「賛助会員」を追加。(7)
賛助会員は他社の同人にして川柳塔社への参加を希望し常任理事会で認められた者をいい
同人と同額の会費を納めるものとする。

新役員紹介

参事

常任理事

理事

唐津市 田口 虹汀
奈良県 上田 翠光
弘前市 波多野五楽庵
高槻市 辻 白溪子
京都市 松川 杜的
寝屋川市 里 小路
堺市 藤井 二三
大阪市 清水 健司
八尾市 内海 幸生
岸和田市 宮園 射月芳
豊中市 田中 正坊
尼崎市 春城 武庫坊
平田市 久家 代仕男
松江市 柳楽 鶴丸
松江市 小林 孤呂二
倉吉市 渡辺 独歩
倉吉市 渡辺 苦句

《同人総会出席者》 文秋・水客・萬的・白溪
子・雀踊子・形水・重人・薫風・紫香・武庫
坊・年代・寿馬・弘生・与呂志・柳宏子・鬼
遊・史好・吸江・凡九郎・一二三・智子・三
十四・正坊・敏・太茂津・笛生

呉市 林野 魁光
鳥取市 森田 熊生
守口市 野呂 右近
豊中市 安藤 寿美子
豊中市 上田 登志実
高槻市 上原 逸
堺市 河内 月子
寝屋川市 高田 博泉
寝屋川市 藤村 亜成
寝屋川市 山本 三郎
寝屋川市 岡本 天平
河内長野市 井上 喜醉
八尾市 山下 みつる
藤井寺市 中原 比呂志
岸和田市 高須賀 金太
宝塚市 吉田 笑女
大阪市 山根 いづを
唐津市 浜本 義美
唐津市 久保 正敏
唐津市 仁部 四郎

川柳塔社常任理事会 (10月1日)

出席者 紫香・薫風・形水・太茂津・凡九郎
萬的・鬼遊・文秋・天笑・岳人・寿馬・笛生
智子・史好

《議事並に報告事項》

▽9月29日のお祝の会あと入院された某主
幹の経過報告を柳宏子氏より聞く。大事をと
つての入院で、一カ月の予定で静養される。
▽同人総会に提案する役員改選、同人規約改
正案を了承。

▽城角鶏生、田中叶両氏の同人推薦了承。

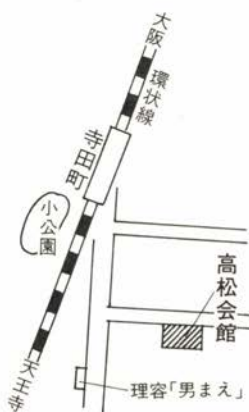
■11月の常任理事会は1日(金)

★11月から常任理事会の会場が変わります

新会場 高松会館 別館

国鉄環状線「寺田町」南口(天王寺寄
り)下車南一丁

電話 06(714)0927



60年度二賞表彰本社十月句会

十月六日(日) メンズフアツションセンター

(記録) 射月芳・健司・山久

9月29日の栗主幹喜寿金婚・句碑建立5周年記念川柳大会興奮なお残る中、二賞表彰のおめでたい句会を迎えた。残念なことに大会後、栗主幹は入院され、晴れの席にお姿を見ることができない。柳宏子氏から、その間の経緯が報告されたが、大事をとっての措置とのこと、本号が出る頃はお元氣になっておられることだろう。

黒川紫香氏がピンチヒッターで記念大会の裏ばなしをされた。今回の大成功は、紫香氏を先頭に沢山の同人、誌友の皆さんの縁の下の働きがあったのことに改めて感銘した。

次いで二賞表彰に移り、薫風編集長から受賞者に楯と賞状を渡された。

呼名賞は正本水客、小出智子、志水浩一郎の三氏。

今月の月間賞は萩田千代三氏が獲得。

(進行) 天笑) (受付) 年代・冬葉) (S)

出席者・健司・蕉露・重人・凡九郎・悦郎

文秋・弘生・萬的・三十四・一二三・与呂志
武庫坊・年代・紀雄・智子・久子・冬葉・敏
寿美子・柳宏子・水客・太茂津・紫香・隆二
白溪子・かすみ・春子・静子・達子・智恵子
好啓・千里・節子・勝美・いわゑ・雀踊子・
三男・はつ絵・正坊・笛生・みつ子・吸江・
寿馬・薫風・史好・喜風・英子・一郎・照子
笑女・吐来・月子・勝晴・鬼遊・洋敏・道子
英壬子・満津子・春蘭・天笑・郁榮・美智子
章久・千梢・赤木和子・寿子・楓楽・柳影・
寿美・頂留子・ただし・美代子・射月芳・規
不風・右近・山久・形水・狸村・外吉・柳伸
岳人・千代三・浩一郎・美房

席題「ずれる」 志水浩一郎選

善人ののんきめがねがすぐずれる 重人

屋根瓦ずれて先祖の唄が洩れ
性格の違いがずれている
躓いてずれた視点が見えてくる
ずれてる眼だから見えてるかも知れん

野仏の首がずれてる峠道

玄関のあかりへ仮面ずれて来る

お見合いの汗にアデランスがずれる

気短の金槌いつもずれている

アリバイのわずかなずれに鍵がある

人の好み男話が増してくる

伴奏を気にしていない黒田節

言葉をつらして罫を掛けてある

絶妙のジョーク拍手がずれている

ずれたまま銀婚式へ辿りつく

満願へお百度石がずれている

親と子の世代のずれが出るビジョン

好きな好きな父の思想にずれがある

軌道修正もつゝ両親の手におえず

ずれかけた頭で乱歩読み耽る

包丁の音が心とずれてる日

天皇のスボンが少しずれている

神棚がずれても一心に拝む

軌道ずらせば宇宙衛星武器となる

石橋をたたいて少しずれている

ずれてる女が騙し船を折る

職人の気骨世間にずれて生き

女とのずれは解かない方がよい

思惑がはずれて視点ずれてくる

視野少しずらすとおもしろいが見え

武庫坊 満津子 美智子 凡九郎 健司 外吉 外吉 文秋 紫香 正坊 雀踊子 天笑 月子 健司 三男 雀踊子 一二三 太茂津 水客 寿馬 規不風 萬の 節子 悦郎 萬の 年代 智恵子 重人



前列左から史好、薫風、紫香、和子。後列佐静子、佑みつ子

何もかもずれているのに別れない 赤木和子
 ずれるだけずれて閻魔の前へ来る 好啓
 中樞をずれて枯れ野があるばかり 美智子
 コンベアーからエリートがずれおちる 郁栄
 少しぐらいずれても亀はあわてない はつ絵
 もう一人の自分といつもずれている 節子
 ずれている瓦家風に重く耐え 浩一郎

席題「輪」

田中好啓選

煙草の輪今日良いことがありそうな 一三
 輪の外へ出たい出たいと言う女 隆二

輪の中にいるから鬼さん安堵する
 知恵の輪をくぐると胸に風が吹く
 井戸端の輪は丸いとは限らない
 人を恋う輪の中にいて媚を売る
 輪になってみないいい人だと思っ
 火の輪くぐり上手な人妻との出逢い
 美しい指輪に内助強いられる
 素晴らしい輪のなかにいる宴かな
 ファッションが入り女の輪が切れる
 山賊の輪も楽しかり月の宴
 父はもう怒っていない煙草の輪
 輪を抜けた鬼が一匹泣いている
 輪のとげを敏感に知るいいめっ子
 知恵の輪を抜けたたんびに狭くなる
 だんだんと妻の耳輪が派手になる
 熟年の箍をゆっくり締め直す
 輪をつなぐ男の地声あたたかし
 燃える輪をくぐって獅子はもの言わず
 あこがれの人へ輪投げが遠くなる
 輪の中でどنگり達が声高に
 邪魔な輪を捨てても逢える滝の水
 邪魔の輪が誰も帰らうとは言わぬ
 知恵の輪がなんのてらもなく解ける
 輪をつくる人の心は一つかな
 喝采の輪から離れた父と母
 輪がひとつ解けてまあるい月になる
 人の輪は花の輪よりもあたたかし
 厄払う芽の輪くぐった日の安堵
 一輪の野菊に室が魅り

柳宏子
 年代
 寿馬
 太茂津
 薫風
 雀踊子
 弘生
 年代
 寿馬
 鬼遊
 笑女
 智恵子
 寿馬
 はつ絵
 久子
 みつ子
 天笑
 照吉
 外吉
 射月芳
 岳人
 浩一郎
 美智子
 凡九郎
 武庫坊
 紫香
 薫風
 柳宏子
 吸江

月の輪を亡母と眺めた草うた
 輪の外にいる友達が欲しいなる
 雨の輪を見つめてばかりいた別れ
 鼻輪までつける従順さは無い
 開店の花輪に星のしずくする
 茅の輪ありおんなは狂うべく狂う

兼題「例」

塩満

敏選

例のない遺書永久に豆秋さん
 此処ではまずい例の店で待っている
 反比例老いても妻は重くいる
 ココホレの例があるからボチを飼う
 例えはの話平家の負けいくさ
 例によって裏口からは入りよい
 性教育花の例では領かず
 悪い例にいつもされてるキリギリス
 勤勉の例は薪を背負わされ
 お隣の主人をいつも例にされ
 原爆忌日本に悲しい例がある
 広島を例に反核動きだす
 例外の生存はなない核の冬
 前例がないので多数決で切る
 いま例に出されたばかりの大ちゃんば
 例外のオウムでちつとも喋らない
 塞翁が馬というのもありましよう
 前例を破る勇気がありますか
 例の場所例の話で判る仲
 例えはの話に核のおそろしさ
 悪例を残して夏の雲がゆく

照子
 水客
 いわゑ
 弘生
 勝晴
 好啓
 規不風
 軒太楼
 秋峰
 耕花
 好啓
 千里
 満津子
 智子
 英子
 射月芳
 重人
 笛生
 正坊
 浩郎
 天笑
 寿美
 赤木和子
 いわゑ
 満津子
 笛生
 水客

例外があつて浮世がおもしろい
 前例がなけりや作るといふ強氣
 例の品は例の店へ買いに行く
 例外もなく柿の木に柿がなる
 例外を認めるぬくい判を押す
 例えばの話で女謎をかけ
 經理課のかみそり例外みとめない
 前例が無いとハンコが逃げまわる
 例のごとく紀の国屋前で待ち合わせ
 たとえばの話に牛も発情期
 ロボットを例に挙げられては困る
 例え話が好きてイソップ離さない
 先例がないから石を投げてみる
 逢いに行く例えはそこが地獄でも赤木和
 例に引くウサギとカメも死語になる 敏

兼題「指定」 阿萬萬的選

住心地良い底辺の指定席
 七光りどつかと座る指定席
 指定席二人は他人の顔で居る
 後継の指定に毛並がものを言い
 指定席ふたり揃うと静かなり
 文部省指定映画でひる寝する
 指定席静かに喪服の女がくる
 指定した場所には異が仕掛けられ
 指定席姑と並んで暮があき
 義母からの指定で雨を行く和服
 ふる里へ家族で帰る指定席
 旅馴れぬ顔グリーン車でかしこまり

照子 文秋 健司 みつ子 滋雀 萬的 英千子 紀雄 智慧子 柳伸 美智子 一二三 建司 子

曼珠沙華今年も咲いた指定席
 大文字見えてた頃の指定席
 返盆のない隅にある指定席
 口下手が無言を通した指定席
 指定席隣はイモを食べていた
 指定席の釣場へ竿と夜明け待つ
 指定席義理を埋めている代理
 指定席少うしギザに脚を組む
 指定した数値にならぬ万歩計
 六帖一間に木魚の指定席がある
 平服と指定会費の披露宴
 環境行政指定を嫌う処増え
 偏差値が僕の未来を指定する
 指定券二枚噂のなかを発つ
 指をポキポキおちつかぬ指定席
 茶の間にも自然に出来る指定席
 指定席自主性のない男くる
 重文の指定を嫌う三代目
 指定席ここから先は遠慮せず
 伴奏はなんでもいよいよ枯れすすき
 指定席こたつと湯呑と鳩時計
 量産はせぬ宮内庁ご用達
 指定した鉄が植木屋に届く
 窓際に母を座らす指定席
 指定時刻に遅れた方がリードする
 指定席姉の噂がよく聞こえ
 喜びの酒は銘柄指定せず
 赤信号音導犬の指定距離
 秋を撮るカメラへ指定の場所がある

英子 柳伸 吸江 白溪子 冬葉 一二三 雀踊子 好啓 太茂津 天笑 楓楽 三男 赤和子 浩一郎 美智子 右近 水客 天笑 英子 正坊 道子 外吉 好啓 笛生 吐来 岳人 みつ子 規不風 萬的

第9回

寢屋川市民川柳大会

日時 11月17日(日) 一時開場

会場 寢屋川市立東北コミュニティ センター

京阪香里園駅下車③乗場よりバスに
 て成田不動尊前(幼稚園前)下車すぐ

柳話 西田柳宏子氏

兼題 夕刊 里 小路選

タイミンク 河内 天笑選

懐かしい 住田英比古選

灯 高杉 鬼遊選

皿 片岡 湖風選

入口 河合 鼓城選

雲 橘高 薰風選

席題なし

各題二句・締切2時

欠席投句拝辞

会費 一、〇〇〇円(記念品・入選句集 呈)

主催 寢屋川市川柳協会

後援 寢屋川市文化連盟

兼題「種」

高杉鬼遊選

昔むかしこんな嘶の柿の種
 蒔かぬ種時々生えるから困る
 同じ種なのに隣はよく育ち
 枇杷の種誰が捨てたか育ち出し
 たんばが噂の種をまき散らす
 種の無い西瓜のタネを探してる
 すぐ種をほじくるくせのあるカラス
 種のない葡萄が好きなたち
 バイオエタノロジー種無し人間作れるか
 この頃は撒かぬ種まで生えてくる
 種なしのブドウが好きなたち
 路地裏の情で育つこぼれ種
 たこ焼の匂い話の種にする
 戦争を語り平和の種を蒔く
 終章に花咲く種を蒔いておく
 一粒の種に期待の水をやり
 種付料何と羨しい値段
 採める種また蒔いている市場籠
 王様が種なし西瓜を不思議がり
 瓜二つ親に似た子を叱ってる
 添寝して祖母の童話も種が切れ
 艶話種明しする七回忌
 芽の出ない種をいくつも持って秋
 消えやらぬ火種を風に覗かれる
 苦の種も他人から見れば倅せな
 まだ燃える火種が残る風の盆
 種蒔いて母の日課が一つふえ

滋雀 妻子 軒太楼 いわゑ 紀雄 健司 月子 はつ絵 照子 山久 かすみ 狸村 正坊 赤木和子 紫香 柳宏子 一二三 雀踊子 紀雄 静子 かすみ みつ子 吐来 千里 隆二 史好

気落ちした心を晴らす花の種
 風はいたすら噂の種をまきちらす
 ひと雨に春を忘れぬこぼれ種
 蟹の子は柿の種に騙されぬ
 種なし西瓜神の怒りが何時か来る
 また別の男と種を蒔いている
 意地悪がとてもしない柿の種
 悩みの種笑われそうで口にせず
 種本を知っているから黙っとく
 種の無いブドウがすこしもの足りぬ
 種あかしすればなんでもない二人
 人間の種も袋に入れてある
 柿の種より私も握り飯を取る
 義理チョコが噂の種になりますか

兼題「ゴール」

橋高薫風選

授賞式ある日一つのゴールイン
 ゴールまで一つの命大切に
 ゴールなど頓着はせぬ亀の足
 人生のゴールにマジック点滅す
 万才を次のゴールへおいておく
 定年のゴールを飾る色を選ぶ
 人生の最後のゴール遺書を書く
 走ってるその中ゴール見えて来る
 見えてから遠いゴールに疲れ切る
 ゴールインしたらあちこち痛みだし
 ゴール近し保険はとくに切れている
 スタートからゴールがわかる負け戦
 二番手につけてゴールを待つ余裕

美智子 寿子 笛生 好啓 弘生 浩一郎 智子 白溪子 水客 健司 柳伸 耕花 一二三 鬼遊 弘生 智子 幸一 どんたく 滋雀 三十四 右近 蕉露 柳宏子 重人 吸江 三男 吐来

帽子振り振り余裕のゴールイン
 ゴールからもう一周をする余裕
 毎日がゴール次へのスタートさ
 この俺に俺のゴールをはばからず
 ゴールキーパーを自認している孤独
 ゴールイン柿も蜜柑も熟れている
 少年のゴールはいつも花盛り
 人生のゴールにテープ張ってない
 あきらめたゴールに旗がなびいてる
 一着はゴールへ着くと囲まれる
 ゴールには借金取りが待っている
 ゴールから先は仏に任せよう
 ゴールから手まわきしてるのは彼女
 秋の虫ゴールが迫る一心さ
 ゴールでのフォームぐらいいは美しく
 二人三脚のゴールで妻と倒れよう
 二人三脚ゴール切ったら別れよう
 人生のゴールに情けひたひたと
 もひとつの視野が拓けてきたゴール
 鬼たちのひしめく中へゴールイン
 呼び止めてもらってゴールだと気付く
 ゴールから逆回転のビデオ見る
 ゴールインの顔を気にして女です
 ゴールした自分ひとりの無人駅
 水がめあふれるようにゴールイン
 ゴールイン選手が選手らしくいる
 人生のゴールに石が置いてある
 山頂はゴールではなし引き返さず

形水 白溪子 凡九郎 勝美 水客 智子 岳人 射月芳 美智子 綾珠 敏 耕花 妻子 晴彦 はつ絵 好啓 はつ絵 年代 重人 天笑 赤木和子 蕉露 萬郎 悦郎 水客 久子 千代三 薫風

(清記・智子)



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

卯の花句会

辻 白溪子報

すきとおる海を知らない養殖魚
海の音聞いて胎児は夢をみる
水平線炎える夕日に明日をみる
女も河も海を目指した旅である
水兵さんに淡き想いを寄せた過去
人工浜ちよびり海が顔を出し
島抜けてまた島がある瀬戸の海
金槌も海の広さが好きで来る
万灯ろう水平線まで想いのせ
寝たきりの窓に海が青過ぎる
替女の杖海に倒れて濡れている
海鳴りに龍神様は無策なり
夕立が残してくれた虹の橋
夕立に逃げた横町の喫茶店
夕立に子犬もいっしょに雨宿り
どしゃ降りに見付けた旨い喫茶店
夕立が邪念を断てと言うように
怒ったような夕立雷連れてくる
夕立の中で誰かが呼んだ声
祇園から夕立が来る加茂の床
広重は傘をななめにして走り

志津 静江 信子 栄子 紫香 越子 さと美 杜的 作二郎 伊三郎 メ女 多賀子 高子 佐代子 眉水 敏正 鼓城 梅風

夕立が流してくれたわだかまり
夕立へ背のびしている苔の庭
夕立のはげしき茶室静かなり
母子寮に線香花火と笑い声
送り灯の中に父子で来た花火
鍵っ子に隣の花火うらやまし
忘却の中に花火の小さい音
留守番が寝て聞いている遠花火
手花火が浴衣の裾を気にしている
線香花火は澄んだ瞳を知っている
思い出のひとと花火の消え
夏空を闇に戻して花火の消え
腰掛をさげて花火のみえる位置
束の間の線香花火への吐息
手花火に小さなひざが寄ってくる
クレヨンで描いた花火が歪んでる
今ごろは後悔してる遠花火
ひよっとこの顔も芸です阿波踊り
生きて行く義務が僕にもあるらしい
戦前と違うラムネの味ゲップ
判持って走れば預かり物ばかり
千羽鶴明い夢をもってくる
まだ二軒中元こぬまま盆が過ぎ
婦人会うっかり灰皿用意せず
指切りの好きな少女に嘘はない
茶柱が立って姑との息が合う
従順な犬を愛する余生の日
だんまりの鈴だけ心炎え立たす
お守りの鈴が遺品の中で鳴る
川柳ねやがわ 高田 博泉報

明代 百合子 水客 井寒 花代子 八重野 和江 種子 求芽 純子 如洲 陽露子 満喜 松川芳子 スミ子 白溪子 恵美子 里子 凡九郎 武庫坊 如芳子 春風 よ志子 春蘭 房子 年代 鏡太郎 壮之助

料理下手せめてお皿で味を出し
迷信は謎につつまれたままに生き
名人も外せば転ぶ妻の棒
一言が多い女の自己主張
名人の気難しさは許される
名人の失敗作にある人氣
千年も我慢している天の邪鬼
多すぎる一言押え炙すえる
お料理の嫌いな妻と五十年
名人も人間ですと欠伸する
名人は太田胃散の愛用者
一言が過ぎて空しい窓明り
朝顔がやつと咲く今朝の明るさ
扇風機役者の如く首を振る
共稼ぎスピード料理がうまくなり
工事場の音おさまってお茶にする
テレビ料理になかった焦目ついている
包装のよいのを選ぶお中元
謎解けて月の兎が泣きました
仲裁の名人父の背広い
花が咲きもつこだわらぬ過去の謎
独り寝の私へ子猫来て添寝
花が咲きもつこだわらぬ過去の謎
言い訳は名人芸という遅刻
迷惑な話善人ももってくる
かあさんの料理で育つ長い脚
焼魚冷えて固まる倦怠期
タクシースの愛想よいのに面喰い
梅雨空をとばす明るい朝蒸着
湯豆腐が料理と言ええるのか喝
謎秘めて女五十の滑走路
倅せは料理の上手い嫁が来る

定子 まさの 松庄 静江 弘生 求芽 勝美 一菁 創吾 新泉 速水 とし 菜月 藍子 春子 君子 まさお かすみ 一笑 あいき シマ子 章 山久 晴風 あやめ 光子 頂留子 青波 明代

川柳わかやま

堀端

三男報

隔たりを肌の温みが引き寄せる
肌合う男で夜がすぐ明ける
人知れず肌合はしる嫁姑
憧れていた程でなし月の肌
少年と石垣の肌濡らし合う
愛ひとつ無くして肌が衰える
見栄捨てたくらしに風がよく通り
見栄坊にみえてそろばん冴えてます
深く捨てた見栄なり風を斬る
見栄はつて女きれいになつてゆく
見栄張つて購うた時計が狂いだす
先生と言われ見栄が吹き出した
裸のつき合い出来る長屋の温い風
最後まで見栄張っている鬼瓦
あけ底の見栄が哀しい嘘を付く
子が拾う骨だ磨きをかけておく
どん底でせめてきれいな詩を拾う
幸運を拾つて先が怖くなり
拾った運便える腕がおまへんネ
かくし絵の中から拾う父の愛
一ト粒も見捨てられない作る汗
拾い読みの知恵で世間を甘く見る
道草で拾った知恵をポケットに
戦火から拾った命はや六十路
いっぽんの手綱に賭けるとき男
詰るとこの世は賭と知りました
つかんでも賭がきかないだまし舟
その愛に賭けて心を見失う
賭けごとが好きでうす汚ない男
猿を追う男に賭けた紅の濃さ

光代 緑良 千寿子 桂香 道夫 輝子 稚代 公子 公津 登志代 芳朗 きみ 柳宏子 武庫坊 正子 静生 節子 勇郎 凡九郎 信秋 武雄 萬的 克子 雅子 幸 凡太 紀美女 栄美子 天彦 康勝

一進一退夫婦の賭はまだ続く
味一筋賭けたのれんにある重み
一生を賭けたあなたが先に近く
石を積む最後の賭の日の為に
たそがれの賭けは命がかかっている
賭け事が好きか嫌いか賭けている
川柳塔唐津支部 久保 正敏報
休日のマドロス陸で情眼する
玄海の怒濤が穿つ七ツ釜
児の夢は小豆枕で育まれ
水の中心一輪の花涼を呼ぶ
母の声テープで流す孟蘭盆会
大風呂敷広げる人を哀しい瞳
炎熱を独り占めした朱のキャンナ
定年が先ず長兄へ襲い来る
かみあらいシヤンプのしるがめにしみる
剽軽族国を憂うる語気がない
川柳大阪 井上 喜醉報
博物館に寄附するほどない宝
出来過ぎた嫁が我が家の宝です
宝船働け働け乗るつもり
健康という宝物持っている
戦争で私の宝なくすまい
通動に近い人程遅刻する
近くまで来た如初孫抱きにくる
卒業が近づき化粧を先ず覚え
古傷が痛む港の灯が近い
近道はない人生マイペース
ただならぬ仲近づける顔と顔
気まぐれな学者午後から御出勤
学者から見れば曲っている政治

英子 正博 照子 狂虎 年代 三男 高敏報 高明 朴竜 虹汀 久き 久仁 義美 四郎 義美 六歳かおり 正敏 弘生 天平 洛醉 金太 柳弘 敏 醉舟 柳弘 重人 虎醉吟 本蔭棒 希久志 比呂志

皇帝も学者の知恵をちよいと借り
我が家にも学者のクマゴ二人いる
肩の荷をおろしてくれよ学者の子
偏屈な学者孤独な顔でいる
グループに学者も無学もいて楽し
金儲け下手な学者で石拾い
サツ束が学者の頭ボケさせる
川柳泉尾 吉川 寿美報
地蔵盆幼なじみの顔をろう
働いてないと崩れる父の独楽
おない年学童疎開の体験者
足の指やばり親子似ています
亡父の声聞こえてならぬ蟬時雨
姑の理解平和が続いてる
花咲かぬ朝顔無情に抜き取られ
川と空浪速の祭囃しめる
高原の夏は只今花の恋
物よりも友は心の糧をくれ
老いの旅今日一日の友が出来
優勝の花火夜空を染めている
どよめきが闇にひろがる揚花火
瞬間に命をかけて火花散る
大根足お蔭で良い児生みました
いい足跡残しておきたい長い道
水溜り除け損なつたどじな足
友達が何時も一足先を行く
川柳藤井寺 赤木 和子報
この暑さ末っ子だからの荷を飾り
有つていまだ無くして淋しい盆の客
新しいうまで帰らぬ人の下駄
海に生き海に死んでる丘の墓

もとい 一介 一步 与呂志 雅集 喜醉 鉄心 三世 昭子 恭子 葉子 弘子 満子 伴子 シメ子 道子 白水 文子 トミ子 シマ子 淑子 多和子 美代子 寿美 和子報 与呂志 伴子 吸江

冷凍魚静かに海の夢を見る
石一つ沈めて水は濁さない
突然の客へ裸が大慌て

下駄箱にたった一足柱の下駄
実直に生きた証の太い指

山の子の感激海に陽が沈む
沈香を焚けば匂う流転輪廻

手のこんだ嘘を並べて金を借り
民謡を唄う時だけ腰が伸び

夏草とどれかが茄子やら胡瓜やら
うっ憤を投げて海は鷹揚に

ハワイまでわざわざ出かけ肌を焼
棚経のお布施は重し経輕し

一粒の種も河内の土に咲き
人間の中に砂あり夏の浜

海の国それでも泳ぎに行くハワイ
片想い片手枕に波の音

ほろ酔うてあなたが好きとやと言え
百日紅夫の忌巡る五十年

金波銀波サーファーの青春燃えたる
海底で黄金に輝く菊の紋

裁判もした球場でオールスター
海へ行き泳いだ顔で帰って来

静かなる古都古都税で揺れに揺れ
缶詰に二〇〇海里が詰めてある

なろうことならあなたの海に沈みまし
尼崎尾浜川柳会

食卓に育ち盛りの箸の音
悪いとこなくで退屈させる嫁

火祭の夜は男が美しい
逆転の火をつけたのは代打から

治子

美代子

志洋

三郎

昭子

本蔭棒

秋園

たかし

哲正

ふみ

繁男

美佐

祐二

末一

みのる

送り火を焚いて今年の夏も近く
煮詰まった話で牛を売りにゆく
秋風が吹いておでんが煮えてくる

駅弁の箸が少うし短かすぎ
美容院に昨日の顔を置いてくる

帰省して覚えて帰る盆踊り
大盛りを頼む女性の柳腰

男なら苦労して来い親の慈悲
内緒ごとと洩れて眼鏡を拭くばかり

里の嫁盆をすますと三日夜寝る
明け方の部屋にひとりの秋がある

にわとりが二三羽無人駅に居る
眼に浮ぶセンチザイを炊く遠い母

コトコトと時間をかけて煮る旨さ
西宮北口川柳会

奥田みつ子報

正直に歩いて月に褒められる
門を出て女は虹の絵を探す

負け犬が一声吠える門の外
建売りの門はいずれも似てまよい

山門をくぐるのと法の風に会う
通夜の門燈あかあかと悲し

裏門は猫の出入りにあけて置く
三十年かかった今日の仲の良さ

此処からは自然の風になる茶店
気が揃う仲間が居る雑魚の自負

病人の横でくるくる梨をむく
一匹のこおろぎ鳴いて秋を告げ

じやんけんで勝つて荷物持ってくれ
朝蜘蛛を殺してすこし悔いている

昌子

牧郎

良征

すみ

武庫坊

江美

寅之助

よしを

弘治

貞吉

牧郎

紫香

いわお

すえ

伊三郎

八起き目の門輕やかな朝の靴
山門で善男善女の列に入る
山門をくぐるのと銀杏落ちてくる

さわやかな言葉さをさがす別れ道
幸せは寝ころんで雲見るとき

人が逝くひとはけの雲置きざりに
月光に心の弱さ見すかさ

月まいり栗のいがにも秋の彩
月末も月のはじめも似たくらし

遠廻り月にさよならしたくない
残業を労るよに月が出る

森の樹のいのち湧く日は月やさし
お月さんの童話が月から消えてゆく

月光を背に浴び百度石をふむ

佳句地10選 (前月号から)

春城 武庫坊選

幸せをつかまえた素手だから
貧乏神にも育ててくれた恩がある

傘持った人も一緒に雨宿り
泣き上戸の女と知らず飲みにゆき

神様に祈る甘えがすこしある
退職した日から時計が狂い出す

ふるさとの低い家並みは愛だろ
まっすぐに走れば少し近すぎる

鼻持ちのならぬ自慢を鼻で聞く
美しい嘘に合い槌打った悔い

美しい嘘に合い槌打った悔い

散歩

米朝

柳影

園歩

杜的

年代

よし津

君子

てる

冬子

はつ絵

郁栄

照子

草風

滋雀

雨宿りこつそりのぞく門構え
 独り言言うには月夜の浜がよい
 待つことに慣れて哀しい月見草
 飲兵衛も詩人も集う月見宴
 月も見た私もみつめるホームラン
 月冴えて余生ゆたかな趣味に生き
 廃坑の空にひとときわ月冴える
 おねねへ月の砂漠が誘い込む
 さそり座の女見ている赤い月
 絵ガラスは男の夢を遊ばせる
 起承転結雲にもある悟り
 雲切れてかみなり一家も同居する
 門燈の影にいつても母が居る
 いたずらがかたまつて去る暑休あけ
 さわやかな空に悲劇は伏せておく
 門前の小僧習わぬ恋にもえ
 仏門を叩く哀しい愛の果て
 秋呼びに雀出たまま帰らない
 迷宮へ門外漢の知恵も借り
 道連れが欲しい孤独なハイヒール
 赤門へ近づきぬがねの度が進む
 山門の外も浄土の風が吹き
 美しく老いたし剃刀買いかえる
 一言を残して行きたい風もある
 こぜりあい繰り返しつづ夫婦坂
 敵七人まつてる門を今日も出る
 ほほなでる風にみつけた小さい秋
 孤児たちの会えずに帰る窓の月
 たのむの門をくぐつて美術館
 種のあるぶどうで話長くする
 大潮に秘めたる月の力知る

しげお 半歩 芳江 好江 暢子 千世子 美智子 美智子 和友 鼓城 凡九郎 勝紀 正一 紀雄 良征 文平 静江 弘生 百合子 千秀 まさお 右近 枯梢 靖子 山久 志津 墮駄 美津枝 歌子 貴代子

定年になつたら犬を飼つつもり
 金魚すくい膝つ小僧がとり囲み
 ふるりの切符買う日のない女
 偽善者の門に尻尾が吊つてある
 美しい川ほど古い詩がある
 わかあゆ川柳会 小砂 白丁報
 年よりは無理をせんこと大切だ
 世の中に誤算があつてまた楽し
 人生の誤算は他人を責められぬ
 カーテンの色で新婚さんと知れ
 息ひそめ夕顔何か想いつめ
 三人目誤算だつたにパソコン持ちぐされ
 銀河計画ああと三十年の誤算
 良く遊べよく学べとは無理なこと
 無理するな無理はするな無理をさせ
 この橋を無理して渡ることはない
 無理聞いて欲しいあの人もういない
 無理通す嫁をひらりとかわしとき
 無理するなわたしは昼寝しています
 無理のきくスポンジのような妻がいる
 背伸びして他人に見せたい旗を振る
 無理言うな徳之島ほど生きられぬ
 柳柳塔まつえ九月例会 恒松 町紅報
 海賊が先祖だったという家宝
 ヒットする先に海賊版で売れ
 瀬戸内の旅海賊はもう居ない
 海賊の財宝世界の眼が狙つ
 海賊の子孫だけの門構え
 水軍の名で海賊も功を立て
 海賊の末裔らしいという富豪

恵美子 求芽 水声 美幸 紫香 白丁報 敏明 ヒデ子 秀穂 侑正 笑子 惠美子 英子 美栄 智重子 民子 かつ子 鈴江 歳栄 世似 清泉 はるみ 白汀 町紅報 正朗 ちかし 寿美子 翠星 芳子 幸一 秀子

海賊の老舗は西の神土国
 海賊の本音鬼面を捨てたい気
 水軍も海賊となる瀬戸の浦
 ナツメロに我がエレジーを唄ばされ
 過去追つて唄ぶ女の性哀し
 稲光り忘却の人ふと唄ふ
 紫を着てむらさきの亡母唄ふ
 銅鐸に古代出雲の富唄ふ
 初恋を唄ぶ写真も褪せている
 風化した戦史を唄ぶ四十年
 笑つた日を唄んで積木くずして
 亡父唄び亡友の好みの花を切る
 父を唄ぶ爽竹桃の散る路に
 妻若き日を唄はせる娘の育ち
 現実には生きる思想がむずかしい
 羨まし思想どおり動く人
 各職場男女の思想平行線
 松陰の思想現代に生き続け
 姑と嫁思想が違つばかりに
 母逝きて父の思想も丸くなる
 次元の差ナウイ思想に疎まれる
 相容れぬ思想が同じ屋根に住む
 社会的立場で思想の違い
 新旧の思想でもめる県議会
 離婚して野良猫をひろつて来る
 血統書付きでシヤム猫嫁にゆき
 猫を抱く女婚姻はとうに過ぎ
 弱虫でやたら空缶蹴りたがる
 空缶を蹴る子へ暮れる通学路
 ハワイ川柳ウイロー社 市川 暁舟報
 国体の旅は未知の世界を楽しませ

具人 雄々 友樹 壮子 きみえ 愚童 貢範 芳枝 妻子 昭二 鳳人 代仕男 美治 美つこ 静江 玄艸 ノブ 由郎 多賀子 弁治郎 通児 長三 鶴丸 与根一 舞吉 孤呂二 町紅 香夢女

団体の決議に資本家匙を授け
団体旅行に数咲く恋の花
国政の与党国家の鍵を持ち
老夫婦団体で行く寺参り

団体は良いが役員氣に入らず
国体で拾った恋はシャボン玉

日本嫌がる団体凄いな
観光団美人ガイドに眼を細め

日本観光地元団体と共に行き
バスギョール客に負けずと歌い出し

反米の団体世界に数を増し
川柳しんぐう

川上

川上

どこまでもコント綴ってゆく夫婦
一呼吸おいてにやととするコント

商談へ軽いコントを用意する
思い当るフシありコント笑えない

国会でコント演じている平和
品質を落して詰める娘の荷物

品質保証ラベルは嘘を強いられる
品質をやたらとほめて買わぬ客

品質が違いますという値札
品質も問わずバーゲン花ざかり

化粧して待つ人があり夏祭り
濃くなった化粧暮しに触れずおく

尼寺の化粧知つてる京鏡
尾と鱈をつけた噂を化粧する

ライバルの化粧の濃さに負けていず
平和はけ巻の非行ふえて来る

軍艦マーチでパチンコしてる世は平和
選挙戦里の平和が危ぶまれ

米ソ間平和となえて核ふやし
正

恵美子

坪山

虹青

公女

蒼生

紅漢

陽子

一牛

張賀

秀山

曉舟

水報

緑良

三男

十郎

柳宏子

溪水

幸司

すみれ

大輪

利次

登志代

富子

喜醉

登紀夫

白光子

平和

華水

惠美子

正

それなりの暮しに平和かみしめる
川柳さやま

忍の字を抱いて嫁の座が捻り
一粒の捻りへ賭ける試験管

有り余る米容赦なくよく捻り
見続けた捻りの夢の虹が立つ

今年こそ捻りがほしい孫の嫁
一泣きをさせて泊めずに帰す母

思ひ出の部屋に泊りに過ぎて酔う
三泊の疲れ吾が家で脚伸ばし

外泊に浮気するなと五寸釘
もう一つ泊りと孫が膝へ来る

楽しかった余韻日傘にたたみ込む
炎える陽に日傘が誘うみどり徑

ひまわりが派手な日傘に向きを変え
大らかな笑顔でいたずら見守られ

いたずらの帰ったあとをさびしがり
共犯が居るかいたずら念が入り

川柳化粧槽
植村客遊子報

水割に女の嘘が溶けてゆく
欺されていても女の性一途

新築へ見栄張るピアノ持つてくる
冷蔵庫虎視眈々と子がねらい

二日降り続けば慈雨とも言わず
鯨尺母の佳き日が話しかけ

銭湯にひたつてしみじみ町の味
人生の図面が途中から狂い

年金で食えぬ稼ぎに勤めする
腹の兒へ薄着るなと便り来る

絵画展出会つた友の派手な柄
ピヤガーデン月も酔つて赤い顔

えつこ

米朝報

文平

可住

素水

法齊

久子

とみ子

貞子

素水

金之助

和子

千代子

ゆう也

越山

米朝

美智子

ひか平

大鷹

岳詩

実男

葉香

紅月

礎石

秋信

悲子

さとし

みつこ

サワ子

若き日をそつと仕舞とくタトウ紙
骨折の孫はベッドで良く太り

中流の暮しに満ちた朝の膳
紺浴衣シャキッと祭の客になる

一陣の涼風思わず足を止め
夏痩せを期待しましう熱帯夜

ラジオかけ老爺独りで納屋仕事
悪友が待つて幸福噛みしめる

Y・F・C川柳会
人見

俺に似ず俺に似ぬ子に扶けれ
梅雨長しストレスたまつた言葉尻

腰巾着可愛くもありうるさくも
出戻りの娘だんだん腰重し

長寿日本ゲートボールの腰さまる
余生とや隠しごとなどない二人

べからずの札から遠く柵を越え
二枚腰という横綱の勝名のり

川柳たけはら
森井

えにつきのことばはいっぱいかいていく
おにちゃんいつもえがおのおにちゃん

大のさんばおかあさんもひっぱられ
太陽に負けてはならぬ夏休み

焼き魚海で食べるとおいしいよ
つちの音だんだんお家が出来てくる

夏休み入ったとたんにこの暑さ
炎のように夕陽が沈む瀬戸の海

本当に欲しい時こそ無い時間
空気がコロコロ欠けているマナー

もう少し控えてほしい父の酒
新学期ちよつぱり気になる肌の色

はつ子

孝栄

みね子

まさ子

とし

輝月

永楽

客遊子

翠紀報

翠紀

紅葉

房子

泰州

よし津

たず子

忍

栗

蕭居報

五歳昌之

小三聡子

小三由博

小四方昭

小六鉄二郎

小六美保

小六亜貴子

中一早代

中二仁昭

中三恵子

高一紀

高真弓

蕭居

朝顔の彩の深きよ朝の雨
夏まつり風鈴ひとつ買ってくる
母と子のサマーキャンアの火は消えぬ
ローカル線人情深き風と会う
子は育つ妻の血圧あけながら
お葬式からお隣が物を言う
絆の深き醜さ温かさ
同じ酒飲んで酔える日酔えない日
ささやかな奢り出前で飲むビール
タンポポのわたげよ風よそと吹け
安らぎは病氣知らずの子の寝顔
母の手を画くで眠れる熱帯夜
老いの日におけいこで埋めるのは
辞表持ち歩いて恐いものがない
フツと息つけば総てがくずれそう
豊かさへ四角い西瓜売れている
八月の陽差し変わらぬ原爆忌
朝な夕水をほしかり鉢の数
過去は過去すっかり夢を抱いて寝よ
無理な事お世辞に負けて聞いてあげ
愚痴一つもらさぬ母の指の節
女にも期するものあり大ジョッキ
三文の得朝の間のうまい風
墓参り祖先も踏んだ細い道

川柳ひらい

行吉 照路報

鈍舟 比呂子 笑子 節夫 白狐 蘭幸 房子 こうじ 静水 政己 令子 鬼焼 淑路 一子 康子 博子 貞子 浄美 シゲヨ 浪小 静佳 千年枝 魚

ライバルがやり手のしっぱ切つてゆく
ひたすらに一方の仕事狂
やり手です一から十まで取りしきり
打ち手の札です華麗に咲きました
男には負けるものと眉あげ
夏祭り終わる金魚も疲れ果て
口八丁手八丁が鼻につき
いくつもの橋を渡った父の靴
独りの灯笑ひ袋が小さすぎる
夕暮れは独りが切ないピエロです
夫に鈴托して渡る丸木橋
栄転へ社交上手というやり手
いんだよ悪妻だつて俺のもの
悪才の意外な才に助けられ
やり手でも孫には負けてばかりいる
やり手ではないがやんわり座を纏め
悪妻をだしに今夜も呑み明かし
打水に白足袋少しかしこまり
枯れきった心へ愛の水を打つ
やり手など無縁の顔の聖母像
悪妻の内助の功が裏目に出
重い足だの視線に負けている
唯独り飲みたい時もあるやり手
猛犬に注意悪妻シャヤリ出る

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

孝子 柏峯 栄翁 美代志 トモ子 かずを 方巳 敏和 典子 愛子 千恵子 寿子 やすえ アヒル 美佐保 志寿子 ともゑ 博友 柳五郎 草風 真備雄 照路

主婦業とパートの暇に美谷院
モーニングサービス妻が掃省中
ちよと一杯ですまなかつた時間待ち
ピリオドが打てぬ二人は戻り橋
タイムサービスうっかり買った不用品
二次会のあと空白の時間帯
窓際の父に時間がつくられる
よる年波時の刻みが早すぎる
縛られる時間が今日の糧となり
一秒も戻らぬ今を大切に
時間給でも早退はままならぬ
蜻蛉んだ時間が丁度になりました
別れはなしの出来る時間を居酒屋で
有利に向くまでは時間を引き伸し

堺川柳会

河内 月子報

千代子 柳影 恒明 春蘭 美子 律子 湖風 慶三 勝美 弘生 章久 作二郎 文秋 天鳳 かりん あかり 半銭 東雲 小月 小雪 智子 草春 一二三 武庫坊 年代 金三郎 紀美女 外吉

出世の秘密が冬の海に浮く
 敬老へさからう父の竹刀ダコ
 笹舟を浮べた小さい頃の愛
 花びらが浮くときれいな池になる
 熟年の運動骨が鳴る思い
 そのコツを覚えるまでの浮き沈み
 まんまるい月を恨んで飢えて
 金魚掬いのうしろ姿はてなし子
 ジョギングの目的すこし口こもる
 薄い胸たいたたまでは良かったが
 昏のうすい女に言い負ける
 頼りない男をうしろに待たして
 飢えた目で見込みあるのがついてくる

駒つなぎ川柳会

里

小路報

浩一郎 柳伸 邦晴 紫香 真柳 柳宏子 素灯 作二郎 白兔 月子 妻子 克子 天笑 庸佑 曲ん手 勝美 柳右子 弘久 頂留子 凡子 東雲 春蘭 幸治 柳影 恒明 萬葉 規不風 雀踊子

突然と言う事にしてする話
 人生の迷路無策でとり抜け
 二人目が生れて三歳策士めく
 突然に画鋲が落ちる女の絵
 厚化粧落とすと涼しい風になる
 妻が近く俺の気力も持ってゆく
 無気力な奴見当らぬ蟻の列
 涼風の部屋で夢想を繰り返す
 突然の告白迷うコンバクト
 おっぱいの時間へ見舞客が来た
 突然の事故にも遺書を書く余裕
 無気力な女になって紅がない
 無為無策では築けない蟻の塔
 涼風を極楽と言うしサイズ
 無気力な男が掘っている墓穴
 振り向いたはずみぎっくり腰になり
 心臓に悪い話をひよいとする
 窓際の席に無気力置いてある
 丸出しにしてそろばんは別に持ち
 無為無策おんなは情に流される
 河内弁未だ丸出しにして社長

サークル檸檬

田形

凡九郎 美津枝 作二郎 素灯 寿美 甘平 浩一郎 国吉 外吉 文秋 美代 柳宏子 邦晴 千代三 天笑 智子 金太 重人 柳伸 小路 美緒報 智恵子 雅子 久子 美代 登美子 泰子 百合子 千代女

一人来て秋篠寺の深い秋
 しばらくはヒロインのくせうつつてる
 翠洋会
 乳呑児を抱いて離婚へ妥協せず
 持つ人は寝ている時も利子に利子
 作り笑い段々いたについて来る
 作られた観音竹はわけ知らず
 作るだけ始末は妻がする料理
 幸せな時はわからぬまです過ぎ
 草も虫もいつか土の中
 続編へあつさり十年とばされる
 時は金時は命の時きざむ
 よい時に来たねとバーで飲み直し
 妥協して父は淋しい顔になる
 神様が時々釘を打ちにくる
 土塀から最新型が走り出る
 竹とんぼならば作れるお父さん
 富柳会
 合図などせんでも解る五十年
 つまらな答だけれどやすらげる
 スカートの裾からのぞく池の月
 母さんの乳房はやすらぎのかたち
 タイガース勝つても負けても月は出る
 やすらぎがこんなに重い千羽鶴
 月光は傷む心に沁みこくる
 待ちかねる月の砂漠へ行くツアー
 やすらぎは自分で作る野菊草
 鍵つ子にやすらぎほしい日曜日
 ひとときのやすらぎがあるマスカット
 夏の月後姿に見せる隙
 陽の当るくらしがしたい昼の月

中西兼治郎報

兼治郎 兼治郎 綾子 光江 照子 春子 君子 為子 登志実 楓子 鬼遊 文次 美代 莊次 森子 弘生 章久 みつえ 山久 花梢 維久子 美緒

写真とる合図が出たらハイチーズ
儚さは夏目雅子と月見草

石見川柳会

中川

幸一報

千代女
泰子

美磯

弁治郎

久道

多賀子

寿子

久栄

功

勝子

久代

由紀子

佐吉

秋峰

進

昭二

桜水

由郎

裕

代仕男

八郎

よし子

重六

きみえ

秀子

文子

純子

軒太楼

土壇場で黒い予感と向い合う
飽食も飢えも抱えている地球
底辺を生きたる心の米を研ぐ
人生の死角にあった父の椅子
黒髪を梳いて女はドラマ産む
検診の結果の中に闇がある
土壇場に臨む女は紅を塗り
否定した神に土壇場で出合う
妻病んで皿のバランス崩れたす
父無言朱盃の底のお立ち酒
新任の椅子を試しにハエが来る
無駄になる金も予算に組んである
まだ生きているぞと金魚の背な泳ぎ
水槽の金魚にも居るいじめっ子
黒髪が愛の風呼ぶ女坂
黒髪に色香包んだ喪服脱ぐ
ふくらんだ胸検診が恥ずかしい
挑戦を捨てたら椅子が軋み出す
灯を消せば尾鰭たたんで寝る金魚
黒髪の手弱女過去の夢に住む
藻をくぐりくぐり金魚の円舞曲
初孫か嫁の検診期待かけ
思春期の黒髪風がもてあそぶ
検診で命を拾う手術台
東西のバランス核の目が光り
癌検診笑顔の消えた待時間
膝にくる孫に毎日ひげを剃り
黒髪もうすく尼僧の懺悔の記

ガン検診不安な顔の列に入る
倉吉川柳会

久美子
善句報

壽満湖

康子

碧水

壽朗

喜美子

英治

柳風

千秋

秋人

次男

ゆり子

文子

完司

みなと

やえ

瑞枝

雄々

秋女

荒介

石花菜

御前

満春

松女

明

あや子

千代

独歩

励まして柳に蛙の面をえがく
水撒けばやせた蛙が顔を出す
銀行は便利便利と振り込ませ
縁あって転んだボール拾われる
カブセルで内辨慶の蛙飼う
目をみはる便利な世だが金次第
便利さが親孝行の手を省き
満月に私の星が見付からぬ
方向の音痴を正す北の星
便利だが時に不便なベルが鳴る
また一つゲートボールのメダル増え
公園の隅であしたを待つボール
白鳥に焦がれ死にすする蛙の子
見送った絶好球にわらわれる
膳のないボールで空気が入れられぬ
久々の雨に坐禅を解く蛙
マジシャンの帽子に飛んだ蛙の子
父の灯はめつたに消さぬやせ蛙
父の夢子の夢ボールは知っている
炎昼に水を撒くなり私の忌
ハレーの尻尾で東西の塵を掃く
中年の猫でボールと遊ばない
最高の便利重宝妻がいる
蛙の子偏差値などはまだ知らず
蹴り上げたボール夕日になっていた
進化論ボールのヘソが見つからぬ
おふくろの味クレープで買ってくる
胃に悪い話はしない流れ星
星が砂糖と死ぬまで思ってお馬鹿さん

豊中もくせい川柳会
田中

正坊報

虫干しの母の形見の似合う歳

虫の音を聞きいつている仕舞い風呂

十字架を背負って標本箱の虫

幸せな時妹の文は来ず

妹が嫁いで友の足遠く

妹の助太刀あつて暗れの宴

澄みわたる空に流れる祭笛

石垣の石は十五箇澄んでいる

一田玉昨日の場所所にそのまんま

天皇の若き帽子を振ってみせ

もう若くないよと医者に叱られる

たくましい若さが踊る床運動

天高く馬も私もまた肥えた

豆腐屋の倅家業を継ぐ気なし

たのしみも中ぐらいです敬老会

コロコロと音で飲んでるラムネ瓶

物忘れておほかとほめられる

極限であなたも遺書を書けますか

捨て猫がどこまでも来る月の道

南大阪川柳会

中川

滋雀報

薬にすがつて戦後を生きて来た事実

事実つとめて空しい風に逢う

全力を出したそれで差があつた

残念な次の闘志に振り向ける

いつの日か解る事実耐えている

後輩に先を越された苦い酒

残念なことが続いて秋になる

全力を上げても遺族もどかしい

富子
美祢子
よし子
房子
春子
正坊
作二郎
満女
武庫坊
寿美子
明吉
博隆
福一
登志実
きく子
紫香
作二郎
洋子
恒明
文秋
雀踊子
信治
智子
久子
恭太
凡九郎

■各地句会だより

駒つなぎ川柳会

里 小路

思えば昭和二十七、八年頃だった。岸南柳氏から路郎師を迎えての句会を開く案内を貰った。当夜は豆秋、白柳子、南柳、良平、陽人、英生、小路の七名（路郎師は欠席）この日が「駒つなぎ」に繋がる第一回の句会だった。それ以来小松園氏を迎え、また芦穂氏にも依頼する等、いろいろ手を尽し同好の士に呼びかけたが、結果は意の如くならぬまま十年余。業界機関紙の働き等で念願の「駒つなぎ川柳会」が誕生した。時に昭和四十一年丙午の春（会名は午年に因む）。日本橋三丁目協栄信用組合の会議室を会場として清水白柳氏を迎え発会の句会を開催、以来、南柳氏を主宰に月例会へ伸展し、その時から参加した美代、弥栄子、規不風、柳伸のみなさん等、後年の好作家が続々と生れたのである。

その後、句会場は南柳氏居に移り、白柳、

小松園、摩天郎、肖二夫妻、番傘の恭太、天守閣の喜正のみなさんご常連におんぶされて常に二十名を越える例会を迎えるまでに至った。句会終了後の柳談、放談等賑やいだ席を設けるのも南柳氏の好みで、又それが会の和みに一層輪をかけ、ご機嫌での散会が恒例ともなった。

五十三年九月岸南柳氏は九十一歳の天寿を全うされて、同時に当会の灯が消えかかった苦難の一ときもあつたが、周囲のご支援により細やかな灯が点り、徐々に再起の道が開けたのである。

五十四年春、堀内柳仙さんの強力な加入があつて以来「駒つなぎ」のイメージは一変した。彼の手腕は当時を知る者は知る。新制「駒つなぎ」の得難い功労者であり、又スポンサーでもあつた。当会の姿勢が一段と充実したのもその頃からである。

五十六年には日川協に加盟、月を追って盛会の一途を歩み、一泊旅行も彼の案で毎年恒例ともなりユニークな徹夜句会等も思い出の一こまとして懐かしい。

その柳仙さんの急逝（五十七年十月）には驚愕した。文字通り的大ショックだったが、会の運営には酔々、雀踊子さん等の助言、句

会では幅広い柳安子さんの指導を得、また長期間あのユニークな句報作製にお世話いただいた千代三さん、その他多くの方々のご支援と、その間当会柳伸の内外に亘る活発な行動が現在の月例会句会を、投句者を加えて常に四五十名はご参加いただく句会にまで発展し、他句会と肩を並べられるまでに成長したのである。

創始者岸南柳氏もさぞやにこやかに見守つていて下さると思つた。

今年三月十八日、当会の今は亡き柳友の慰霊祭を野崎の不動尊に於て有志で行い、去る五月には細やかながら「駒つなぎ」発足二十周年記念句会を開催出来たことも日頃ご支援下さる柳友諸賢のお蔭と感謝しております。多くの方々のご協力で「駒つなぎ」は本当に恵まれた川柳会であると存じます。今後共一層のご支援をお願い申し上げます。

川柳塔柳箋

一冊 二一〇円
送料 二百四十円

11 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土) 午後1時半より ねたむ・背広・皿	慈 雲 寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	10日(日) 午後1 時より 見抜く・旅・偲ぶ	県民文化会館 4 F (県庁前) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3 枚
菜 の 花	10日(日) 夕 6 時より 仕度・港・働く・ウインク	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩 5 分 〒581 八尾市山本町 5-4-6 内海幸生
もくせい 川 柳 会	18日(月) 午後1時半より 完璧・ぶらぶら・点・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘 8 番87-2 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(火) 夕 6 時より 内緒・憎い・塗る・値打	寺田町高松会館 大阪市阿倍野区天王寺町北1丁目3-11 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
堺川柳会	19日(火) 夕 6 時より おでん・重い・おまけ・音	堺青少年センター 3 F 阪堺線緑之町西南 〒590 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21日(木) 午後1 時より 夜警・立話・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩 5 分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町 3-19 辻 白漢子 句会費 500円 投句料 200円(少額切手)
富 柳 会	21日(木) 午後1 時より 奇跡・恋・熱	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台 3-22-18 藤田泰子
南海電鉄 川 柳 部	21日(木) 夕 6 時より 終点・未来・アンテナ	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波 5 丁目 1 番10号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1 枚
西宮北口 川 柳 会	25日(月) 午後1 時より 菊・爪・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 200円(郵便切手可)
駒つなぎ 川 柳 会	25日(月) 夕 6 時より 遅刻・思案・立消え・年末	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南歩 5 分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里 義治(小路)
東 大 阪 川柳同好会	30日(土) 夕 6 時より 霜・文化・骨董・風船	東大阪市社会教育センター2F 近鉄布施駅北5分 〒579 東大阪市新池島町1-4-14 齊藤三十四 句会費 500円 投句料 60円切手 3 枚
川柳ねやがわは川柳大会のため例会は休み		

★特に記載なき場合、句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町 1-29-1 宮園射月芳

編集後記

☆栞主幹のお祝いの会は、華やかで和やかで、ご夫妻のお喜びは一人であった。また、参会者各位にも深い感路を与え、多くの賛辞を頂戴した。川柳塔の仲間がそれぞれの持ち場で精一杯に責任を全うした結果で、主催者の一人として、いい親孝行が出来たと喜んでい

る。ご支援頂いた他社の方々をはじめ、遠方からのご参加諸氏に厚くお礼申し上げます。

☆別冊の祝賀大会号を編集のだが、本誌にもその一端を掲載し、川柳塔二十年の歴史の積み重ねのたまものを、また、新しく入れ替わった血の清新さを実感銘記した。

☆栞主幹には益々のご健勝をお祈りするばかりである。☆阪神タイガース二十一年ぶりの優勝を目前にして、ファンの熱狂ぶりは凄い。

☆タイガースのチームカラーやファン気質は、藤村富美男、江夏豊に代表される

アウトローに近い熱血漢的なものから、ヤワな方向に移りつつあるようだ。助っ人バースを別にして、スケールが小さくなった今年、優勝が出来たのは、実力プラス「アルファ」のもたらしたものである。

☆タイガースは今年、球団創立五十周年を迎えた。今年の優勝に備え、会社は昨年本社事務所を大阪から甲子園球場内に移し、監督を更迭した。今年になって社長をも交代させた。

☆「川柳にみる大阪」のタイガースの項の執筆に当り、私はその意気込みからチーム力のプラスアルファを予想して、希望的観測ながらタイガース優勝を強調したのである。出版社の都合で書き直したのが、今

になってみれば、書き直さなければ山本規不風氏以上の予知力を自慢出来たのに☆さて、獅子と虎の日本シリーズ、昨年、阪急のブリーズが広島投手陣にマリークされて惜敗したのと同様、バースを生かし切れない

ければ、百獣の王に名をなさしめよう。

☆トラ歳は来年だ。(薫)

▼何とも騒々しい昨今である。豊田商事一連の事件、

「悪いことすると誰かに殺される」。日航機墜落事故

「一年一組川上咲子はおもういない」。阪神タイガース

の優勝ムード。「虎キチの夫に妻も随いて来る」。何

かが何処かで狂っているように思えてならない。そんな巷で川柳をやっているのも狂というべきだろう。

▼学校教育、企業内管理に加えて、靖国神社公式参拝

日の丸掲揚、君が代斉唱など目に見えないタガの圧迫

を感じるのには異常な神経なのだろうか。

▼「戦後四十年」と云われ深い意味も解せず、皆も

私も、この言葉を安易に使っているが、戦時中の商工

大臣が戦後の総理になったように、今も忘わしい尾を

曳きずっている。川柳における五・七・五の下五のど

んでん返しは面白いが、世の中が急変して一億一心に

ならないよう祈りたい。

▼ある川柳大会で「関西の句風は、愛と情と思いやり

が三要素にとって替わった」と聞いた。異論もあるが

納得する面もあるにはある。▼行き付けの書店にゆく。

書棚には虫巻の書があり、店員が荷を解いている。主

人が返本を荷造っている。毎日々々おびたらしい本の

洪水である。しかし川柳句集が店頭で売られることは

無いに等しい。ゆえに一般大衆の目にふれることがない。〇〇入荷のビラが

貼られる日を希う。(き)

☆目を酷使するな、と言われて近頃、新聞・雑誌・本のたぐいはトンと読まなく

なり、テレビもなるべく遠ざけるようにしている。と

なると時間潰しの楽しみはラジオしかない。

☆家で仕事のときは、5時半になると何はともあれラジオのスイッチを入れる。

OBCの竹村健一の「世相ホットライン」を聞き、45分

からABCの小沢昭一の「小沢昭一的心」を聞き、6

時になるとニュース、そしてスポーツ放送というのが

夕食前の日課だ。夜は夜でヤング番組はそれなりに愉快だし、NHK第二9時45

分からの「朗読」も必聴のもの。最近では草野大悟の

「三四郎」(漱石)が面白かった。その前の加賀見幸

子の「秀吉と利休」(野上弥生子)も聞きものであ

った。

☆ところで新聞のテレビ・ラジオ欄、あれはラジオに

対して実に不親切だと思

う。前述の番組にしても、△世相▽△昭一▽と紹介

してあるだけ。もともと、それで却って番組探検の期

待もふくらむと言えるわけ

で、あちこちダイヤルを回

して、思いがけずいい番組に出くわしたりすると

宝物を一人占めにしたような気持ちになり、これは誰にも教えてやるもんか、ナン

て思ったりするのである。☆そういう、ひそやかな愉しみ方もラジオの魅力の一つかもしれない。(史)

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風
 (掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三
 (掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫
 (掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること) 投稿随時

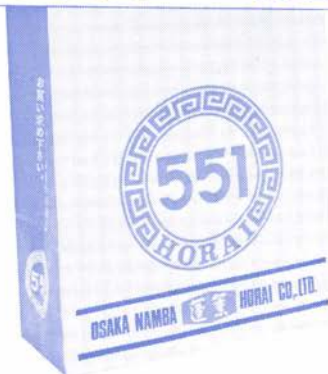
自由課題・秀句には掲載紙贈呈

〈投稿先〉

〒五三〇・大阪市北区中之島二丁目二番 朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551